り。和字四十八字をいろはと云ふがごとし。學んで時に之を習ふとよめば、ての字、にの字、をの字は、皆てには也。やまと歌は、人の心を種としてと讀めば、はの字、をの字、ての字、皆てには也。又和語のてには、上下相對するならひあり。ぞける、こそけれ。にけり、てけれ。是上をぞと云へば、下はけると云ひ、花ぞ散りけると云ふべし。花ぞちりけりとは云ふべからず。上にてこそと云へば、下はけれと云ふべし。上にてこそと云ひて、下にてけりと云ふべからず。にけり、てけれも、是を以て知るべし。又はし、ぞきと云ふは、上をはといへば、下はしと云ひ、上をぞと云へば、下はきといふ。たとへば、鐘の音はうし、鐘の音ぞうき、此類を云ふ。是皆てにはの習ひなり。かなづかひ開合と、てにはを知らで、和文和歌を書けば、ひが事多くして笑ふべし。

和俗童子訓卷之五

○教二女子一法

一男子は外に出でて、師に從ひ、物を學び、朋友に交り、世上の禮法を見聞するものなれば、親の教のみにあらず、外にて見聞する事多し。女子は常に内に居て、外に出でざれば、師友にしたがひて、道を學び、世上の禮義を見習ふべきやうなし。ひとへに親の教を以て、身を立つるものなれば、父母の教怠るべからず。親の教なくて育てぬる女は、禮義を知らず、女の道にうとく、女德を愼まず、且女功のまなびなし。是皆父母の子を愛する道を知らざればなり。

一女子を育つるも、初は大やう男子と異なる事なし。女子は他家に行きて、他人に事ふるものなれば、ことさら不德にては、舅姑夫の心に叶ひ難し。幼くて生先こもれる窻の内より、能く教ふべき事にこそ侍れ。不德なる事あらば、早く戒むべし。子を思ふ道

生先こもれる窻の内より―なほ前

途の春秋に富み深窓の内に養はれて在る頃より の意

嫫母―纂文に、嫫母は醜人也黄帝愛幸す

無鹽―新序雑事篇に、鍾離春は齊の婦人極醜無雙也號して無鹽女といふ云々

張華―字は茂先、晉の范陽方城の人、博覽多識にして又忠誠の士なりしが後趙王倫の爲に害せらる

物言さがなく―物の言ひ方慎み無きないふ

おぞましく―忌み嫌ふべくの意

かいひそめて―内氣にしとやかにして出過ぎざるないふ

曹大家―後

に迷ひ、愛に溺れ、姑息して其悪しきことをゆるし、其性をそこなふべからず。年に隨ひて、まづ早く女徳を教ふべし。女徳とは、女の心ざまの正しくして善なるを云ふ。凡女は、容より心の優れるこそめでたかるべけれ。女徳をえらばず、容を本としてかしづくは、いにしへ今の世の悪しきならはしなり。古の賢き人は、容の勝れてみにくきをも嫌はで、心ざまの勝れたるをこそ、后妃にもかしづき備へさせ給ひけれ。黄帝の妃嫫母、齊の宣王の夫人無鹽は、何れも其容極めてみにくかりしかど、女徳ありし故に、かしづき給ひ、君の助となられける。周の幽王の后褒姒、漢の成帝の趙飛燕、其妹趙婕妤、唐の玄宗の揚貴妃など、其容は勝れたれど、女徳なかりしかば、皆天下のわざはひとなり、其身をも保たず。諸葛孔明は、好んで醜婦を娶られしが、色欲の迷なくて、智も志も、いよ〳〵精明なりしとかや。是を以て、婦人は心だによからんには、容みにくくとも、かしづきもてなすべき理なれば、心ざまをひとへに慎み守るべし。其上、容は生れつきたれば、いかに見苦しとても變じ難し。心は悪しきを改めて、よきにうつさば、などか移らざらん。いにしへ張華が女史の箴とて、女の戒になれる文を作りしにも、人皆其容をかざる事を知りて、其性をかざる事を

知る事なしと云へり。性をかざるとは、生れつきの悪しきを改めて、よくせよとなり。かざるとは、偽り飾るとにはあらず。人の本性はもと善なれば、幼きより善道にならはゞ、などか善き道に移り、よき人とならざらんや。是を以て、いにしへ女子には、女徳を専に教へしなり。女の徳は和順の二をまもるべし。和とは心を本として、かたち言葉もにこやかに、うらゝかなるを云ふ。順とは人に從ひて背かざるを云ふ。女徳のなくて和順ならざるは、腹きたなく人をいかり詈りて、心猛く氣色けうとく、面はげしく眼おそろしく見いだし、人をながしめに見、言葉あらゝかに、物言さがなく口きゝて、人にさきだちてさかしらし、人を恨みかこち、我が身にほこり、人を誇り笑ひ、われ人にまさり顔なるは、すべておぞましく悪し。是皆女徳に背けり。是を以て、女は唯和順にして貞信に、情深くかいひそめて、しづかなる心の趣ならんこそあらまほしけれ。

一婦人は人に事ふるものなり。家に居ては父母に事へ、人に嫁しては舅姑夫に事ふるに、慎みて背かざるを道とす。もろこしの曹大家が言にも、敬順の道は婦人の禮なりと云へり。然れば女は敬順の二を常に守るべし。敬とはつゝしむなり、順はしたがふな

漢の班昭字は惠姫なり、彪の女、曹壽の妻にして漢書の著者班固の妹也、大家は女の尊稱

り。つゝしむとは恐れて恣ならざるを云ふ。つゝしみにあらざれば、和順の道も行ひ難し。およそ女の道は順を尊ぶ。順の行はるゝは、ひとへに愼むよりおこれり。詩經に、戰々とつゝしみ、兢々とおそれて、深き淵に臨むが如く、薄き氷を履むが如しと云へるは、恐れ愼むの心をかたどりて云へり。愼みて恐るゝ心持、斯の如くなるべし。

一女は人につかふるものなれば、父の家富貴なりとても、夫の家に行きては、其親の家に在りし時より、身をひきくして、舅姑にへりくだり、愼み仕へて、朝夕のつとめ怠るべからず。舅姑のために衣を縫ひ、食を調へ、我が家にては、夫に仕へて高ぶらず、自ら衣をたゝみ、席をはき、食を調へ、うみ、つむぎ、縫物し、子を育てゝけかれを洗ひ、婢多くとも、萬の事に自ら辛勞をこらへて勤むる、是婦人の職分なれば、我が位と身に應ぜぬほど、引きさがり勤むべし。斯のごとくすれば、しうと夫の心に叶ひ、家人の心を得て、能く家を保つ。又我が身に高ぶりて人をさし使ひ、勤むべき事に怠りて、身を安樂に置くは、しうとに憎まれ、下人に謗られて、人の心を失ひ、其家を能く治むる事なし。かゝる人は、婦人の職分を失ひ、後の幸なし。愼むべし。

男は外を治め云々—易に、女は位を内に正し男は位を外に正す男女正しきは天地の大義也

玄紞—國語に王后親ら玄紞を織ると見ゆ、玄紞は赤黑き冠の瑱（みみふさぎ）の紐也

女に四行—四行の事、曹昭が婦行を論じたる文に出で、本文と大同小異也

なよよか—なよやかと

一いにしへ天子より以下、男は外を治め、女は内を治む。王后以下、皆内政を勤め行ひて、婦人の職分あり。今の世のならひ、富貴の家の婦女は、内を治むるつとめうとく、織縫の業におろそかなり。いにしへ我が日の本にては、かけまくもかしこき天照大神も、自ら神衣を織りたまひ、齋服殿にましゝける。其御妹稚日女尊も亦しかり。是日本紀に記せり。もろこしにて、王后みづから女紞を織り給ふ。公侯の夫人、位貴しといへども、皆自らきぬをおれり。今の士大夫の妻、安逸にほこりて女功を勤めざるは、古法にはあらず。

一女に四行あり。一に婦德、二に婦言、三に婦容、四に婦功、此四は女の勤め行ふべきわざなり。婦德とは心だてよきを云ふ。心貞しくいさぎよく、和順なるを德とす。婦言とは言葉のよきを云ふ。僞れることを言はず、言を擇びていひ、にげなき惡言を出さず、言ふべき時言ひて、不用なる事を言はず、人其言ふ事をきらはざるなり。婦容とは形のよきを云ふ。あながちに飾を專にせざれども、女は容なよよかにてをゝしからず、粧のあてやかに、身持きれいにいさぎよく、衣服のあかづき穢なき、是婦容なり。婦功とは女のつとむべきわざなり。ぬひ物をし、うみつむぎをし、衣服を調へ

いふに同じ、やさしくしとやかなるを云ふをとこもじ—漢字をいふ、これに對して假名を女文字と云へり

て、專つとむべきわざを事とし、戯れ遊び笑ふ事を好まず、食物飲物いさぎよくして、しうと夫賓客に進むる、是皆婦功なり。此四は女人の職分なり、つとめずんばあるべからず。心を用ひてつとめなば、誰もなるべきわざなり。怠りすさみて、其職分を空しくすべからず。

十歳より和字を習はしめ、又をとこもじをも習はしむべし。淫思なき古歌を多く讀ましめて、風雅の道を知らしむべし。是また男子の如く、初は數目有る句、短き事ども許多よみ覺えさせて後、孝經の首章、論語學而篇、曹大家が女誡など讀ましめ、孝順貞潔の道を教ふべし。十歳より外に出ださず、閨門の内にのみ居て、おりぬひ、うみつむぐわざを習はしむべし。假にも淫佚なる事を聞かせ知らしむべからず。小唄淨瑠理三味線の類、淫聲を好めば、心をそこなふ。かやうの賤しきたはぶれたる事を以て、女子の心をなぐさむるはあしゝ。風雅なるよき事を習はしめて、心をなぐさむべし。此比の婦人は、淫聲を好んで女子に教ふ。是甚風俗心術をそこなふ。幼き時惡しき事を見聞き習ひては、早く移り易し。女子に見せしむる草紙もえらぶべし。古の事しるせるふみの類は害なし。聖賢の正しき道を教へずして、ざればみたる小唄淨瑠理

び以て衣服に共す

三從—儀禮喪服篇に、婦人三從の義有り、專制の道無し故に未だ嫁せざれば父に從ひ、既に嫁しては夫に從ひ、夫死しては子に從ふ

本など見せしむる事なかれ。又伊勢物語、源氏物語など、其詞は風雅なれども、かやうの淫俗の事を記せるふみを、早く見せしむべからず。又女子も、物を正しく書き、算數を習ふべし。物書き算を知らざれば、家の事を記し、財を計ること能はず。必是を教ふべし。

一婦人には三從の道あり。凡婦人は、柔和にして人に從ふを道とす。我が心に任せて行ふべからず。故に三從の道と云ふことあり。是亦女子に教ふべし。父の家に在りては父に從ひ、夫の家にゆきては夫に從ひ、夫死しては子に從ふを三從と云ふ。三のしたがふなり。幼より身を終るまで、我が儘に事を行ふべからず。必人に從ひてなすべし。父の家に在りても、夫の家に行きても、常に閨門の内に居て、外に出でず。嫁して後は、父の家に行くことも稀なるべし。況や他の家には、やむ事を得ざるにあらずんば、輕々しく行くべからず。唯使を遣はして、音問を通し、親みをなすべし。其つとむる所は、しうと夫につかへ、衣服をこしらへ、飲食を調へ、内を治めて、家をよく保つを以てわざとす。我が身にほこり、かしこだてにて外事にあづかること、ゆめ〳〵有るべからず。夫を凌ぎて物をいひ、事を恣に振舞ふべからず。是皆女の戒む

七去―孔子の言也、小學に出づ

容こそ云々―徒然草に、品形こそ生れつきたらめ心はなどか賢きより賢きにもうつさばうつらざら

べき事なり。詩經の詩に、彼に在りても惡まるゝ事なく、此に在つてもいとはるゝ事なしと云へり。婦人の身を保つは、常に愼みて、斯の如くなるべし。

一婦人に七去とて、惡しき事七あり。一にても有れば、夫より逐ひ去らるゝ理なり。故に是を七去と云ふ。これ古の法なり。女子に敎へきかすべし。一には父母に隨はざるを去る。二に子なければ去る。三に淫なれば去る。四に嫉めば去る。五に惡疾あれば去る。六に多言なれば去る。七に竊盜すれば去る。此七の内、子なきは生れつきなり、惡疾はやまひなり。此二は、天命にて力に及ばざる事なれば、婦のとがにあらず。其餘の五は、皆我が心より出づるとがなれば、愼みて其惡を止め、善に移りて、夫に去られざるやうに用心すべし。凡人の容こそ生れつきたれば改め難かるべけれ、心は變ずる理あれば、我が心だに用ひなば、などか愚なるより賢きにも遷さばうつらざらん。然れば我が惡しき生れつきを知りて、力を用ひ惡しきを改めて、善きに移るべし。此五の内、まづ父母に順はざるとは、夫の家に在りて、舅姑に順はざるは、婦人第一の惡なり。然れば夫の去るはことわりなり。次に妻を娶るは子孫相續の爲なれば、子なければ去るもむべなり。されど其婦の心和かに行正しくて、嫉妬の心なんと云ひ、擊蒙要訣立志章に、人の容貌は醜を變じて妍と爲す可からず（中略）惟心志に有つては以て愚を變じて智と爲し不肖を變じて賢と爲すべし云々

よつぎをひろむる―子孫繼嗣の多からん爲に妾婢を養ふ事も有りと也

く、婦の道に背かずして、夫しうとの心にかなひなば、夫の家族同姓の子を養ひ、家を繼がしめて、婦を出すに及ばず。或は又妾に子あらば、妻に子なくとも去るに及ぶべからず。次に淫亂なるは、我が夫に背き、他の男に心をかよはすなり。婦女は萬の事いみじくとも、此穢行だにあらば、何事のよきも見るに足らず。是女の堅く心に戒め愼むべき事なり。妬めば夫を恨み妾を怒り、家の内亂れて治まらず。又高家には婢妾多くして、よつぎをひろむる道もあれば、ねためば子孫繁昌の妨となりて、家の大なる害なれば、是を去るもむべなり。多言は口がましきなり。詞多く、物いひさがなければ、父子兄弟親戚の間も、言ひ妨げ、不和と成りて、家亂るゝものなり。古き文にも、婦に長舌あるは是亂の階なりと云へり。女の口のきゝたるは、國家の亂るゝ基となると云ふ意なり。また尙書に、牝鷄の晨するは家の索也と云へり。鷄のめどりの時をうたふは、家のおとろふる禍となるが如く、女の男子の如く物いふ事を用ふるは、家の亂となる。およそ家の亂は、多くは婦人より起る。婦人の禍は必口より出づ、戒むべし。竊盜とは、物盜みする也。夫の財を盜みて自ら用ひ、或は我が父母兄弟、他人に與ふるなり。もし用ふべく與ふべき事あらば、しうと夫に問ひ、

婦に長舌あるは云々―詩經大雅瞻仰篇に、婦に長舌有るは維れ厲の階、亂は天より降るに匪ず婦人より生ずすさめられ―疎んじさげすまるゝをいふ

命を受けて用ふべし。然るに夫の財をひめて　我が身に私し、人に與へば、其家の賊なれば、是を去るもむべなり。女は此七去の内、五を恐れ慎みて、其家を出でざらんこそ、女の道も立ち、身の幸ともなるべけれ。一たび嫁して、其家を出され、たとひ他の富貴なる夫に嫁すとも、女の道にたがひぬれば、本意にあらず、幸とはいひ難し。もし夫不徳にして、家貧賤なりとも、夫の幸なきは、婦の幸なきなれば、天命の定まれるにこそと思ひて、愁ふべからず。

一凡女子を愛し過して、恣に育てぬれば、夫の家に行きて、必おごりおこたりて、他人の氣に合はず、終にしうとに疎まれ、夫にすさめられ、夫婦不和になり、おひ出され、恥をさらすもの多し。女子の父母、我が教なき事を恥ぢずして、しうと夫の悪しきとのみ思ふこと愚なり。父母の教なかりし女子は、夫の家に行き、しうとの教正しければ、せわらしく堪へ難く思ひて、しうとを恨み謗り、中悪しくなる。親の家にて教なければ、斯の如し。

一女子には早く女功を教ふべし。女功とは、織り、縫ひ、うみ、つむぎ、すゝぎ、洗ひ又は食を調ふるわざをいふ。女人は外事なし。かやうの女功を勤むるを以てしわざとたはれたる行―淫逸にして亂りがはしき行の義

ざればみて―洒落にして戯れたる樣なるをいふ

す。殊に縫物するわざを能く習はしむべし。早く女のわざを教へざれば、夫の家に行きて、わざを勤むる事ならず、人にそしられ笑はるゝものなり。父母となれるもの、心を用ふべし。

一凡女子は、家にありては父母に事へ、夫に嫁しては、しうと夫に親しくなれ近づきて事ふる者なれば、其身をきよくして、けがらはしくすべからず。是また女子のつとむべきわざなり。

一父母となる者、女子のいとけなきより、男女の別を正しくし、行儀をかたくいましめ教ふべし。父母の教なく、たはれたる行あれば、一生の身を徒にすて、名をけがし、父母兄弟に恥を與へ、見聞く人に爪はじきをせられん事こそ、口惜しく淺ましきわざなれ。萬いみじくとも、塵ばかりもかゝる事あらば、玉の盃のそこなきにも劣りなん。俗の諺に、萬能一心と云へるも、かゝる事なり。是を以て、女は心一つを貞しく潔くして、如何なる變にあひて、たとひ命を失ふとも、節義を堅く守ること、此生後の世までの面目ならめ。常に心遣ひをして、身を守る事堅きに過ぎたらん程はよかるべし。人に向ひ、やはらかにざればみて、かろらかなるは、必節義を失ひ

たはれの心の云々―心和順なると淫逸にして節操を守る事無きとは全く別物なりとの義

夫の衣桁に云々―禮記内則に、男女椸枷を同じうせず、敢て夫の揮椸に縣けず

あやまちの出來るもとゐなり。和順ゐ女徳とすると、たはれの心の、やはらかにして守りなく、かろびたると、其すぢかはれること、云ふにおよばず。古人は、兄弟といへども、幼より男女席を同じくせず、夫の衣桁に妻の衣服を懸けず、衣服も同じ器にをさめず、衣裳をも通用せず、ゆあみする所もことなり。是夫婦すら、別を正しくするなり。況や夫婦ならざる男女は、云ふに及ばず。男女の分、内外の別を正しくするは、古の道なり。

一いにしへ、女子の嫁する時、其母中門まで送りて、戒めて曰く、汝が家に行きて、必慎み、必戒めて、夫の心に背くこと勿れと言へり。是古の女子の嫁する時、親の教ふる禮法なり。女子の父母、能く此理を言聞せ戒むべし。女子も、また此理を心得て、守り行ふべし。

一又女子の嫁する時、兼てより父母の教ふべき事十三ケ條あり。一曰、我が家にありては、我が父母にもはら孝を行ふ理なり。されども夫の家に往きては、もはら舅姑を、我が二親よりも猶重んじて、厚く愛み敬ひ、孝行を盡すべし。親の方を重んじ、しうとの方を輕んずる事なかれ。しうとの方に、朝夕の見舞を缺くべからず。しうとの方の務むべきわざを怠るべからず。若しうとの命あらば、慎み行ひて背くべからず。凡の事、舅姑に問ひて、其教に任すべし。舅姑もし我を愛せずして、謗り惡むとも、怒り恨むる事なかれ。孝を盡して、誠を以て感ぜしむれば、彼もまた人心あれば、後は必心和ぎて、いつくしみある理なり。二曰、婦人は別に主君なし。夫を誠に主君と思ひて、敬ひ慎みて事ふべし。輕しめ侮るべからず。和ぎ順ひて、其心に違ふべからず。凡婦人の道は從ふにあり。夫に對するに、顔色言葉遣慇懃にへり下り、和順なるべし。いぶりにして不順なるべからず。おごりて無禮なるべからず。是女子第一のつとめなり。夫の教いましめあらば、其命に背くべからず、疑はしき事は、夫に問ひて、其命を受くべし。夫問ふ事あらば、正しく答ふべし。其いらへおろそかにすべからず。答の正しからず、其理聞えざるは無禮なり。夫もし怒り責むる事あらば、おそれて從ふべし。怒り爭ひて、其心に逆ふべからず。それ婦人は夫を以て天とす。夫を侮ることは、かへすぐ〳〵あるべからず。夫を侮り背きて、天より怒り責めらるゝに至るは、是婦人の不徳の甚しきにて、大なる恥なり。故に女は常に夫を敬ひ畏れて、慎み事ふべし。夫に賤められ責められるゝは、我が心より出でたる恥なり。三曰、こじ

いぶりにして―この語意明かならず、思ふに威振の誤れる訓か、或は俗語にぶりぐ〳〵してといふ類にて、和順ならず態度の素直ならぬをいへるならん

敢て夫の筐笥に藏せず、敢て温沿せず

夫を以て天とす―左傳に、婦人室に在りては則ち父を天とし、出でては則ち夫を天とすと見え、又類書纂要にも、婦は夫を以て天と爲し子は父を以て天と爲す云々

あひよめ―夫の兄弟の妻をいふ

夜半にや君

うと、こじうとめは、夫の兄弟なれば、情深くすべし。又こじうと、こじうとめに謗られ惡まるれば、しうとの心に背きて、我が身の爲にもよからず。睦じく和睦すれば、しうとの心にかなふ。然ればこじうとの心も亦失ふべからず。又あひよめを親しみ睦じくすべし。ことさら夫のあに嫂はあつく敬ふべし。あによめをば我が姉と同じくすべし。座につくも、道を行くも、へり下り後れて行くべし。四曰、嫉妬の心、ゆめ〳〵おこすべからず。夫淫行あらば諫むべし、怒り恨むべからず。嫉妬甚しければ、其氣色言葉もおそろしく、すさまじくして、かへりて夫に疎まれ、すさめらるゝものなり。業平の妻の、夜半にや君がひとり行くらんと詠みしこそ、誠に女の道にかなひて、やさしく聞ゆめれ。およそ婦人の、心猛く怒多きは、しうと夫に疎まれ、家人に謗られて、家を亂し人をそこなふ。女の道に於て大に背けり。腹たつことあらば、おさへて忍ぶべし。色に顯すべからず。女は物ねんじして、心ののどかなるこそ、幸も見はつる理なれ。五曰、夫もし不義あり過あらば、我が色を和げ、聲を悅ばしめ、氣をへり下りて諫むべし。諫を聽かずして怒らば、先しばらく止めて、後に夫の心和ぎたる時、また諫むべし。夫不義なりとも、顏色を烈しくし、聲をいらゝけ、心氣をあらく

が―風吹けばおきつ白波たつた山よはにや君がひとりこゆらん

物れんじして―物事のつらきを堪へ忍びての意

して、夫にさからひ背く事なかれ。是また婦女の敬順の道に背くのみならず、夫に疎まるゝわざなり。六曰、言を愼みて多くすべからず。假にも人をそしり、傷を言ふべからず。人の謗を聞くことあらば、心にをさめて、人に傳へ語るべからず。謗を言ひ傳ふるより、父子、兄弟、夫婦、一家の間も不和になり、家内治まらず。七曰、女は常に心遣ひして、其身をかたく愼み守るべし。夙におき夜半にいね、晝はいねずして家事に心を用ひ、怠なく勤めて、家を治め、織り、縫ひ、うみ、つむぎ、怠るべからず。又酒茶など多く好みて、癖とすべからず。淫聲を聞くことを好みて、淫樂を習ふべからず。是女子の心をとらかすもの也。たはぶれ遊を好むべからず。宮寺などすべて人の多く遊ぶ所に、四十歳より内は、妄に行くべからず。八曰、巫覡などのわざにまよひて、神佛を穢し近づき、みだりに祈り詔ふべからず。唯人間の勤をもはらになすべし。目に見えぬ鬼神の方に、心を迷はすべからず。九曰、人の妻となりては、其家を能く保つべし。妻の行惡しく放逸なれば、家を破る。財を用ふるに、儉約にして費をなすべからず。おごりを戒むべし。衣服、飲食、器物など、其分に隨ひて、あひ似合ひたるを用ふべし。みだりに飾をなし、分限に過ぎたるを好むべから

なづさひ―狎れ親むをいふ、なじむといふ語に當れり

とみの用―とみは頓の字音也、急用をいふ

らうたく―優しく上品なるを云ふ

す。妻おごりて財を費せば、其家かならず貧窮に苦めり。夫たるもの、是に打任せて、其是非を察せざるは、愚なりと云ふべし。十曰、若き時は、夫の兄弟親戚朋友、或は下部などの若き男來らんに、なづさひて近づきまつはれ、打とけ物語すべからず。慎みて男女の隔を固くすべし。如何なるとみの用あるとも、若き男にふみなどかよはする事は、必あるべからず。下部を閨門の内に入るべからず。凡男女の隔、輕々しからず、身を堅く慎むべし。十一曰、身のかざりも、衣服の染色模樣も、目に立たざるをよしとす。身と衣服との、穢れずしてきよげなるはよし。衣服と身のかざりに、すぐれてきよらを好み、人の目に立つ程なるはあしゝ。衣服の模樣は、其年よりはくすみておいらかなるが、尋常にしてらうたく見ゆ。すぐれてはなやかに、大なる模樣は、目にたちて賤し。我が家の分限に過ぎて、衣服にきよらを好み、身をかざるべからず。唯我が身にかなひ似合ひたる衣服か著るべし。心は身の主なり、尊ぶべし。衣服は身の外にあるものなり、輕し。衣服をかざりて人にほこるは、衣服より尊ぶべき其心を失へるなり。凡人は其心ざま、身の振舞をこそ、潔くせまほしけれ。身のかざりは外の事なれば、唯身に應じたる衣服をもちひて、あながちに飾りて外にかゞやかゝ

客をつとめて―佳節の當日はまづ夫の方の來客をもてなしあしらひての意

かたましく―奸也、心ねぢけてすなほならぬを云ふ

口がましく―口數多く出過ぎたるをいふ

人にほこるべからず。愚なる俗人、又賤しき下部、賤の女などに、衣服のはなやかなるを譽められたりとも益なし。よき人は、かへりて謗り賤むべきわざにこそあれ。十二曰、我が里の親の方に私し、舅姑夫の方を次にすべからず。正月佳節などにも、まづ夫の方の客をつとめて、親の里には、次の日行きてまみゆべし。夫の方をすてて、佳節に我が親の里に行くべからず。しうと夫の免さざるに、父母兄弟の方に行くべからず。私に親の方へ贈物すべからず。又我が里のよき事をほこりて、譽め語るべからず。十三曰、下女を使ふに、心を用ふべし。いふかひなきものは、ならはし惡しくて、智惠なく、心かたましく、其うへ物いふことさがなし。夫の事、舅姑の事、こじうとの事など、我が心に合はぬ事あれば、みだりに其主に謗り聞かせて、それをかへりて忠と思へり。婦人もし智惠なくして、それを信じては、必恨出來易し。固より、夫の家は皆他人なれば、恨み背き恩愛を捨つる事易し。慎んで、下女の言を信じ、大切なるしうと小じうとの親みを薄くすべからず。もし下女すぐれてかたましく、口がましくて惡しきものならば、早く追ひやるべし。かやうのものは、必家道を亂し、親戚の中をも言ひ妨ぐるものなり。恐るべし。又下女などの人を謗るを聞き用ふる事

なかれ。殊に夫の方の一類の事を、かりそめにも謗らしむべからず。下女の口を信じては、舅姑夫こじうとなどに和睦なくして、恨み背くに至る。慎んで讒を信ずべからず。甚恐るべし。又賤しき者を使ふには、我が思ふにかなはぬ事のみ多し。夫を怒りのりて止まざれば、せはしく腹立つ事多く、家の内静ならず。悪しき事は、時々言ひ教へて、誤を正すべし、怒りのるべからず。少しの過は、こらへて怒るべからず。心の内にはあはれみ深くして、外には行儀堅く、いましめて怠らざるやうに使ふべし。いるがせなれば、必行儀亂れ怠りがちにて、禮義を背き、とがを犯すに至る。與へ惠むべき事あらば、財を惜むべからず。但我が氣に入りたるとて、忠なきものに、みだりに財物を與ふべからず。

のりて―罵りての意、前にも屢〻見えたり

一およそ此十三ヶ條を、女子のいまだ嫁せざる前に、能く教ふべし。又書きつけて與へ、をり〳〵讀ましめ、忘るゝことなく、これを守らしむべし。凡世の人の女子を嫁せしむるに、必其家の分限に過ぎて、甚おごり、花美をなし、多くの財を費し用ひ、衣服器物などを、いくらも買ひとゝのへ、其餘の饗應贈答のつひえも亦夥し、これ世の習はしなり。されど女子をいましめ教へて、其身を慎み治めしむること、衣服器物をかざれるより、女子のため甚利益ある事を知らず、幼き時より嫁して後に至るまで、何の教もなくて、唯其生れつきに任せぬれば、身を慎み家を治る道を知らず、夫の家に行きて、おごり怠り、しうと夫に順はずして、人に疎まれ、夫婦和順ならず。或は不義淫行もありて、追出さるゝこと、世に多し。是親の教なきが故なり。古語に、人よく百萬錢を出して女を嫁せしむる事を知りて、十萬錢を出して子を教ふることを知らずと云へるがごとし。婚嫁の營に心を盡す十分が一の心遣を以て、女子を教へ戒めば、女子の、身を悪しくもてなし、禍に至らざるべきに、斯の如くなるは、子を愛する道を知らざるが故なり。

一婦人は、夫の家を以て家とするが故に、嫁するを歸ると云ふ。云ふ意は、我が家に歸るなり。夫の家を我が家として歸るゆゑ、一たび行きて歸らざるは、定まれる理なり。されど不德にしてしうと夫に背き、和順ならざれば、夫にすさめられ、しうとに惡まれ、父の家に追かへさるゝ禍あり。婦人の恥づべき事、是に過ぎたるはなし。もしくは、夫柔和にして、婦の不順をこらへて歸さゞれども、歸さるべきとがあり。されば人をゆるすべくして、人の爲にゆるさるゝは本意にあらず。

一凡婦人の心ざまの悪しき病は、和順ならざると、怒り恨むると、人を誘ると、物を妬むと、不智なるとにあり。凡此五の病は、婦人に十人に七八は必あり。是婦人の男子に及ばざる所なり。自かへりみ戒めて、改め去るべし。此五の病の内にて、殊更不智を重しとす。不智なる故に、五の病起る。婦女は陰性なり。陰は夜に属して闇し。故に女子は男子にくらぶるに、智少なくして、目の前なる然るべき理をも知らず、又人の誘るべき事を辨へず、我が身、我が夫、我が子の禍となるべき事を知らず、罪もなき人を恨み怒り、或はのろひとこひ、人を悪みて、我が身ひとり立てんと思へど、人に悪まれうとまれて、皆我が身の仇となる事を知らず、いとはかなく淺まし。子を愛すといへど姑息し、義方の教を知らず、私愛深くして、かへりて子をそこなふ。斯く愚なるゆゑ、年既に長じて後は、よき道を以て教へ悟らしめ難し。唯其甚しきをおさへ戒むべし。事毎に道理を以て責め難し。故に女子は、殊に幼き時より早く能く道を教へ、悪しきわざを戒めならはしむべからず。

のろひとこひ―とこひの語意味通せず、誤寫なるべし

五常訓序

聖門之學、以性爲本。五常其目也。五典其發也。循五常之性、而行五典之道、斯而已矣。若夫衆人、則不知性靈之爲貴。禽獸同群、草木與凋。豈不哀哉。益軒先生、自善其身、推以及人。其志在於愛斯人、以報答天地生育之洪恩。晩年所著尤多。專以導俗喩愚爲務。如俗訓童子訓等書、平易切實、未嘗用巧文麗辭爲工。且書以假字。令夫不識漢字者、亦能讀之、易通曉矣。頃又攜撫聖賢之遺言、發揮平日自得之緒餘、以作爲五常之義訓。亦從俗語以述之、用俗字而說之。雖庸劣昧愚之輩、讀之、則庶乎知良心之根秉彝、而得復初之階梯。嗚呼性豈易言哉。如子貢之穎悟、尚所難聞也。如斯書、其言則俗間之假字、而其編則不過數策。似不可以盡聖學

之梗槩。然洙泗之淵源、溯其流、濂洛之微言、撮其要。天人之精微、無不具備。至其日用行事切近工夫、亦無不深切著明。可謂言近而旨遠矣。正是終身用之、不能盡者也。其有補於世教、亦大矣。先生之齡已超八帙。愛物之志倍厚、而不倦著述之勞。繾綣之仁意、孰敢不嘉尚哉。夫著書以示人者、不善浮誇。讀書以自爲者、必貴切實。苟所謂樂春藻之繁華、而忘秋實之廿口者、非君子爲己之學也。吾恐覽斯編者、以其近而忽之。玆不自揣、敢申鄙懷、以爲之序云。

寶永庚寅冬至日

竹田定直拜書

五常訓

貝原益軒著

卷之一

○總論

一およそ人となれる者は、天の大徳をうけて生れ、其心に生れつきたるものあり。名づけて性と云ふ。是卽天地の萬物を生じ給ふ大徳の生理なる故に、性の字、心にしたがひ、生にしたがふ。此性の内、おのづから五の徳あり。名づけて五常と云ふ。古今天下の人、たかきいやしき、さかしおろかなる、皆おしなべて、此五の徳を生れつきて、心にそなはれる事、古今かはることなし。こゝを以て五の常と云ふ。常とはかはらざるを云ふ。此五常の性は、人の人となれる理にして、人の萬物にすぐれて貴く、禽獸にかはれる所こゝにあり。此五の性にしたがへば、五倫の道是より行はれて、

用にあらはれて云々―用にあらはれたる見え易きものを以て其字義をいはばの義

周子―周濂溪をいふ、名は敦頤、字は茂叔、宋の大儒也

韓子―韓退之をいふ、本文の語は原性に、性たる所以の

人道是によりて立つ。故に天下の道理是より出て、道の本根とす。故におよそ人たる者、此理を知らずんばあるべからず。五常の性は體なり。其理説きがたし。川にあらはれて、見えやすきを以て、其字義をいはば、愛を仁と云ふ。愛はあはれみなり。宜を義と云ふ。宜とは事物に相應するを云ふ。各其事につきて理に當るなり。理を禮と云ふ。理とは人をうやまひ、事に則ありて、正しくすぢめ有るを云ふ。通ずるを智と云ふ。道理に通じ、是非を知るを云ふ。守るを信と云ふ。僞なくして、道をかたく守りて、變ぜざるを云ふ。此字義は、周子の説なり。韓子曰、人之所レ性者五、曰仁義禮智信。是人の性に、此五の者そなはれる事をいへり。故に又五性とも云ふ。此五性をすべていへば仁なり。故に孔子は、唯仁の一字を以て教へとし給ふ。是易に天地之大德曰レ生といへる意に本づけり。天地の萬物をうみ給ふあはれみの理、人の心に生れつきたるを仁と云ふ。仁は人心の全德なり。故に仁の一理を以て、義禮智信をかね、又萬の善をすべたり。春の氣を以て、夏秋冬を兼ぬるが如し。されども易においては、人の道をたてゝ仁と義といふと、仁義の二をつらねて説き給へり。是經書に、仁義をつらね説ける初なり。孟子に至りて、孔子の道をひろめて、仁義をもはら説き

者五、曰く仁、曰く禮、曰く信、曰く義、曰く智と有るをいへるならん

易において云々―易説卦に天の道を立てゝ陰と陽と曰ひ、地の道を立てゝ柔と剛と曰ひ、人の道を立てゝ仁と義と曰ふ

董仲舒―廣川の人、武帝に仕へて

給ふ。仁義の二にて、萬善行はれ、人道たつこと、天に陰陽ありて、天道行はるゝが如し。されども孔子の説き給ふ仁の外には出でず。唯仁の一理をわかちて、仁義といへるなり。たとへば一年の内、元氣の流行は一すぢなれど、動靜の分あるを以て、わかちて陰陽といへるが如し。又孟子はじめて仁義禮智の四德をつらねて説き給へり。是又仁義の外、禮智あるにあらず。禮は仁よりいで、智は義の内にあり。朱子の、禮は仁之著るゝなり。智者義之藏るゝなりといへるが如し。仁義をわかちて四德を説くは、陰陽をわかてば、春夏秋冬の四時となるに本づけり。前漢の董仲舒曰。仁義禮智信五常之道、王者所レ當二修飾一也といへり。是四德に信を加へて、五常と説ける始なり。四德の外、別に信あるにあらず。四德のまことありて僞無きは、卽信なり。信なければ仁義禮智にあらず。たとへば四時の内に土用ありて、木火金水の氣行はるるが如し。木火金水も、土なければ生ぜず。是董仲舒のはじめて説き出せるにもあらず。上代よりすでに此説あればなり。

一人心の德は、本唯仁の一理なり、又分れて、仁義禮智となる。又信を加へて五常とす。たとへば一年は唯一氣のめぐりなり。二にわかてば陰陽となる。春夏は陽なり。秋冬

大に用ひられしが後辭して著述を業とす漢代の醇儒也

土用―曆に十八日一期の稱にて四季各一度宛有り、但し本文中前なる土用の語は木火金水の氣に對し土の働きをへりと覺ゆ、木火金水土は所謂五行也

元亨利貞―易に乾は元亨利貞と有りて其傳に元亨利貞は之を四德といふ、元とは萬物の始、亨とは萬物の長、利とは萬物の遂、貞とは萬物の成也と見ゆ

は陰なり。陰陽を、又わかてば、春夏秋冬の四時となり、土用を加へて五氣となるが如し。一日の内をも、二にわかてば晝夜となり、又わかてば朝晝暮夜の四となるが如し。

一人の心にそなはれる仁義禮智の四德、其根本いづくにあり、いづくより享けたるや。曰く是其根本天にあり。天より出て人の心にむまれつきたり。其根本天にあり。天より出でたるとは如何ぞや。曰く易に天地の大德曰「生。大德とは大なるめぐみなり。生とは萬物をうみ生かすを云ふ。天地別に心なし。人と萬物をうみ生かす事を以て、心とし給ひ、これを以て、いにしへ今、かぎりなき人物を生じ給ふ。此心を生と云ふ。卽生理なり。又元と云ふ。是天地のめぐみ、物をあはれみ給ふ大德なり。其生理、一年の内、春夏秋冬にめぐり行はれて、元亨利貞の四德となる。天に此四德ありて、天道常に行はるゝが如く、人に仁義禮智ありて、人道行はる。人は天地の子にて、天地の、物をあはれみ給へる御心をうけて、心とす。是を名づけて仁と云ふ。仁は卽あはれみの心なり。此仁の理をわかてば、仁義禮智の四德となる。天の元氣の生理をわかちて、元亨利貞といふが如し。是人の仁義禮智の四德の根本は、天道の元亨利貞より出でたり。天にあり、人にあり、其理は一なり。董子のいはゆる、道の大原は天に出でたりといふは是なり。

一仁義二理あるにあらず。仁の節あるは義なり。仁義の二を以て、禮智を兼ぬ。故に仁をいへば、義は其内にこもる。仁義をいへば、禮智は其内にこもる。仁は禮を兼ね、義は智を兼ぬ。春は夏を兼ね、秋は冬を兼ぬるが如し。夏は春氣の長ずるなり。冬は秋氣のかくるゝなり。仁義を以て禮智を兼ぬるは、禮は仁のあらはるゝなり。禮義三百、威儀三千は、皆仁の發せるなり。是仁禮一理なり。智は義のかくれたるなり。義の、善惡をたちわかつ事、利刀の、物を斷つが如くなるは、智の、是非することの明なるより出づ。是義智一理なることを見つべし。仁禮は陽に屬し、義智は陰に屬す。仁義の二をいへば、春生じ夏長ずるは仁なり。秋收り冬藏るゝは義なり。四德にわかちていへば、春は仁なり。夏は禮なり。秋は義なり。冬は智なり。

一人に仁義あるは、天に陰陽あるが如し。天に陰陽なければ、造化の理ほろびて、四の時行はれず、萬物生ぜずして、天地の道立たず。人に仁義なければ、心の德ほろび、五倫の道行はれずして、人道立たず。禽獸と何ぞ異ならんや。故に易に曰、天の道を立

てゝ云々―四一五頁參照

四端―孟子公孫丑上に出づ、前註一二五頁參照

立てゝ陰と陽といふ。人の道を立てゝ、仁と義といふ。

一仁義禮智の四徳、古今天下の人の心に、皆生れつきてそなはれる事、何を以てか知るや。四端あるを以て知れり。四端とは、惻隱、羞悪、辭讓、是非を云ふ。是仁義禮智の四徳、心の内にありて、物にふれて自ら心上におこりて、外にあらはるゝを云ふ。故に四端と名づく。端とは、物内にありて見えずといへども、其端少し外にあらはれ出づるを以て、其物の内にあることを知るが如し。仁義禮智の性、心の内にありて、いまだ起らざる時は、其有無見るべからずといへども、物に感じておこり、用となるにいたりて、仁は惻隱となり、義は羞悪となり、禮は恭敬となり、智は是非となる。もし内に、仁義禮智の四徳なくんば、必此四端あらはるべからず。内にある故に、外に四端あらはる。是を以て、人心に四徳ある證とすべし。惻隱は、いたみいたむと訓む。人のうれひ苦むを見ては、あはれみいたむを云ふ。是仁の心のあらはるゝ端なり。もし人の憂苦を見ながら、あはれむ心無くんば、仁無きなり。羞悪とは、はぢにくむと訓む。悪むとは嫌ふなり。わが不義なるを恥ぢ、人の不義なるを嫌ふ。是義の端なり。もし人の不義をきらはず、わが不義を恥ぢずんば、義なきなり。辭讓は、我

人の性は善―孟子性善の説、同書告子上篇に詳也

せちなる―適切なるの意

只今三四歳

が身に取るを辭退して受けざるは辭なり。人にゆづりて與ふるは讓なり。飲食するを以ていはゞ、飲食を辭して、まづ人にゆづり與ふるを云ふ。是禮の端なり。もし讓らずして、爭ひうばはゞ、是禽獸のわざにして、禮にあらず。是非とは、事の善なるをば善と知りて是とし、不善なるをば不善と知りて非とす。是智の端なり。もし是非をわきまへずんば、智なきなり。此四端は、人となれる者は必あり。此四端あるを以て、仁義禮智内にあることを知るべし。又如何なる愚なる人も、親を愛し、君をたふとび、兄を敬ひ、弟をあはれみ、善をほめ、悪を悪まざる者なし。是仁義あればなり。飢寒する人を見ては、あはれむ心おこるは、仁あればなり。又小人といへども、我がいつはりあらはれ、不義を人に知らるれば、赤面し、汗をながす。是義あればなり。凡かやうの類、物にふれて、善心おこること多し。みづから心見て知るべし。皆是仁義禮智の四徳を生れつきたるにあらずや。こゝを以て、孟子は、人の性は善なりとのたまふ。もし五常の徳なくんば、何ぞ性は善なりといはんや。猶もせちなる事をいはゞ、孟子の書に見えしごとく、唯今三四歳なる小兒が、井のはたにあたりて、智なくして、たちまち井の内におち入らんとするを見ては、如何なる至愚極悪の人も、おどろき悲

なる小兒が云々―孟子公孫丑上に今人乍ち孺子の將に井に入らんとするを見て皆怵惕惻隱の心有り、交を孺子の父母に內（いる）るゝ所以に非ず、譽を鄉黨朋友に要（もとむる）所以に非ず、其聲を惡んで然るに非ざる也云々

みて、救はざるは無し。是其子の父母に親あるにあらず、人の子を救ひたるとて、譽を求むるにあらず。又見捨てたりと、人にいはるゝ惡名をおそるゝにもあらず。唯天性にむまれつきたる仁愛のまことの心より出づるなり。これによりて見れば、人皆此善心むまれつきて、心にそなはれる事を知るべし。君子の道を行ふ工夫は、わが心の內にある四端の善心の、少し萌したるを養ひそだてゝ、外におしひろめ、十分に行ふにあり。たとへば火のはじめてもえ出でたるを打消さずして、ふきおこし熾ならしむれば、ひろき原、大なる山をも燒くが如し。昔もろこしの齊の宣王は、一牛を殺すを情なく思ひ、助けられしは、誠に惻隱の心、善心の發なり。されども、わが國の多くの人民の飢寒をすくはず。是牛を愛する仁心はありながら、其仁心をおしひろめて、萬民に及ぼす工夫なくして、民を飢寒せしむ。火のはじめてもえ出でたるを打消したるが如し、物を燒くことあたはず。およそ人の善を行はずして、不善をするは、皆其善心あるをおしひろめざるなり。善をするは、皆善心の內にあるを、外におしひろむるなり。親に事ふるに、親を愛する一念あるは善なり。これをおしひろむれば、大孝にいたる。もし是をすてゝ、おしひろめざれば、不孝となる。自餘も皆此類なり。故に

四端の善心の云々―これ亦孟子公孫丑上に見え前註の文の續き也、一二五頁參照

齊の宣王は云々―此事孟子梁惠王上に出づ、所謂牽牛の章也

くだす―く

善と惡とは、此心をおしひろむると、おしひろめざるとに有り。心には此善端ありといへど、おしひろめ行はざれば、生れつきたる天性をそこなひすてゝ、行はざるなり。是いはゆる自暴自棄なり、おしひろむれば、天下四海をも治むるに足れり。若おしひろめずして、打捨つれば、至て近きわが父母につかへて、孝をなす事も成りがたし。況や萬民を治むるをや。堯舜の仁、湯武の義は、至て大なれども、此善心をおしひろめ給へるなり。桀紂が惡は、此心をおしひろめざるなり。然れば四端をおしひろむると、おしひろめざるとは、善惡と、君子小人と、國家の治亂との分るゝ所なり。

一天地の惠をうけて、わが身に生れつきたる四德なれば、人の人となれる道理、こゝにあり。然るに此道理を知らず、且人欲にくらまされ、是をすてゝ行はず、天地の德にそむき、人の道を失ふこと、悲むべし。此四德を失へば、人と斯く生れたるしるし無く、鳥けだものに同じくして、草木の、天地の惠のまゝに生長し、枯しほみて人の養となり、妨とならざるには、遙に劣れるぞあさましき。人は萬物の靈とて、天地の內にて、いと貴きものなれど、天地の性にそむき、人の道をうしなはゞ、禽獸に近くて、貴ぶに足らず。是自ら我が身を賤しくもちくだすなり。豈賤しむべき事ならずや。

たすと清音に讀むべし腐らすの義也、持下すと解し得ざるにもあらず

一仁義の道は、我が心の外に求めず。幼稚なる童も、其親を愛することを知らざるは無し。其長ずるに及んでは、其兄を敬ふことを知らざるは無し。親を愛するは仁なり。兄を敬ふは義なり。こゝを以て、仁義はわが心に、もとより生れつきたる事を知るべし。且親を愛し、兄を敬ふは、誰も知りやすく行ひやすし。甚高くして、知りがたく行ひがたき事にはあらず。此二にもとづきて、其心をおしひろめ、萬事に行ひ及ぼさば、仁義行れて、人道立ちぬべし。

一人の性とする所、唯仁義禮智信の五字なり。天下の道理、此外に出でずして、ことごとく此内にあり。是萬善の出づる所の根源なり。五常の性にしたがひて、五倫の道を行ふ。聖賢の教ふる所、學者のまなぶ所、此外にこれなし。

性にしたがふを云々―中庸に、天の命之を性と謂ふ、性に率ふ之を道と謂ふ、道を修むる之を教と謂ふ

一五常の性にしたがひて、私欲の煩なく、唯其自然に打任すれば、人倫にまじはりて、其性の善あらはれ、人倫の道行はる。中庸に、性にしたがふを道と云ふ、是なり。此性にしたがひ行へば、親には孝し、君には忠し、夫婦正しく、兄弟むつまじく、朋友に信あり、萬の善、皆これより出づ。國家を治め、天下を平かにするも、皆是五常の性にしたがひて、行ひ出せるなり。こゝを以て人道たつ。聖人の聖人たるも、亦五常

食を飽くまで食ひ云々―孟子に出づ前註、三二四頁參照

朝に道を聞きては云々―論語里仁篇

さゝやかなる―小さき瑣細なるの意

の性にしたがへばなり。天下の道理は、五常の外に出でず。

一およそ人となるものは、萬物にすぐれ、五常の性を生れつき、道あるものなれども、食を飽くまでくらひ、衣を暖かに著、家をかまへて、身を安くしたるまでにて、道の教なければ、形は人なりといへども、其心、其行は、禽獸に近きこそうらめしけれ。古の聖人、是をうれひ給ひて、學校をたて、師をたてゝ、人たるの道を教へ學ばしめ給ふ。されば事の急ならざるやうにて、いたりて大切なる事は、學問よりおもきは無し。如何となれば、道はしばらくも離るべからず。人學問なく、道を知らざれば、人の道たゝず。人と斯く生れつきたるかひなし。人生ふたゝび得がたし。道を學ばずして、空しく過すべからず。こゝを以て、朝に道を聞きては、夕に死すとも可なりと、聖人ものたまへり。學問は、まづ此道に志をたて、明なる師をえらびて、其教をうけ、よき友にまじはりて、其助を借るべし。志を立つることは我にありといへども、道を學ぶことは師友の力を用ゆべし。たとへばいとさゝやかなる藝能、又民のつとむる賤しきことわざといへども、師なく、法なく、教なくて、唯わが心ひとつに任せたらんには、いかに才力ありても、其わざをよくしがたし。いはんや人の道は、

ことわざ―事業の訓、仕事の義にて諺の意にはあらず

すなはち天地の道にて、きはめて大なること、諸藝にくらべがたきをや。いかでか古の聖人の法をまなばずして、わが心ひとつにて其道行はるべき。然れば、人となる者は、必いにしへの聖賢を師とし、其教をたふとび、其書をよみ、學問して、人の道を知らずんばあるべからず。おろかなる人は、學問は人のつとめの外の事のやうに思ひ、學ばずしても苦しからざる事とのみ思へり。人となりて、人の道をまなばずして知らざるは、農人の田つくることを知らざるが如し。古より、もろこしにて、さばかり明かにさとれる賢人君子、世に多かりしかど、我意をたてず、わが才智にほこらず、皆聖人の教を尊びしたがひ、幼きより、老にいたりて、道をまなびて止めず。是其智明かにして、聖人の教を學ばずんばあるべからざる事を、よく知れる故なり。いはんや今の時、末世の凡人、いかに其才力人にすぐれたりとて、古の賢者には及ぶべからず。然れば聖人を師として學ぶべきこと、言ふに及ばず。

元亨利貞―易の傳に出づ、前註四一六頁參照

一元亨利貞の四德は、天道の物を生じ給ふ生理の、春夏秋冬の四時に行はるゝ次第にて、其始終なり。天道の行はるゝ序、其時を以ていへば春夏秋冬とし、其理を以ていへば元亨利貞とし、其氣は生長收藏とす。元ははじめとよむ。生理の始なり。時において

は春とす。春は元氣初て行はれて、萬物生ず。是天道の、萬物を生ずる德の初なり。人にうけては仁とす。亨はとほるとよむ。生理の通るなり。時においては夏とす。夏は萬物さかんに長ず。人にうけては禮とす。利は遂ぐるなり。生理のとぐるなり。時においては秋とす。秋は萬物の生理收りて、草木みのる。是利なり。人にうけては義となる。貞は正しとよむ。生理の正しく成れるなり。時においては冬とす。冬は萬物の生理成就し、堅固に正しくなる。其生氣根にかへりかくれをさまりて、一年の功成る。人にうけては智とす。此四時の行はるゝ序は、萬世に年は經とも、かはらざる天道の常理也。人は天の元亨利貞の四德をうけて、仁義禮智の性として、心にそなはれり。天の四德は、天の萬物を生ずる生理なり。人の四德は、人の五倫をあはれむ生理なり。人の四德、其源をたづぬれば、本は天の四德より出でて、其理同じく、其本一にして、天人合一なり。

取わき―取わけに同じく、特にの意也

一天の生理四時に行はる。其中につきて、取わき元を始として、亨利貞を統ぶ。此故に、春生の元氣を以て、四時をつらぬく。其次第は、四にわかるれども、理は一なり。人の心の生理も、仁を始として、義禮智をつらぬくこと、天の元氣の、春を始と

して、四時をつらぬくが如し。これによりて、仁の一字は四德をかねたり。孔子の、もはら仁の一字を說き給へるは、此故なるべし。

一天の道、萬古よりこのかた、常に行はれて止まず。春夏秋冬の序、日月のめぐり、寒暑溫涼のおしうつる、皆其時たがはず。萬物の生ずる、年々に、各其形色をあらためず。桃は紅に、李は白くして、萬世までもかはらず。是卽天道の誠なり。人の性に仁義禮智の四德ありて、其中におのづから信あるは、天道の元亨利貞の內に誠あるが如し。天地の運行、人物の性、萬世にいたりてかはらず。是卽天道の誠なり。

一凡人たるもの、必此四德あるは、たとへば身に頭身手足の四體あるが如し。此四德ありながら、道を行ふ事ならずといふは、たとへば手足はありながら、物をとり地をふむ事ならずと云ふが如し。是を自暴自棄と云ふ。自暴とは、みづからそこなふと訓む。我が身に此天性あることを知らで、禮義をそしりて行はず。是天性を自らそこなふなり。剛惡の人なり。自棄とは、みづからすつると訓む。仁義の道を善きとは思ひながら、行ふ事ならずとて行はぬ、是我にある天性を、自らすつるなり。柔惡の人なり。此二種の人は、わが天性を自らやぶりすつる故に、道に入りがたし。もし自暴自棄の惡な

桃は紅に—天地自然の面目をいへる也、東坡の詩に、柳は綠花は紅眞面目といひ、禪林類聚に烏は黑く鷺は白し松は直く棘は曲れりといへる類

慈烏—格物論に、烏は鴉の別名なり小にして多く群り腹下白き者を鴉烏と名づけ其母に反哺する者を慈烏と名づく云々、又禽經に、慈烏は孝烏也長ずる時は其母に反哺す云々

くんば、學んで此道を得ずと云ふことなし。如何となれば、人の性本善なり。學問の道は、外に求めずして我に求むる故、得ざることなし。

一五常の性は、唯人のみこれあるにあらず。禽獸にも、亦其一性はこれあり。虎狼にも父子の道あり。慈烏の巢立して、母に餌をふくめかへす、猫の他の子に乳をのませてそだつる、是皆仁の一端を得たり。犬の主人をしたひ、蜂蟻に君臣の法あるは義なり。豺獺の祭をして本にむくい、鴻雁の兄弟の行列をみだらざるは禮なり。鴛鴦の雌雄相愛すると、雎鳩の雌雄別あるは智なり。鴻雁の去來するに、春秋の期をたがへず、雞の鳴く時節をたがへざるは信なり。是皆むまれつきたる一偏の性のよき所なり。もし人として此性を失はゞ、禽獸にしかずと云ひつべし。

一孝弟、忠順、愛敬などは、皆仁義禮智の性より行ひ出せる道理にして、其理は五常の性の內にあり。性の條目にはあらず。人の性は唯仁なり。わかてば五常となる。

一人たるもの、必五常の性を生れつきたれば、事物にふれて、必四端おこる。たとへば物の中にありて、其はしの少し外に見ゆるが如し。性は見えがたしといへども、外にあらはるゝ四端を以て、內に實に此性あることの證とすべし。孟子の、性は善也と說

豺獺―やまいぬとかはをそ也、禮記月令に孟春の月、獺、魚を祭ると見え、漢書に豺獺未だ祭らずの句見ゆ

き給へるも、五常の性あればなり。人の性善なる故、人もし學問し、道を知りて行はば、堯舜の聖にもいたるべしとなり。この故に、程子曰、孟子有レ功ニ萬世一者、性善の一言なり。

常に異なる―普通とかはりたる、異常なるの意

一孔子の教は、常に異なる道にあらず。卽天地の道也。天地の道を則として、人に示しをしへ給ふ故に、古人の言に、孔子は天の通事なりといへり。天地の道は、易簡とて、むつかしからずして知りやすく、事多からずして行ひやすし。天地の御心は、唯萬物をめぐみ養ひ給ふより外に、心なければなり。人にありては仁也。是人の道也。仁の道も亦人をあはれみ養ふより外になければ、人の道も亦知りやすく行ひやすし。仁をわかちて五常となる。五常の性は、人の心に生れつきたる理なれば、外に求めずして我に求む。凡外にある物は、求むれども得がたし。我にある物は、求むれば必得やすし。聖人、其人の心に、各生れつきて具足せる道を以て、をしへ給へば、いかに愚なる賤の男賤の女も、知りやすく行ひやすし。知りがたきは、よく學びざればなり。行ひがたきは、人欲にほださるればなり。是道の知りがたく行ひがたき故なり。人欲にしたがひ、邪曲を行ふは、たとへば闇の夜に、道もなき荆棘の中をわけ行き、溝渠を越えて行くが如し。危くして行ひがたし。聖人の道を行ふは、たとへば白晝に大道を行くが如し。明かにして行ひやすし。

易簡―易繫辭に、乾は易を以て知り坤は簡を以て能くす云々

一孔子の時は、猶も天下に道理明かに、邪說なかりしかば、仁の一字を說き給ひて、義禮智の條目をそなへ說き給ふに及ばず。孟子の時は、世に異說おこり、道理まぎれやすく、人心まよひて明なりがたし。若仁の一字のみを說き給はゞ、無星の秤、無寸の尺の如くにて、天下の人さとり得がたからん事をおそれて、仁義を說き、四德を說き、性善を說きたまふ。凡聖賢のをしへは、時によりて宜にしたがへり。たとへば良醫の、時の運氣により、地の風土にしたがひて、治療をほどこすが如し。

經濟―經世濟民、經邦濟世等の義にて今日の所謂經濟にはあらず、類書纂要に曰く、人才を稱して

一我が儒の道は、經濟の道とて、世ををさめ、人をすくふ大道なり。其學は、有用の學とて、まづわが身ををさめて、人ををさめ、人倫の道を行ひ、天下國家のため、天地萬物のため、用をなす學問なり。無用の空言にはあらず。こゝを以て、道理は人の心に生れつきて、知りやすく行ひやすしといへども、其道の功用の、いたりて大なることと、言ふに及ばず。かく大なる道なれば、などか其師なく、教なく、學ばずして、其道明なるべきや。世間のいやしき小藝小技すら、師なく學び無くしては、其わざを

なしがたし。いはんや大道をや。故に人たるもの、貴き賤しき、賢し愚なる、ともに聖人の道をたふとびて、明師をもとめ、良友にちかづき、其教にしたがひ、其道をまなばざらんや。

一人の心は、たゞ仁義禮智信の性なり。人の道は、唯君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の人倫の行なり。五常の外に心なく、五倫の外に道なしと知るべし。これを知るは知なり。是を行ふは行なり。此外にさらに心と道とを求むべからず。如何となれば、天の心、天の道にそむけばなり。人となるものは、天地の内に生れ、天地の惠をうけて、身をはるものなれば、とにかくに天地の道をたふとび、したがひ行ふべし。

一もろこしは天地の中央にありて、風氣の正しき國なれば、古よりさばかりの聖人賢人世に多く出でて、天下ををさめ、道を行ひ、人倫の法を立て、天地の道をつぎ行ひ給ふ。中について、孔子は六經を作り、堯舜以來、古の聖人の道を述べ、人倫の教を立て、天下萬世にのこし給ふ。是天下萬世の、師とし尊びて行ふべき則なり。故にもろこしも、外國も、其教をうけてしたがへり。しかれば、其教の、いたりて尊きこと、いへばおろかなりや。思ひやるべし。こゝを以て、古の帝王も、孔子を師とし尊び、

經濟の才と謂ふは邦を經り世を濟ふの才を謂ふ也

六經—前註一九頁參照

聖人及十哲—聖人は孔子、十哲は其門下の顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏

教へなければ云々—前註、三二四頁參照

一たび變ぜば—論語雍也篇に、子曰く齊一變

其教をおもんじ、時々の祭を行ひ、其廟にまうでて、拜禮をなし給ふ。わが日の本にも、むかしは都の大學寮に、聖人及十哲の像を安置し、釋奠とて聖人をまつり給ふ禮ありき。又太宰府及諸州にも、孔廟學校ありて、祭禮をなせり。しかれば天下の人、貴き賤しき、あまねく其教にしたがひて、師とすべきこと言ふに及ばず。されど世界の内、聖人の教を知らで、隨はざる國もあり。それは孟子のいはゆる、教なければ禽獸に近きなり。是夷狄の、中華に及ばざる所なり。

一わが日の本は、天地の内において、南北の中央にあること、中華と同じければ、日月のめぐれる道正しく、四時そなはり、寒暑陰陽の時にたがはざること、四夷の諸國にくらぶるに、すぐれたる善國なり。五穀ゆたかに、衣食器財乏しからず。まことに豐秋津洲といへるも、品物の多くしてゆたかなる事、外國にまさればなり。其風氣正しき故に、風俗和順にして、慈愛ふかく、節義を守りて勇武なり。禮法正しく、威嚴行はれ、仁義に近し。一たび變ぜば、道にいたりやすかるべし。此故に、中土の書にも、此國を名づけて君子國と云ふこと、又むべなるかな。わが國の人は、日の本の、外國にまさりて善きことを知らず。うらむべし。わが國に足らざる所は、唯學問の一事の

して魯に至り、魯一變して道に至らん

孔子曰云々―論語公冶長篇に子曰く道行はれずんば桴に乘りて海に浮ばんと見え、子罕篇に子九夷に居らんと欲す云々と見えたり

み、中土に及ばず。今太平の化久しく、萬民其德に浴せり。唯つとめて、古の聖の道をまなび、五常の德ををさめ、五倫の道を行ひて、國家の恩德をあふぎ、其化にしたがはざらめやは。

一許愼が說文に、四夷を說きて曰く、南方は蠻と云ふ、蟲に从ふ。北方を狄と云ふ、犬にしたがふ。西方を羌と云ふ、羊に从ふ。たゞ東夷は大にしたがふ。大は人也。東夷の風俗は仁也。仁者は壽し。君子不死の國あり。孔子曰、道不行欲之乘九夷乘桴浮於海有以也といへり。是南蠻、西戎、北狄は、皆文字も蟲と獸に从ふ。唯東夷のみ人にしたがへり。日本は東夷なり。九夷の內也。孔子も中國にて道行はれざる故、九夷に居らんとのたまふ。是我が國の、他國にまさりて、人の道ある國なれば也。又日本を不死の國と云ふも故あり。日本の人は、もろこし又其餘の國より長命なればなり。

一五常の和訓、仁はいつくしみ、義はよろし、禮はうやまふ、智はさとる、信はまこととよむ。

五常訓卷之二

○仁之上

一人の禽獸にことなるは、仁あるを以てなり。五常五倫百行萬善、皆仁よりいづ。故に仁の理至て尊く、至て大なり。我がともがら凡愚の知りがたき事なれば、たやすく言はんこと、いとかたはらいたくこそ聞ゆべけれ。されど學びがてらに古人の說をあつめ、不幸にして書を讀まざる人のために、いさゝか試に其大義の萬一をいはん。たゞ誤おほからん事をおそるゝのみ。中庸に曰、仁者人也、親親爲大。孟子も亦曰、仁也者人也。又曰、仁人心也と。言ふ意は、天地の惠大にして、よく萬物を生じ給ふ。其理を生理と云ふ。生理とて、天理の生々て、よく物を生ずるを云ふ。此生理を人の身に生れつきたる故に、人の身に、惠の心胷中にみちゝて、よく物をあはれむ。是を以て、人の身卽是仁なり。故に仁者人也と說きたまへり。仁は人也といへ

學びがてらに―學習の傍の意

孟子も云々―仁也者人也は盡心上に出で、仁人心也は告子上に出づ

人ばかり―人ぐらゐ、人程の意

周子―宋代の大儒周茂叔をいふ前註四一四頁參照

るは、たとへば生ずるは種なりといひ、又、あつきは火なりといはんが如し。人の心に必仁あること、種の必生じ、火の必熱きが如し。禽獸も、同じく天地の惠によりて生ずれども、仁をば生れつかず。此故に、仁は禽獸也とは云ひ難し。萬物の内、人ばかり仁なるはなし。こゝを以て、人たるものは必仁あり。仁なくんば人とすべからず。故に仁は人也といへり。天地の、人を生み給へる道理を、人の身に得て、心の德とするゆゑに、自ら物をあはれむ道理あり。是卽仁なり。又仁は人の身に生れつきたる心なれば、仁人心也といへり。然れば、仁は天地の心をうけて心として、あはれみの理を其内にふくめり。故に人にまじはりては、あはれみの心自ら止む事なし。されども其中につきて、まづ父母を愛し、次に兄弟一族を愛するが、仁愛の内にていと大なる理なり。故に親をしたしむを大なりとすといへり。親とは親類なり。先親類をしたしみて後、他人を愛す。是仁を行ふ次第なり。人なりと說き、人の心也と說ける字訓、尤親切にして、仁の理によくかなへるなるべし。周子は德愛を仁と云ふといへり。愛はあはれむ也。仁は心の德にて、人をあはれむを云ふ。愛を以て仁を說くは、是仁の大用を說けり。仁の用をなすは、あはれみを人に施すにあり。

惻隱の心―孟子に出づ、前註、一二五、四二〇頁參照

故に愛を仁と云ふ。夫仁は性なり。性は心に生れつきたる、理なり、體なり。愛は情なり。情とは、性の外物に感じて、動きあらはれたる心を云ふ。用なり。愛は仁の性の用にあらはれたるなり。體は見えがたければ、あらはれたる用を以て說けり。愛を以て仁を說くは、是用につきて體を示すなり。程子は天地の生意を以て、仁を說けり。生意とは、天地の理生々して物を生ずる意を云ふ。其生意の、人に生れつきたるを仁と云ふ。天にありては生と云ひ、又元と云ふ。人にうけては仁と云ふ。天にあり、人にありて、其名は變れども、其理は一なり。此心に生れつきたる生理内にありて、いまだ外にあらはれざるを仁とす。既にあらはれては情となりて、物にほどこすを愛と云ふ。愛のはじめておこれる、其きざしの端を惻隱の心と云ふ。仁と愛と一理なれど、性情體用の別あり。用を指して體とすべからず。情を指して性とすべからず。然れば仁と愛と、體用のわかちあり。たとへば仁は扇なり、體なり。愛は扇を以て人をあふぐが如し。あふがずんば扇も用なし。あはれみなくんば、仁なんぞ用あらんや。すべて言へば、愛するも仁なり。たとへばあふぐも扇なるが如し。性情體用も皆仁なり。體用をわかちて見、又合せて見るべし。程子又曰、仁主二於愛一。是仁は愛の理をふくめ

るゆゑ、動きて人にまじはれば、專愛する事をつかさどれり。義の宜をつかさどり、禮の敬をつかさどるが如し。天地の萬物を生ずる心は、卽是天地の物を愛するの理なり。其理を人にうけて性とするは、卽仁なれば、仁は人物を愛するを主とせり。朱子曰、仁心之德、愛之理。心の德とは、德は得る也。天地の人物を生じ給ふ心を、我が心に得て、わが物となれる道理を德と云ふ。義禮智も、皆心の德なれど、仁は義禮智を兼ねたれば、仁において、專ら心の德と云ふ。たとへば一家の中、兄弟四人あれども、嫡子一人を以て、其弟を兼ぬるが如し。愛の理とは、心の德の、いまだ外にあらはれざる內に、自ら物をあはれむ理をふくめるを云ふ。仁に愛の理あるは、飴の甘きが如く、醋のすきが如し。其內の味なり。たとへば俗語に、ひらかねど扇は風のつぼみかなといへるが如し。すべていへば、仁は心の德也。わかちていへば、愛の理也。心之德、愛之理の六字、朱子はじめて發明せる所、後の學者に功あり。是周子の德愛を曰仁に本づけり。或曰、愛之理は發用を指せりと。此說非也。朱子曰、愛之理者、是乃指其體性而言。此說の證とすべし。愛は用なれども、愛の理は內にふくめるを以ていへば、あらはれたる用に非ず。朱子又曰、仁は溫和慈愛の道理。溫和と

朱子曰云々―論語學而篇に、孝弟は其れ仁を爲すの本かとある仁の字に註したる言也

博愛謂仁―原道に、博く愛する之を仁と謂ひ、行うて之を宜うする之を義と謂ひ、是に由て之ゆく之を道と謂ひ、己に足つて外に待つ無き之を德と謂ふ

は、其心長閑くやはらかなるを云ふ。慈愛とは、人と萬物を慈みあはれむを云ふ。溫和は仁の氣象を云ひ、慈愛は仁の道理を云ふ。たとへていはゞ、春の景色長閑なるは溫和なり。春の陽氣よく草木萬物を發生するは慈愛なり。朱子の此二說にて、仁の字義大むねそなはれり。

一韓退之の、博愛謂仁と說けるは、仁の天下萬民に行きわたりたる大用なり。物として愛せざる事なきなり。仁者はまことに博く愛すれども、それは末なり、根本にあらず。程朱は仁の根源より說きて、全體をすべたり。韓子の言、全く理なきにはあらず。されど仁は性なれば、其本より說きて、大用を兼ぬべし。

一四書六經の內に、唯仁の一字をいへるは、義禮智をかねたり。仁義の二字を說きて、禮智をいはざるは、仁は禮を兼ね、義は智を兼ねたり。百行萬善は、皆五常より出づ。五常は又仁の一字を以て兼ねたり。此故に、孔孟は、もはら仁をもとむる工夫を以てをしへ給ふ。其說は論語孟子の書に見えたり。

一程子曰、醫書に手足のなえしびるゝを名づけて不仁とす。此ことば尤よく名づけかたどれり。仁者は天地萬物を以て一體とす。己に非ずと云ふことなし云々。人の身、病

不仁―後漢の班超の妹昭の上書に、兄年七十兩手不仁といひ、晉書皇甫謐傳に久篤疾に嬰り軀半不仁右脚偏小といへる皆是也

なくして、血氣ゆきわたりて善くめぐれば、手足のさき針にてさしても痛む。もし風濕氣虛などの病によりて、血氣ふさがりめぐらざる所は、刀にてさし、火にてやきてもいたまず。なえしびれて、我が身とも覺えず。是を醫書に名づけて不仁と云ふ。不仁者の心、外物を一體とせず、物と我との隔ありて、仁心其物に行きいたらざれば、人の憂苦をも、我が心に何とも無く痛まず。かへりて情なく、人を苦めしへたぐ。手足に血氣めぐらずして、なえしびれ、いたき事もかゆき事も覺えざるが如し。故に手足のなえしびるゝを名づけて不仁と云ふ事、尤しかるべし。仁者の心は、わが身ひとつを利せず、萬物とわが身と、へだてなく一體として、愛せざるものなし。是私慾のへだてなくして、公なる故に、我が心よく萬物に通じ、人の憂苦を見ては、我が憂苦の如く、いたみ悲む。鳥獸草木までもあはれみ惠みて、そこなはず。鳥獸のころされ、草木のみだりに伐らるゝを見ても、いたむ心あるは、皆我と一體なればなり。凡天地の内にあらゆる萬物は、皆我が身にあらざるは無し。是を天地萬物を以て一體とすと云ふ。是仁者の心なり。凡人倫も、禽獸草木も、同じく天地の生める所にて、同氣なれば、もと我が身と一體のものなれども、私欲あれば、物我のへだてあ

心は云々―程氏の言に心は譬へば穀種の如し、生の性是れ仁、陽氣の發する所乃ち情也尚書に云々

りて、わが身の外は心通ぜずして、人の憂苦を見聞すといへども、我が心にあづからず。ただ我が身にさへ便よければ、人の苦は何ともおもはず。是不仁者の心なり。人の身、血氣ふさがりめぐらずして、なえしびれて、我が身とも覺えざるが如し。一桃の實、杏の實を、桃仁杏仁と云ふ事も、亦よく名づけしなり。仁は人の心の生理なり。桃杏の實、植うれば必生ず。是其内に生理あればなり。もし生理なくんば死物なり。植ゑても生ずべからず。桃杏の實、生理内にありて、いまだ發生せずといへど、發生の理を内にふくめり。是を以て、桃仁杏仁と云ふ。仁の、内にありて未だ發せざるも、亦かくの如し。發せずといへども、愛の理は内にふくめり。程子曰、心はたとへば五穀のたねの如し。たねの生意あるは仁なり。其種をまきて、陽氣發して、苗生出づるは、愛の情なりと。苗初てきざすは、惻隱の心なり。是等の說を以て、仁の理を知るべし。

一天地の惠は、至て大にして、人と萬物をうみて、又やしなひ生し給ふ。此故に、尚書に、天地は萬物の父母といへり。天地の理、生々て止まざる故に、其生々たる德を以て、よく萬物を生じ給ふ。易に天地の大德を生と云ふ、是なり。夫天地に別につかさ

—書經泰誓に、惟れ天地は萬物の父母惟れ人は萬物の靈天地の大德を云々—前註、一二七頁參照

どりなし。物を生ずるを以てつかさどりとす。程子の曰、天は唯是以生爲道。朱子曰、天地以生物爲心。人は天地の物を生じ給ふ心をうけて心とす。是仁なり。故に仁の理の根本は天より出づ。天の生理、人の仁、同じ理なり。

一尚書に、人は萬物の靈といへり。靈とは、たましひとよむ。人は萬物にすぐれて明なるたましひあるを云ふ。天地は萬物の父母なれば、萬物は天地の子なり。されど萬物の内、人は陰陽の正しく委しき氣をうけて生る。故に鳥けだもの蟲魚、凡萬物にすぐれて、とりわき天地の大德を生れつきたり。こゝを以て萬物の靈といへり。又孝經に、天地の性、人を貴しとすとのたまへり。天地の内、性をうけたる物、人ばかり貴きはなし。如何となれば、天地の德をたがへずして、そのまゝ心に生れつきたればなり。されば人は、すなはち天地の萬物をうみ給ふ生理を以て、心とせり。此心を名づけて仁と云ふ。およそ人たるものは、いにしへ今、此仁あらずといふ事なし。是人たる者の心也。故に孟子にも、仁は人の心なりといへり。若人此仁を失はゞ、形は人なりといへど、心は禽獸に近かるべし。然れば、人と生れたるしるしなく、萬物の靈とするに足らず、又貴しとすべからず。故に人となる者は、仁を心にたもち、身に行はずんばあるべからず。如何となれば、仁は天地よりうけて、人となれる理なればなり。

—仁者は云々—前註、二六一頁參照

一孔子曰、仁者は己たゝんと欲して人をたつ。己達せんと欲して人を達すと。此意は、仁者は心に私なくして公なる故、人我の隔なし。我が身をたてんと思へば、人をも共にたつ。我が身を達せんと思へば、人をも共に達す。人と我との隔なし。人を思ふこと我が身と同じ。是仁者萬物を以て一體とするの心なり。もしわが身を專らに愛して、人を愛せざるは、人我の私にへだてられて、公の心なし。是不仁なり。仁に至らんと欲せば、近くわが身の上にて、人の心をたとへ、我が好む事を人に施し、我がきらふ事は人もきらふものなれば、わが心にて人の心をおしはかりて、人に施さず。是己を推す恕の道にして、仁にいたる工夫なり。

—我が好む事を云々—此句亦孔子の言にもとづく、前註二四三頁參照

一賢者以下は、私なき事あたはず。私あれば、人我のへだてありて、仁にいたらず。仁にいたらんと思はゞ、人我をへだつる私の心を去るべし。私を去りて仁にいたる工夫あり。推己を恕と云ふ。己を推すに二すぢあり。一には、わが心に人をあはれむ惻隱の一念生ぜば、其心を外におしひろめて、人に及ぼして、人において愛せずと

—己を推す—程氏の言に己を以て物に及ぼすは仁也、己を

推して物に及ぼすは恕也

四端の善―孟子に出づ前註、一二五頁參照

つゆ―少しもの意

云ふ事なかるべし。子を愛するを以ていはゞ、我が子をあはれむ心をおしひろめて、人の子をあはれむ。是己を推すと云ふ。我が子のみ愛して、人の子を愛せざるは、人我の私なり。凡わが心に四端の善あるをば、皆外におしひろめ行ひて、十分に至らしむべし。内にありても、外におしひろめて行はざれば、用をなさず。是は内にある仁を、外におし出して、ひろめ行ふなり。是己をおす恕なり。又一には、仁を人に施すの道、我が心を以て人の心をおしはかるに、人も我も同じ心なれば、我が好む事は、人も亦必ず好むものなり。我が心にきらふ事は、人も亦必きらふもの也。かくの如く、我が心を以て人の心にくらぶるは、つゆ違ふ事なし。不仁無禮を、人の我に施すは、我がきらふ所也。是を以て人の心をおしはかるに、人もまた不仁無禮をきらふ故に、人に不仁無禮を施さず。是恕なり。民を治むる道を以ていはゞ、わが身もし下にありて、困窮し饑ゑ寒え、妻を賣り子を賣りて、親子はなれ、兄弟妻子離散するにいたらば、我が甚きらふ事なるべし。其心を以て、民の心をおしはかるに、我がきらふ如く、民も亦きらふべき事を知りて、民の饑ゑず寒えず、困窮せず、妻子を賣らざるやうに、あはれみて施すべし。是を己が欲せざる所を人に施す事なかれといふ。又

よく近く取りて云々―論語雍也篇に、能く近く取りて譬ふ仁の方と謂ふ可きのみ

孔子の、よく近く取りてたとふるを仁の方といふとのたまふも、此意也。我が心に近く取りてたとへくらぶれば、人の心も同じ心なれば、我が心にたがはず。我が心を以て、人の心をおしはかりて、人に施すは則恕なり。是また己をおす恕なり。恕に此二義ありと知るべし。いづれも己を推すといふ義也。

一仁は德の名なり。恕は仁を行ふ工夫なり。德の名にはあらず。工夫とは、つとめのしわざを云ふ。世俗に、思案するを工夫といへど、仁にはあらず。思案も其内の一なり。仁に至らんとならば、恕を行ふにあり。仁は愛の理也。恕は人我の私を去て、愛を人に施す工夫なり。仁はたとへば筆なり。愛はたとへば筆より書出す文字也。恕は筆を手にとりて、物かくが如し。仁は體なり。愛は用也。恕は仁を行ふつとめ也。恕なれば私なく公にして、仁の理行はれて、愛のほどこし廣し。恕なければ、仁心あれども愛の理行はれず。故に仁愛を行はんとならば、恕をもつぱら務むべし。夫つとめずして愛の理行はるゝは、仁者の事也。賢人以下は、人我の私あるゆゑ、恕を以て私を去りて、仁を行ふべし。故に恕はつとめて仁にいたる道なり。熟するは仁なり。生しきは恕なり。自然にかなふは仁なり。つとめて理にかなふは恕なり。私な

子貢の云々
―論語衛靈公篇に出づ、前註、一二九頁參照

くして公なれば仁なり。仁なれば愛す。子貢の、孔子に、一言にして身ををはるまで行ふべき者ありやと問はれしに、孔子曰、其恕乎、おのれが欲せざる所を、人に施すことなかれと答へ給へり。一言とは一字也。恕の一字は、仁にいたる道なり。是一生の間、守り行ふべき道なり。

一恕を行ふには、公私の二をわきまふべし。公とは私なきを云ふ。我が身を愛する心を以て人を愛し、我人のへだてなく、われひとりを立てんと思ふ私なきは公なり。是仁者の心なり。私とは、公ならざるを云ふ。我と人とのへだてありて、たゞ我が身ひとつを利せんと思ふは私なり。又わが親しみ愛する人をひいきして、ひとへに利益せんとするも私なり。皆是小人の心なり。凡天下萬事の善惡のおこる處は、皆公と私との二より出づ。又君子小人のわかちも、こゝにあり。私あれば、まぢかき恩をうけたるわが親と君をわすれ、たゞ我が身の利欲をのみ務む。いはんや他人をや。私なければ、身をすてゝも、君父のために忠孝をつくす。いはんや利欲などにひかれて、君父をおろそかにすべけんや。

一仁恕公私の別をいはゞ、人我をへだてず、私なきは、公なり。公にして、愛の理行はるゝは仁也。私ありて、人我をへだて、愛の理行はれざるは、不仁なり。人我の私を去りて、公にする工夫は、恕なり。恕は私を去り、公にして愛の理行はる。是仁なり。公を卽仁とは云ふべからず。恕すれば人我のへだてなくして、公なり。公なれば愛行はる。是仁なり。恕は仁を行ふ工夫なり。愛は仁のほどこし也。たとへば仁は河水の流れ行て、とゞこほらざるが如し。私は土石の河水をふさぐが如し。不仁は河水の、土石にへだてられて、ふさがりて流れざるが如し。恕を以て人我の私を去るは、たとへば川に土石のふさがれるを、鋤鍬などを以て、掘り通すが如し。ほり通せば、水とゞこほらずして流れゆく。公は土石のふさがり無きが如し。愛は水の流れゆきて、よく物をうるほすが如し。私あれば不仁なり。恕すれば公なり。公なれば愛行はれて、仁の道たつ。此たとへを以て、仁恕愛公私の別を知るべし。

樊遲問仁―論語顏淵篇

一樊遲問仁、子曰愛人。仁は愛をつかさどる。故に仁を行ふの道は、人を愛するにあり。此、人の字は、五倫をさして見るべし。人を愛するは、卽人倫を愛する也。人の道は仁を行ふにあり。仁を行ふの道は人を愛するにあり。人を愛せんとならば、まづ心の私を去り、人我のへだて無くして、あはれみの心をおしひろむるにあり。愛人を以て

仁を說き給ふ。誠に切實にして、近き敎なり。

一人は父母より生ずといへど、其根本をたづぬれば、皆天地の恩によりて生る。むまれて後、一生の間も、亦天地の惠によりて身をたつる事、猶親の氣をうけて、むまれて後も、親の養によりて、人となるが如し。是誠にきはまりなき大恩ならずや。此故に、天地を以て大父母とす。天をば父と稱し、地をば母と稱す。人は天地の子なり。まことに天地の恩のきはまり無き事、海山を以ても譬へがたし。天地の恩のむくいがたき事、子として父母のむくいがたきと同じ。人は萬物の靈なれば、などか天地の恩の大なる事を知らで過ぎぬべきや。故に人の道は、唯天地の恩を知りてつかへ奉るにあり。天地につかへ奉る道は、べちにあらず。天地にしたがひて背かざるにあり。天地に從ふとは如何にぞや。我が心に生れつきたる仁の德は、是天地より我にさづけ給へる也。こゝを以て、仁を行ふは、卽天地の御心にしたがひて背かざるなり。たとへば主君よりさづけ給へる官職を、よく務むるを以て、君につかふる忠義とするが如し。仁を行ひて、天地のうみて子とし愛し給へる人倫を愛するが、天地につかへ奉る道なり。人倫は五あり、五倫と云ふ。五倫は、わが父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の

父母のむくいがたき―父母の恩のと補ひて解すべし

五品を云ふ。倫は輩なり、類なり。天下の萬民かぎりなしといへど、其類をわかてば、此五に出でず。五倫を愛するは、萬民を愛するなり。萬民は天地の子にて、愛し給ふ所なれば、われ是を愛するは、卽天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る道なり。仁の性にしたがへば、五倫を愛する道自ら行はる。中庸に、性にしたがふを道と云ふ、是なり。仁は性なり。五倫を愛するは道なり。天地より生れつきたる仁の性にしたがひて、五倫の道を行ふが、天地につかへ奉る孝にて、人の道なり。是卽仁なり。人の道とする所、さらに此外に有るべからず。次に禽獸草木を愛するも、亦仁の內の事なり。天地は萬物の父母なれば、人倫を愛し、次に萬物を愛するも、亦天地につかふる道なり。

性にしたがふを云々―前註、四二三頁參照

一およそ人は、かりそめの一飯の恩、一物の惠をうけてだに、其心に銘じて忘れざるべき理なるに、かほど極りなき天地の大恩をうけながら、それを悟らずして、はかなき世の習ひに迷ひて、天道にそむき、人道を行はず、其大恩の萬一をも報ぜずして、身をはりなん事、いと口をし。たとひ不幸にして、聖賢の書を讀まずとも、天をいたゞき、地をふみ、其中にむまれながら、かほどの事は、其是非をわきまふべきこと

にこそ侍べれ。況や少しばかりにても、古の聖賢のふみを讀みたる人、此理をわきまへざらんは、いとはかなくこそ聞ゆめれ。されば我も人も、天地の惠によりて生れ、天地の内に身をよせ、天地の養をうけ、天地の心をうけながら、天地の心にそむき、天地の道を知らず、天地の財をつひやし、天地の物をそこなひて、日々に天地に背けるわざをのみ行ひ、天地につかへ奉ることを知らで、一生の間、夢見るが如く、酒に醉へるが如く、まよひて悟らず、此身終りて、草木禽獸と同じく朽ちなん事は、人と生れたるかひなし。いたりて不仁にして、又愚なりと云ふべし。人の子として、親に事へずして、親の用にたゝず、かへりて親にそむき、不孝にして親を苦むるが如し。されば親によく事ふるを孝とし、親に背くを不孝とす。天地によく事ふるを仁とし、天地に背くを不仁とす。仁と孝とは一理なり。天地の恩と父母の恩とは同じ。父母に事ふる心を以て、天地に事ふるは仁なり。天地に事ふる心を以て、父母に事ふるは孝なり。又天理にそむきて人欲を行ふは、我が父母に不孝にして、他人の父母を親むが如し。かへすゞ、たゞ人はあだなる世の迷を悟りて、大恩をうけて人と生れ、身をよせたる處の、いたりて貴き天地の道に朝暮したがひ、身を終るまで天道を畏

父母に事ふる心を以て云々―禮記に出でたる孔子の言に仁人の親に事ふるや天に事ふるが如し、是故に孝子は身を成す

恩を知らざるは云々―大智度論に恩を知らざるの人畜生より甚しとあり、水滸傳に、古人云ふ恩を知りて報いざるは人たるに非ずと見えたり

れつゝしみて、天に事へ奉るべき事にこそあれ。是卽仁の心にして、人の道也。人となるもの、天地の恩を知らずんばあるべからず。恩を知るを以て人とす。恩を知らざるは禽獸と同じ。恩を知ると知らざるは、人と禽獸とのわかるゝ所なり。俗語に、恩を知らざるは木石に同じと云へるが如し。されど木石は、天地と人の妨とならず。わが輩の、おろかに私多き者は、かへりて妨となり、木石にだにおとれるわざ多し。身をかへりみるべき事にこそあれ。かへすゞ天地の中に生れたる人、天地の恩を知らで、つかへ奉らざるは、如何ぞや。

一仁は、天地の、物を生ずるを以て心とし給へる理を、わが身にうけて心とする德なり。故に仁は、萬善を統べて其中にあれど、唯ひとへに、人をあはれみ、物をめぐむを以て仁とす。天地の、人物をうみ育てめぐみ給へる御心にしたがひて、天地のうみ出し慈み給ふ人と萬物を、我よりも又天の御心をうけて、あはれみ惠む。是すなはち仁の心にして、天地につかへ奉る道なりと知るべし。此仁心より、百行萬善は行はれ出づるなり。天地を父母として、わが身は天地の子なり。天下の民は、我と同じく、天地の子なるゆゑに、卽是わが兄弟なり。其内に、王公大人あり。是わが兄弟の内にて、位

鰥寡孤獨―前出、三九頁參照

高き人なり。鰥寡孤獨、病者、かたわ、乞食、貧人あるは、皆わが兄弟の内にて、不幸なる人なり。有位をうやまひ、不幸なるをあはれむは、皆是わが兄弟をあつく親むの道にして、卽是天地につかうまつる道なり。たとへば人の子として、親に孝を行ふ道は、親の命にそむかず、親のうめる我が兄弟にむつまじく、又親の親める親戚朋友、親の愛するしもべまで、其程にしたがひて、情ふかきを以て孝とす。如何に親のひざもとにて、あけくれ事ふるとも、親のうめる所のわが兄弟に情なくば、親の心にそむきて、至て不孝といふべし。天地のうめる處は、人と萬物なり。天地のうめる人と物をあはれむを以て、天地につかへ奉る道とす。天下に人多けれど、五倫の外にこれなし。君子の道は、五倫にまじはりて、情ふかく、惠あつきを、人の道とするは、人倫は、皆天地の子なり。人倫をあつくするは、卽天地につかへ奉る道なり。人倫を愛するとて、わけも無く一やうに人を愛するは、道理にそむけり。墨子と云ひし人、仁を學びそこなひて、天下の人を一やうに兼愛する道を立てたり。是ひが事なり。人を愛するに、親しき疎きと、貴賤とによりて、自然の品あり。品なければ、親をも路人をも、一に見るなり。人倫の中に、とりわき親につかへ、孝を行ふを專一とする

黑子といひし人云々―前註、一二八頁參照

人は萬物の靈―書經泰誓に出づ

親を親みて云々―孟子盡心上

は、人倫の本をあつくするなり。次に兄弟、夫婦、朋友なり。君臣の義は、又父子の親みと同じく、尤おもし。親を愛するを本とするは、是わが生れつきたる仁愛の先おこる處、自然の道なり。しひて次第を立つるにはあらず。人倫を愛して、其次には鳥獸蟲魚草木まで愛するは、是又天地のあはれみ給へる御心にしたがひて、我もあはれむ也。天地の萬物をうみ給へる内に、取わき人倫を尤あつくし給ふは、人は萬物の靈なれば、禽獸草木に同じからず。天地の性、人を貴しとす。こゝを以て、天地の御心をうけて、まづ專人倫をあつくあはれみ、次には鳥獸草木をも愛すべし。君子の道は、唯一すぢに天地の御心にしたがひて、背かざるにあり。是天に事へて孝を行ふなり。是を仁と云ふ。もし人倫を愛せずして不仁なるは、天地の不孝の子なり。孟子に、親を親みて民を仁し、民を仁して物を愛すといへり。君子の仁愛を行ふ、其次第かくの如くなるは、其品にしたがひて、心を用ふるに厚薄あり。是自然の理にしたがへり。まづ父母兄弟を親み、次に親戚を親むは、皆是親し親也。次に民を仁す。民と萬民なり。其内にも、貴賤親疎の次第あり。次に物を愛す。物とは禽獸草木を云ふ。とりけだもの草木を愛するも、各次第あり。先鳥獸を愛し、次に草木に及ぶ

べし。親を親み、民を仁し、物を愛するは、輕重の次第あり。親を親むは尤あつく、民を仁する是につぎ、物を愛するは民を仁するより輕し。此三は、すべていへば皆仁なり。其厚薄の次第、みだるべからず。是自然の理にして、しひて次第をわかつにはあらず。

一仁は義禮智信を兼ねて其中にあれども、五の者をならべ云ふ時は、各一理ありて、仁を相助くべし。仁の理、義を得ざれば宜しく行はれず。禮を得ざれば節分なくして立たず。智を得ざれば善惡を明かに知らず。信を得ざれば僞りありて守りがたし。四の者皆そなはりて、仁の道行はる。然れば義禮智信は、もと仁より出でて、仁をたすくる理なり。

一仁は天地にありては、物を生ずるの心なり。人にありては溫和にして、人を愛し、物を利する心なり。仁はたゞ愛の理を以て云ふべし。天の道、人の道、皆此愛を以て本とせり。愛をすてゝ仁をいふは非なり。

一子曰、剛毅木訥者近レ仁。又曰、巧レ言令レ色、鮮矣仁。剛毅は、心こはく强くして、柔弱ならざるなり。木は容貌質朴にして、かざり無きを云ふ。訥は言のたくみならず鈍きを云ふ。心剛毅にして物慾にかゞめられず、容貌質朴にしてかざりなく、言たくみならざるは、其氣象を以て云ふ。仁とは云ひがたし。されど外をつとめずして、内に實あれば、其質、仁の理にちかし。巧言は、言をよくして、仁者の言に似たり。令色は、顏色をよくして、仁者の容貌に似たり。顏色言語は、見事に聞事なれど、かざりて外をつとめ、内に實なければ、仁にあらず。此二章を以て、仁の理を知るべし。又曰、仁者必有レ勇とは、仁者は心私にわづらはざる故、義を見ては必行ふ。内にかへりみるに疚しからず。故に事にのぞみて、うれへずおそれず、節義をかたく守りて、身に私せず。此故に、仁者は必勇あり。血氣の勇者は、けなげにて身をすつれども、仁義なければ道理に當らず、捨てかひなし。勢により、節にのぞみては、身に私して、道理にそむき、節義をうしなふ。故に必仁あらず、其勇もたのみなし。子曰、志士仁人、無レ求レ生以害レ仁、有レ殺レ身以成レ仁。仁に志ある人、仁ある人は、義の死すべき時節に、わが身に私せず、命生きん事をもとめて、わが心の道理を害せず。身をころしても道理にかなへば、其心やすし。こゝを以て、身をすてゝ仁の德をなすとなり。不義にして命生きても、わが心の道理を失へば、生けるかひなし。是仁者の

剛毅木訥者近仁―論語子路篇

巧言令色鮮矣仁―論語學而篇及陽貨篇に重出

仁者必有勇―論語憲問篇に、仁者必ず勇有り、勇者必ずしも仁有らず

志士仁人云云―論語衛靈公篇

勇ある所なり。こゝを以て、程子も、人必有仁義之心、而後有仁義之氣といへり。志は氣の帥とて、心だにつよければ、氣はそれに連れられてつよし。仁義の氣あれば、卽勇武行はる。

一天によく事ふる道を仁とし、よく事ふる人を仁人と云ふ。親によく事ふる道を孝とし、よく事ふる人を孝子と云ふ。仁人の天によく事ふるは仁なり。孝子の親によく事ふるは孝なり。禮記に、仁人の親に事ふるは、天に事ふるが如く、天に事ふるは、親に事ふるが如し。是故に、孝子は身を成すといへり。親に事ふるには、愛をおもくし、天に事ふるには、敬をおもくす。愛敬を盡して、天に事へ、親に事ふるは、其身の德行の成就する道なれば、これを身を成すと云ふ。天は地を統ぶ。地は天の内にあり。故に天道をいへば、地道は其内にあり。天に事ふれば、地に事ふるも、其内にあり。

禮記に云々—前註、四四八頁參照

一孔子の教は、唯仁の一字を專らとし給ふは、仁は四德を統べ、萬善百行の本とする理なればなり。しかれば人道は唯ひとへに仁を以て本とせり。仁義禮智は人の性の條目なれど、皆仁より出づる所にして、仁わかれて四となれり。是を以て、五常は仁を本とす。仁を以て、義禮智を兼ぬ。仁は仁の本體なり。禮は仁の節文なり。義は仁の斷制なり。智は仁の分別なり。是四德は、皆仁にこもれり。たとへば春は生氣の初なり。夏は生氣の長ずるなり。秋は生氣のをさまるなり。冬は生氣のかくるゝなり。是春を以て夏秋冬を兼ぬ。仁の義禮智を兼ぬるも、亦かくの如し。故に明道の曰、義禮智皆仁也と。されど仁義禮智のわかてるは何ぞや。仁の内、自ら此四德あり。これをわかてば、仁の理いよ〳〵明なり。四にわかつは、仁の理を明かにせんが爲なり。四時をわかてば、一年の元氣の運行明白にして、知りやすきが如し。

明道—程明道をいふ、メイダウと讀むが普通也、名は顥字は伯淳、宋の大儒也

孔子云々—

一四德四端。いづれも四の者をならべ說くといへども、其はじめ、まづ仁心なければ、必義禮智なし。惻隱の心なくては、生理ほろび、心かたくなに愚にして、羞惡辭讓是非の端もおこらず。たとへば石の頑にして、生氣もなく、心もなきが如し。俗語に、物のあはれを知らざるは、木石の如しといへるが如し。又身のなえしびれたる所は、刀にてつき、火にてやけども痛をおぼえざるが如し。仁は生理なり、あはれみなり。あはれみ無くて、物のあはれを知らざる人は、義理もなく、禮もなく、知慧もなきものなり。是惻隱なければ四端なし。惻隱の四端を兼ねたる所なり。

一仁は人の性にして、人々に皆そなはれり。孔子、仁を行ふの道をば常に說き給ふと

論語子罕篇に、子罕に利と命と仁とを言ふと見え、程氏之に註して曰く、命の理は微、仁の理は大、皆夫子の罕に言ふ所也

李延平―宋代の人名は侗、字は愿中、學者延平先生と稱す、朱子の師也

いへど、其理のふかき事は、聞き得る人少なければ、稀に說き給へり。又一事の善も仁心より出づといへども、仁の全體は、至て大にして、少しもきずなきを以て名づくる理なれば、仁を以て人に許し給ふ事まれなり。顏子の亞聖も、三月仁にたがはずとのたまひ、三月の後は、仁あることをゆるし給はず。仲弓、子路、冉求、子貢、公西華などは、皆孔門の歷々の高弟なり。されど皆仁をばゆるし給はず。陳文子令尹子文は、其行高しといへども、夫子各其長ずる所をば許して、仁をゆるし給はず。是仁は至て精粹にして、廣大なる道理なればなり。李延平曰、當レ理而無二私心一則仁矣。いふ意は、行ふわざ道理にかなひて、心中に私なきは、仁なりとなり。行ふ所理にかなへども、心に私あるは、仁にあらず。心に私なきとても、行ふ所理にあたらざれば、仁にあらず。內外共にきずなき人は、孔門の賢者といへども得がたければ、孔子の、かるゞしく仁を人にゆるし給はざるゆゑ、是なるべし。伯夷叔齊をば、仁を求めて仁を得たりとの給ひ、微子箕子比干をば、殷に三仁ありとのたまひて、皆仁をゆるし給ふは、其心私なく、其行理にかなへるゆゑなり。

五常訓卷之三

○仁之下

顏淵仁を問ひ給ふ―論語顏淵篇に顏淵仁を問ふ、子曰く己に克つて禮に復るを仁と爲す一日己に克つて禮に復れば天下仁に歸す仁を爲すは己に由

一孔子の弟子顏淵、仁を問ひ給ふ。孔子答へて曰、克己復禮爲仁。己とは身の私欲也。禮とは、身の行ふこと理にかなひて、ほどよきを云ふ。仁を害するものは身の私欲なり。身の私欲にかちて、身の行ふ所理にかなひて、ほどよきに立ちかへりぬれば、本心の德に害なくして、全くなる。全しとは、きずなきを云ふ。是仁をなす工夫なり。凡私欲は、おのが身より出づるものなる故に、己が身にかつは、卽私欲にかつなり。禮は元來吾が身に生れつきたる理なれど、私欲に奪はれて、取失へるを、もとの如く取返して、立歸るべしとなり。顏子、又、克己復禮べき條目を問へり。孔子こたへ給ふ意は、凡人の身に、耳目口體あり。目は見、耳はきゝ、口はいひ、體はうごく。人のわざ多しといへども、此四の事の外にこれなし。此四の事につきて、其心

りて人に由らんや、顔淵曰く請ふ其目を問ふ子曰く非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮動く勿れ云々

學問之道云云―仁は人

に私欲なくして、禮を以て物を見、物を聞き、禮を以て口にいひ、體にうごくべし。非禮とは、上にいへる、己が身より出づる私欲なり。淫聲邪色などの、外物の非禮にはあらず。非禮勿視とは、身に禮なくして、私欲を以て物を見る事をいましむべしと也。外の邪なる色見ざるは云ふに及ばず。非禮して勿聽とは、身に禮なくして、私欲を以て物を聞く事をいましむべしとなり。外の淫聲を聞かざるは云ふに及ばず。非禮していはず、非禮して動かず。此四の者は、身の私欲にかちて、天理にかへる工夫の條目にて、卽仁をするの事なり。克己は人欲にかつなり。復禮は天理を存するなり。人欲にかちて、又天理にかへる、二の工夫なり。一を缺くべからず。人欲にかちたるのみにて、天理を存せざるは、異學の事なり。此問答は、孔顔傳授の心法なり。いるがせに思ふべからず。學者のつとめ行ふべき所なり。

一身の私にかちて、道理に立ちかへるは、仁の體なり。人を愛し、物を利益するは、仁の用なり。體ありて後、用行はる。故にまづ我が身の私にかち、禮にかへるべし。人欲去らず、天理行れずしては、仁愛の道、人に施しがたし。

一孟子は、仁人心也と說き、學問之道無他、求其放心而已矣と說き給ふ。求放心と

の心也の語の續きに曰く、義は人の路也、其路を舍てゝ由らず、其心を放ちて求むるを知らず、哀なるかな、人鷄犬の放るる有るや則ち之を求むるを知り、放心有りては求むるを知らず、學問の道他無し、其放心を求むるのみ

は、仁心の、外物の欲にひかれて取失へるををさめて、求め得べしとなり。學問の要は、わが仁心の放れたるを求め得るより外にこれなし。放心を求むるの工夫は、敬にあり。敬とは、おそれつゝしみて、此心をまもり保つ工夫なり。內にある仁心をば、外におしひろめ行ふべし。外物にひかれて、仁心を放ち失へるをば、をさめて內に入るべし。

一程子曰、觀天地生物氣象。是天地の生理のやまざる處。眼前に見えたるをいへり。其氣象は、卽溫和慈愛なり。人にありては仁なり。又曰、萬物之生意最可觀。言ふ意は、萬物皆生意あり、是仁なり。中につきて、物のはじめて生ずるは、生意さかんにして、見えやすし。竹の子など、はじめ生ずる時、日夜に長ずる事さかんなるを以て見るべし。枝葉しげれる時は、生意見えがたし。仁の理、はじめて惻隱にあらはるゝ時は、此心尤さかんにして見えやすし。ひろく政をおこし、仁をほどこす時にいたりては、其理廣大にして、かへつて見えがたし。又曰、觀鷄雛、此可觀仁。鷄のひよこの初て生じて、動きやまざるも、生意のはじめてさかんなる時、此理見よければなり。又曰、切脈最可觀仁。此意は、人の脈の、常に發して止まざるは、生意の

仁は人なり—前出四三三頁參照、子思は孔子の孫にして中庸の著者也

孺子の云々—前出、四一九頁參照

つねに止まざるなり。又曰、滿腔子是惻隱之心。言ふ意は、人の胸中にみち〳〵たる者は、惻隱の心なり。中にみち〳〵てある故に、物にふるれば、卽仁心おこる。子思孟子の、仁は人なりとのたまふも、此意なり。人の身に、仁の理みち〳〵てこれあるゆゑ、仁は人なりといへり。たとへば人の身には、生氣みち〳〵てある故、針にて刺しても、いたむが如し。人の心に、仁愛の理みち〳〵てあるゆゑ、孺子の井に入らんとするを見て、たちまち惻隱の心生ずるは、此故なり。是れを眞心と云ふ。人の本心なり。人欲の私より出づる心は、眞心にあらず、本心をとり失へる也。程子又曰天地生物之理可レ觀、而不レ可レ言、識レ之者便知レ道也。天地の物を生ずる理は、眼前にみちて見ゆる處なれば、見るべしといへど、其理は、ことばに述べがたし。若これを知れる人あらば、卽道を知れる人ならんとなり。右の數說は、程子の、よく仁を知れることばなり。仁を知らずしては、如レ此言ひがたかるべし。學者心をつけて、此等の說をしづかに玩味して、天地生物の理を自得すべし。もし此理を自得せば、仁を知れる人なるべし。しからば、其の樂、手のまひ足のふむ事を知らざるべし。此理を知らずんば、四書六經の文字訓詁を詳かに知り、其上博學多識にして、古今に通ずとも、道を

元亨利貞—易の傳に、元亨利貞は之を四德といふ、元とは萬物の始、亨とは萬物の長、利とは萬物の遂、貞とは萬物の成なり云々

火のはじめて云々—孟子の語にもとづく、前註一二六頁參照

知らぬ人なるべし。

一程子曰、四德之元、猶三五常之仁一、偏言則一事、專言則包二四者一。いふ意は、天の元亨利貞の四德は、元を以て兼ねたり。元は天の物を生ずる理なり。これを以て、亨利貞をつらぬけり。春の生氣を以て、夏秋冬をつらぬくが如し。天の四德も、人の四德も、ひとつ〴〵ならべ、如し。仁を以て、義禮智をつらぬけり。五常の仁も、亦かくの平かにしていへば、各一事なり。專にとは、すべて云ふなり。すべていへば、元を以て亨利貞をかね、仁を以て義禮智をかぬ。

一天地の、萬物を生ずるめぐみの心を、わが身に體認して心とし、其善心の、はじめておこる所を養ひそだて、これを害する所の私欲を去りて、火のはじめてもえ出づるを吹きおこすが如く、泉のはじめて流れ出づるを導きて流すがごとくにせば、一念の惻隱をおしひろめて、萬民をすくふべし。一念の羞惡をおしひろめて、萬民を正すべし。是をおしひろめ充つれば、四海ををさむ。おしひろめざれば、まぢかき父母に事ふるに足らず。

一程子の言に、聖賢の仁をいへる處をあつめて見ば、仁を知り得んといへり。今の學者、

仁を知らんとならば、孔孟程朱の仁を說き給へる言を、數年の間、心をひそめて、求め味ふべし。急迫にすべからず。誠積み力久しくば、自然に其理を知るべし。若然らずば、聰明博學の人といへども、仁をば知りがたかるべし。

一虞書に好レ生之德と云ひ、安レ民則惠といへるも、皆仁なれども、未だ仁の名なし。仁の字、聖經に見ゆることは、尙書の仲虺之誥にはじめて出づ。曰、克寬に克仁にといへり。其次に伊尹の語に、民罔レ常懷、懷レ于有レ仁といへり。孔子に至りて、專らに仁の一字を以て敎とし給ふ。孟子も亦孔子の敎を發明して、專ら仁を說き、又仁義を說き給へり。凡仁を專らとして敎へ、仁義をそなへて說き給へるは、是孔孟の家法なり。

一いにしへ國家の長久せしは、其君仁なればなり。桀紂以下、歷代不仁の君ほろびざるは無し。堯舜湯武は申すに及ばず、漢の高祖文帝、後漢の光武、唐の太宗、其餘歷代の賢君は、皆仁愛ありし故、國家長久せり。凡國家の興亡、身の安危皆仁と不仁とによれり。貴きも賤しきも、仁の道豈つとめざるべけんや。禹湯は、己が身をせむ。故にさかえたまふ。桀紂は人をせむ。故に亡びたり。己をせむるは仁なり。人をせむるは不仁なり。左傳に、國のおこるは、民を見る事やぶるが如し。其亡ぶるは、民を見ること土芥の如しといへるも、仁不仁の異なるなり。

虞書―書經の一篇也

からをきり

一鳥獸蟲魚を、すべて物と云ふ。物を生す事をこのみ、殺す事をきらふは、人の本心なり。されども、口腹の欲を以て、物をころす事を好むは、本心を失へるなり。命ををしみ、死をおそるゝ事、物も人と同じ。ころさるゝ時、いたみくるしむ事、物も人と同じ。子を愛する事も、物も人と同じ。たゞ物は、智なく力なく物いはず。是人とかはれり。こゝを以て、人に殺されて食はる。肉食をこのむ者は、小鳥は、一食におほきこと十にいたる。はまぐり小えび小魚の類は、一食に數十百にいたる。或は生ながら、やき煮てくらひ、或は生ながら、きりわりて食ふ。不仁なりと云ひつべし。仁に志あらん人は、物のかなしみをかへり見て、あはれむべし。ころす事を好むべからず。

一禽獸蟲魚は知なし。草木は情なしといへども。人と同じく、天地の氣をうけて生ず。禽獸蟲魚の命ををしみ、草木の其生をとげんとする理は、人と同じ。如何ぞみだりにこれを殺し、からをきり、根をたつべき。されど五穀をさまたげ、人に害あるをば、

殺しきるべき道理なれば、是非に及ばず。又俸養のため、人の利益となり、民用を助くれば、やむことを得ずして、これを用ふ。是義なり。然らずして、人間に妨なくば、其生育をとげしむべし。是物を愛するの仁なり。不仁なる人は、わが身の外は、すべて心をかよはさずして、情なく、物のあはれを知らず、物を苦めいたましめ、命を斷つ事をこのむ。あさまし。

一儒者の道、鳥けだものを殺すは、不仁なりと云ふ人あれど、それは道を知らざる人の言なり、君子は故なければ、鳥獸をころさず。故なくして妄にころすは、儒者の道にあらず、末世の人のわざなり。是を儒者の道と云ふべからず。ころすべき理あれば、人をも殺して、義にあたる。いはやん鳥けだものをや。殺すまじき理あれば、草木をも伐らず、禽獸はさらなり。曾子曰、樹木時を以てきり、禽獸時を以てころす。孔子曰、一樹をきり、一獸をころすも、其時を以てせざれば不孝なり。是みだりに木をきり、物をころすは、天地の物をそこなふなり。不孝と云ふべし。いにしへの人、田はたけに作れる五穀をそこなふ鳥獸を殺して、民のために害をのぞき、是を用ひて、宗廟社稷の神をまつり、老をやしなひ、賓客にそなふるため、民の隙を用ひて、武事

—幹を伐りの意、からは幹、莖の義也

四時の狩—爾雅釋天に春の獵を蒐と爲し、夏の獵を苗と爲し、秋の獵を獮と爲し、冬の獵を狩と爲す

をならはしめ、軍法を教へんがため、四時の狩をして鳥獸をころせしは理なり。君子の道は、唯理にしたがふのみ。理にしたがはざれば、親をすてゝ他人を愛し、人を愛せずして鳥獸を愛し、近きをすてゝ遠きを親むは、理にそむきて仁にあらず。君子の人物を愛するは、理一にして、分殊なり。君子の心は、すべて人倫を愛し、萬物を愛せずと云ふ事なし。是理一なり。理一とは、すべて萬物を愛する理は一なり。愛せずと云ふ事なきなり。理一は是仁なり。人を愛する内にも、親、兄弟、妻子、親戚、朋友、臣僕の品あり。是分殊なり。分殊とは、愛する内に、其親しきうとき、高きいやしき、大と小との分によりて、其愛する品に、厚薄のかはりあるを云ふ。分殊は是義なり。禽獸は愛すべしといへども、時により、事により、殺すべき義あり。是又分殊なり。されども是を用ふるに、時あり禮ありて、みだりに殺さず。草木をきるにも、時ありて妄に伐らず。古は春夏に草木をきらず。成長する時なればなり。山林に入りて木をきるにも、鳥獸をころすにも、時あり。獸の子をとらず、鳥の卵をとらず、胎あるも殺さず、巢をくつがへさず。皆是天道にしたがひ、物をあはれむ仁なり。殺すべくして殺すは、義にして、仁其中にあり。殺すべくして殺さゞるは、仁に似て

よすがー手段、方法の意

かなしむー本節二個のかなしむの語、共に、哀憐す、可哀相に思ふの義に解すべし

義にそむく。眞の仁にあらず。今の人聖學をまなばず、聖道を知らずして、みだりに聖人の法を議すべからず。

一此世にむまれては、高きもいやしきも、皆同じく天地の子にして、同じ人なるに、なかにつきて、不幸なる人は、家まどしく、財なくして、つねに衣食ともしく、朝夕うれひ苦めり。且年あしく、衣食ともしく、やしなひ足らずして、世をわたるよすがなき人多し。わが身幸にして、かゝる苦なく、かれは不幸にして、かゝる憂にしづめり。彼の貧民、たとひ疏遠の人なりとも、其本をたづぬれば、同じく皆わが兄弟のわびしき人なれば、豈かなしまざらんや。我がともがら、幸に天地の德により、主君の惠をうけ、父祖の恩によりて、たとひ富貴ならねど、世わたる事、さほど苦まざる身ならば、其分にしたがひて、彼の我にしたしき人、我が知れる人の、世をわたりかねて、憂にしづめる人を救はざらんや。もしこれをかなしと思はず、救ふ志なくば、我ながら不仁にして、天地の御心にそむきぬる事、おそるべきと思ひ、自ら其身を責むべし。我が身のやしなひは、如何なる富貴の人といへど、日に一升の穀をくひ、年に一襲の衣を著るに過ぎず。されば我が身の俸養は、さほど豐かに厚からずして、多く

多く藏むれば云々ー老子名譽身章に、名と身と孰か親しき身と貨と孰か多る（まさる）、得と亡と孰か最病しき、故に甚だ愛すれば必ず大いに費え多く藏むれば必ず厚く亡ふ

易に云々ー前出、二六五頁參照

の費をなさずとも、身ひとつを過し、且父母、妻子、從者をやしなふ事も、足りやすかるべし。其餘の財は、さほど多く積重ねずともありなん。多く藏むれば、必厚くうしなふと、古人のいへる如く、財を多く積重ぬれば、かへりて禍出でくる理あり。天の惡み給ふ所なればなり。彼の世をわたりかねて、うれひ苦める人に、わが力にしたがひて、施したすけば、あに心よからざらんや。是われに天地より生れつきし所の仁を行ひて、天地につかうまつる道なれば、わが職分をつとむるなり。

一天地の、我に財祿を多くあたへて、富貴にし給ふは、必我一人のために、厚くめぐみ給ふにはあらず。我が力を以て、貧なる者に財をほどこし惠ませんために、我におほく財祿をあたへ給ふ理なれば、人に施さざるは、天の御心にそむく理なれば、おそるべし。我が財を惜むべからず。もし天心にそむき、財多くして人に施さざれば、わざはひ出來るものなり。易に天道はみつるを缺くといへり。又物みつれば缺くともいへり。古語にも、あつまれば散ずとも云ふ。財おほくて、人の貧窮をめぐまざれば、みちて缺くるの禍あり。おそるべし。又我が采地の民は、我が養ふべきものなれば、年凶にして、饑饉に及ばゝ、わが身の俸養を儉約にし、費さずして、力にしたがつて

救ふべし。一人も餓死せしむる事なかれ。民の妻子下人を賣らしめ、父母兄弟離散し、貧窮飢寒にいたらしむる事、わが身にかへり見るべし。心をいたましむる至極なり。あはれむべし。凡吝嗇にしては、仁義禮智共に行はれず。殊に仁の道缺くるものなり。又吝嗇ならねども、不仁なる人は、人をめぐむ事をこのまず、無用の事には、財を多く費すもの也。

一道橋の、通りがたき危き所は、力あらば修理して、道行く人を、心やすく自由に通らしむべし。又途中に、人の足をそこなふべき杙荆などあらば、のぞくべし。其外かやうの心づかひをすべし。是陰德にして、仁愛の道なり。

一人もし富貴にして、いたづらに財を貯へ、人に施さざらんは、富貴なる益もなく、思出も無きことなるべし。古人これを守レ錢虜と云ふ。親戚、朋友、又わが家に出入する者、釆地の農人、わが門にくる乞丐など、貧窮にくるしめる者あらば、我が力に隨ひて救ふべし。是富貴なるかひありて、樂とすべき事なり。

一人の世にをるは、陰德をつみ行ふべし。陰德は、かげのめぐみと訓む。慈愛を心の內にひそかにたもちて、人を救ひ助くるを云ふ。世俗にこれを慈悲と云ふ。古人の曰、

守錢虜―後漢書に、馬援、牛馬羊數千頭穀數萬斛あり、歡じて曰く凡そ貨財を施し賑すを貴ぶ、否らざれば則ち守錢虜のみと、盡く其有する所を散じて以て昆弟故舊に頒つ

陰德―前註一三五頁參照

鰥寡孤獨―前出、三九頁參照

殖すは能く

陰德は耳のなるが如し。我のみ知りて、人知らずといへり。又古語に、陰德ある者は、必陽報ありといへり。いふ意は、陰德ある者は、かげにて善を行へども、必天道に通じて、あらはに天のむくいありて、福を得るとなり。

一陰德は、富貴なる人のみ行ふべきにあらず。貧賤の人といへど、其志あれば、行はれずと云ふ事なし。如何となれば、金銀米錢を多く妄に人にあたへ、無益の事をなして、財を多くつひやすを、陰德と云ふにあらず。たゞ我が分限にしたがひ、力の及ぶほど、施しめぐむべし。仁愛に心を用ふれば、誰も成りやすし。せめて我が身の奢と欲とに、財と心を用ふる十分が一の力を費さば、其救ひ施す事ひろかるべし。仁愛ふかくして、久しく陰德をつみ行へる人は、其惠をうくる人の喜ぶのみにあらず、天地神明の御心にかなひ、よろこび給ふ理なれば、必天道のむくいあつく、目に見えぬ鬼神のまもりありて、たびく〳〵禍をのがれ、子孫もながく榮えたのしむこと、其理明かにして、古今和漢、ためし少なからず。何の福か是に如かん、何の祈禱祭祀か是に如かんや。人をすくふ道は多し。うるこゞえする人を助け、鰥寡孤獨のより所なき者を惠み、乞丐の人にほどこし、人の困窮をたすけ、もし位あらば、善人をすゝめ、

かたわ―片羽の義なれば、かたはの假名を宜しとす
ことわり―條理を明かにするをいふ

惡人をしりぞけ、才能を取あげ、人の害をのぞき、人の利をおこし、ひろく民をすくひ助くべし。位なくとも、人をあはれむ心は同じかるべし。人の財をつひやさず。人に苦勞をなさしめず。人の財を借りては、我が身を儉約にして、必早く返して、人をくるしめず。老人病人をいたはり、かたわなる人をあはれみ、人の才能をねたまず、ほめすゝめ、妄に人をそしらず。人に善をすゝめ、惡をいましめ、人を教へてうまず。下部をあはれみ、風雨寒暑に人を苦めず。人のしへたげられたるをことわり、人の恨憤をとき、力あらば道橋を修理して、往來のなやみ無からしめ、又は禽獸蟲魚をみだりに殺さず。草木をも時ならざれば妄にきらず。凡かやうの事を陰德と云ふ。是人をあはれみ、物をめぐみて、天道につかへ奉る道なり。陰德を行ひ、久しきをつめば、必其むくいを求めざれども、後日に必天道のめぐみありて、しば〳〵禍をのがれ、福壽をまし、其家をさかんにして、子孫に福あり。是亦天道の善にさいはひし給ふ常理にして、古今和漢のしるし多き事、あげて數へがたし。うたがふ可からず。貧賤の人すら、陰德を行へば、其報かくの如し。いはんや、一郡一鄕を領し、或は司位高き人は、下をやすんじ、民を養ふを以て職分とすること、是天より命じ給ふ所なり。常に心を用ひて、天意にしたがひ、民をあはれみ、困苦をすくひ、政をおこし、仁をほどこさば、其功大にして、天道のむくいも亦限りなかるべし。富貴の人、多くは陰德の行ふべきことを知らず、勢に乘じて、下の苦をかへり見ず、人のつひえを厭はず、わが身ひとつの榮花をきはむれば、陰德なくして、天地のいかり、人民のうらみ積て、後はわざはひ出來、子孫にもむくふものなり。天道は、まことに畏るべきかな。又陰德をば行はずして、鬼神にへつらひ祈りて、福をもとめ、禍をのがれんとして、無益のことをなし、民をくるしめて、財をつひやす。是をたのんで、禍を免れんとせば、天地神明の御心にそむきて、かへりて禍あり。佛家にて、是を業福と云ふ。佛道においても、甚きらふ所なり。佛道よりいはゞ、佛は慈悲を專らにすといへば、かゝる民の苦となることは、佛意にかなふべからず。故に羅泌が路史と云ふ書に、佛事さかんなれば、天譴を招くといへり。いふ意は、佛事結搆すぎて、過分の財をつひやして止まざれば、民のわざはひとなりて、必天のせめありといへり。古も其ためし多し。梁の武帝、伽藍を多く建て、佛事を盛にせられし事を達磨に問はれしに、無功德とこたふ。武帝は、つひに臣下のために臺城におしこめられ、餓死せらる。かゝる

羅泌―宋代の人、字は長源、學問該博を以て世に聞ゆ
達磨―菩提達磨の畧稱

南天竺國香至王の子にして梁の大通二年（我紀元一一八八年）逝く、支那禪宗の第一祖にして唐の代宗の時圓覺大師と諡す

ことを以て、佛事さかんに過ぐるは天の譴あり。又佛意にもかなはずと云ふ事を知るべし。又報にあはんため、福を求めて善を行ふは、是利欲の心よりいでたり。陰德にあらず。惡を行ふよりまされりといへども、誠の善にあらず。同じく力を用ふる事なるに、誠の心より善を行ふべし。いつはりを以てするも、苦勞は同じことにて、いたづら事なり。

一人は貴き賤しき、唯つねに仁心を存して、日々に、人に利益あることを行ふべし。慾をこらへ、慾をおさへて、日々善行をなすべし。いかりと慾をこらへざれば、善を行ひがたし。唯いかりをおさへ、慾をこらゆる人、善をよく行ふ。わが身を利して、人に損ある事を行ふべからず。我が力にしたがひて、人を救ふべし。仁心をだにたもちなば、日々に善行多かるべし。少しは財をつひやし、少しは心をつかひ、少しは隙をつひやしても、人の利益になる事を行ふべし。人のために益ある事をせずして、我が身に利ある事のみするは、小人の心なり。日々善にならへば、善心日々にさかんになる。日々惡にならへば、惡心日々にさかんになる。善にならへば、日々に樂み、惡にならへば日々に苦む。善惡共にならひによれり。されども惡にはおもむき易し。故に

積善の家云云—易文言傳

天道好還—以道佐人主章に、其事好還とあるをいへるならん

おそるべし。善には進みがたし。故につとむべし。

一およそ人、精力をつひやす者、時にあたりては、其益を見ざれども、時ありてさかんなぬ。精力をやしなふものは、時にあたりては、其損を知らざれども、時ありてつきり。人の善惡を行ふも、亦かくの如し。德をつみ、行をかさぬれば、當時は其福を知らざれども、時ありて世に用ひらる。義をすて理にそむくは、當時は其禍を知らざれども、時ありて亡ぶ。易に、積善の家には必餘慶あり、積不善の家には、必餘殃ありといへるは、此意なり。善は積みかさねて後來るゆゑ、善を行ふ志はおこたるべからず。小善なりとも行ふべし。惡はつもれば必わざはひとなる。故に小惡なりとも行ふべからず。おそるべし。

一尙書曰、天道は善にさいはひし、淫にわざはひす。又曰、善をなせばこれに百の祥をくだし、不善をなせばこれに百の殃をくだす。又老子曰、天道好レ還。是皆天道の、善をこのみ惡をにくみ給ひて、善人にさいはひし、惡人にわざはひして、善惡の報をかへし給ふ理をいへり。此理、古今和漢其證多ければ、必うたがふべからず。愚者は此理を知らで、天道をおそれず、唯眼前の利をむさぼりて、後のわざはひを知らず。豈た

不仁者は云云―孟子離婁上に、不仁者與に言ふ可けんや其危きに安んじ其菑を利とし其亡ぶる所以の者を樂む、不仁にして與に言ふ可くんば則ち何ぞ國を亡ぼし家を敗ること之れ有らん

だ義理にくらきのみならんや。我が身の禍福損得をもわきまへず。かなしむべし。不仁の至なり。

一孟子曰、不仁者はともに言ふべからず。いふ心は、不仁者は、道理を教へいさめがたしとなり。又曰、其危きことをやすんじ、其亡ぶるゆゑんをたのしむ。いふ意は、不仁者は、我が身の危ふき事をおそれずして、やすんじ、其身ほろぶることを行ひて、たのしみとす。愚なりと云ふべし。

一孟子曰、人皆有不忍人之心。忍ぶとはこらゆるを云ふ。かんにんする也。人たる者、必皆人に對して、堪忍ならざる心あり。いふ意は、人のうれひ苦める事を見ては、わが心かなしみて、悚へがたくして笑止がり、うれひかなしむ。是人に忍びざるの心なり。卽仁心なり。此心人皆これあり。孺子の井に入んとするを見て、おどろきかなしむ心是なり。此心をおしひろめ行ふは、仁をする道なり。人のきらひいやがる事を、此方よりしかけて、何とも思はずして堪忍し、科なき人をしへたげ苦めて、何とも思はずして堪忍する、是皆人に忍ぶるの心なり。とにかくに、心つよくして、人の憂をかなしまざるを云ふ。是人の本心にあらず。憂苦を見て、忍びがたきは、人に

人皆有不忍人之心―孟子公孫丑上

笑止がり―氣の毒に思ふこと

克伐怨欲―論語憲問篇に、克伐怨欲行はれず以て仁と爲す可し、子曰く以て難しと爲す可し仁は則ち吾知らざる也

仁遠乎哉―論語述而篇

かぎらず、鳥獸草木まで、そこなひ苦むるに悚へがたきは、卽仁心なり。しかるに唯人に忍びざるの心ありと宣へるは、萬物皆わが一體にして愛すべけれど、中について、人においては同胞なれば、其あはれみ尤せつなる故に、とりわき人に忍びざるの心ありとのたまふ。人の憂苦を見ながら、何とも思はで忍ぶは、心つよき人といふべし。其心つよきといふは、卽人に忍ぶる心なり。是不仁の別名なり。

一仁者は人我のへだてなし。我が身を立つるを半とし、人を立つるを半とす。他人すら隔つ可からず。いはんや一家の親戚をや。況や父母兄弟をや。此心をもて人倫にまじはらば、人我の私少なくなりて、克伐怨欲の、人を害し、我を利せんとする心、やうやく薄く成りて、仁愛の道行はれぬん。人もし此心において、人我の偏執ふかく、唯己を利して、人を惠むに心なきは、たとひ無學の人といふとも、其むまれつきたる天性の良智にも、かほどの理は知りぬべければ、など其本心にそむきて、斯るさがなき事わざをばしぬるや。況や學者は、猶其つみ、殊更おもきことにこそあれ。

一子曰、仁遠乎哉、我欲仁斯仁至矣。仁は人の心なり。なんぞ遠きにあらんや。我に有る故に、このんで求むれば、卽得やすし。是仁至るなり。

張子―張載をいふ、宋の關中の人、兵を談じ釋老を讀み後二程子を見るに及び盡く異學を捨てゝ儒學に歸す、關西の士景仰して橫渠先生と稱せり

悖德―孝經に、其親を愛せずして他人を愛する者之を悖德と謂ひ、其親を敬せずして他人を敬する者之を悖禮と謂ふ

一張子の西銘の意は、仁人の天につかうまつる道をいへり。天を父と稱し、地を母と稱し、人は其惠によりて生る。天地の氣をとりて、我が身體とし、天地の理をうけて、我が本性とす。故に人は天地の子なり。天下にあらゆる民は、われと同じく天地の子なれば、皆我が兄弟なれば、尤愛すべきこと、云ふに及ばず。鳥獸草木などの萬物は、わが類にはあらざれども、同じく天地の氣をうけたれば、我がともがらなり。是又あはれむべし。妄にそこなふべからず。大君は我が嫡兒なり。大臣は嫡兒の家相なり。老人をうやまふは、わが兄を敬ふなり。幼きを慈むは、わが弟を愛するなり。凡天下の病者、かたわ、子なき老人、父なきみなし子、やもめなどの、貧窮にしてたよりなき者は、皆我が兄弟の內にて、不幸なる人なり。とりわき憐むべし。人たる者は天の子にして、天下の人は、皆わが兄弟なる事かくの如し。故におよそ人となる者は、天地につかへて、おそれつゝしみ、天地の道にしたがひ行はずんばあるべからず。人の子として、親に孝するが如くなるべし。天理にそむくは、子として父母にそむく、悖德の子の如し。仁を害するは、天のため賊子なり。賊子とは、親の仇敵となる子を云ふ。天につかふる道をつくして、天心にかなへる人は、子として舜の如き大孝の人なり。天災にあひて、難儀に及ぶといへども、つゝしみて天命を畏れしたがひ、天を怨みざるは、人の子としては、申生が繼母の讒にあひて、父獻公より殺されしかど、父母をうらみざるが如し。天よりうけたる所の五常の性を、全くたもち行ひて缺かざるは、たとへば曾子の、父母にうけたる身體を毀ひ傷らざるが如し。天より我を富貴にし給ふは、父母の我を愛するが如し。天恩をよろこんで忘るべからず。天より我を貧賤にして憂あらしむるは、天の我を惡み給ふにはあらず、我が身に艱難を見せしめて、我が德行を成就せしめん爲なれば、天を怨むべからず。親に事ふる孝子は、其身生ける間は、親にそむかず、したがひ事ふ。死ぬれば心安んじて、親に恥づる事なきが如く、天につかふる人も、生ける間は、天道に從ひてつかへ奉るが、人となれる道なり。死ぬれば心安くして、天に恥づる所なかるべし。是いはゆる、朝に道をきいて、夕に死すとも可なりの意也。凡西銘の意は、はじめより半まで、人は天の子にして、天地萬物、皆我が一體なることを說けり。半より後は、天地につかへて仁を行ふ道をいへり。尤よく見て、其理を自得すべし。

朝に道をきいて―論語里仁篇

西銘―前頁に出でたる張載の著書

一同じ事を、重てしばくいふ事、老のくりことのやうにて、見きく人、厭ひきらひ給

ふべけれど、仁の理、いたりて大なれば、我が愚にして、一たびに、たやすく理のきこゆる程説きがたければ、如何にもして、此書を見る人に、古人のいたれる教をさとらしめんために、愚忠をつくして、かへすがゝいふのみ

五常訓卷之四

○義

一中庸曰、義者宜也、尊賢爲大。朱子章句云、宜者分別事理、各有所宜也。周子も、宜曰義。釋名曰、義者宜也、裁制事物、使合宜也。諸說皆宜しきを以て義とす。宜しきとは、萬事萬物の品にしたがひ、其理をわきまへて、相應するを云ふ。朱子は、義者心之制、事之宜といへり。制とは、たちわかつ意。裁判するなり。心の制とは、心中に善惡をわかつ所の理あるを云ふ。義の心にあるは、利刀の如し。物來れば、刀を以てたてば二となる。善惡を決斷する事、かくの如し。是心の制なり。義の體とす。事之宜とは、諸事に相應して、其理の宜しきにしたがふを云ふ。是義の用とす。事之宜は、心の制ありて、善惡をたちわかちて後の事なり。人を愛するは仁なり。父母、兄弟、妻子、親戚、朋友賓客の親疎貴賤の品にしたがひ、其相應に愛するは宜なり。是

墨子が兼愛―前註、一二八頁參照

を義と云ふ。人を愛するは仁なりとて、親も他人も一やうに愛するは、宜にあらず。是墨子が兼愛なり。宜とは其物其事に相應するを云ふ。たとへば、夏はかたびらを著、冬はわた入の小袖を著るが如し。宜しきに品多し。人の位により、時により、處により、年の老幼により、其外萬事萬物に附て相應あり。是宜なり。宜にかなふは、卽義なり。朱子又義者斷制裁割之道理といへり。斷制裁割は、たちわかつの意。是仁の溫和慈愛に對していへり。事物にのぞめば、其善惡をたちわかつこと、たとへば利刀を以て物を二にさくが如し、仁は春夏の氣の、のどけく、やはらかにして、萬物を生長せしむるが如し。義は秋冬の氣の、ひやゝかに、はげしくして、物を枯し凋むるが如し。中庸に、義者宜也、尊賢爲大とは、上に仁者人也、親親爲大といへるに對せり。仁はあまねく人を愛する理なり。義は愛すべき人を、各其品にしたがひて愛し、又敬ふべき人を敬ふ理なり。其中につきて、賢人を尊ぶは、尤義の大なるなり。如何となれば、多くの人の內にて、人をえらびわきまへて、賢人を尊ぶは、其人に相應したる事なり。是宜なり。賢をたつとびて、大賢は師とし、小賢は友とすれば、其教いさめをうけ、我が智ひらけ、萬の道理明かになり、わが身のわ

仁は人の心なり―前註四三三頁參照

つたなき―怯の訓也、卑怯未練の義に解すべし、拙きにはあらず

ざ、道理にかなふ故に、賢を尊ぶほど、大に宜しきことは無きなり。孟子も、仁は人の心なり、義は人の路なりとのたまへり。仁は人の心とする所、生理なり。義は人の行べき路とする所、道理なり。仁なければ、人心を失へるなり。義なければ、人道を失へるなり。凡義は、つねに居ては、理にしたがひ、欲にしたがはず。變に居ては、節を守りて、利に走らず。艱難に臨みては、君上のため身をすてゝ、忠を行ふ。義なければ、常に居ては、理の宜しきをすてゝ、唯利のためにし、變にのぞみては、恩をわすれ、德にそむき、利につき、害をのがれ、命ををしみ、死をおそれ、君父をすてて敵にくだり、つたなき振舞をしても恥ぢず。禽獸にひとしきわざなり。皆是義を失ふなり。

一仁は、溫和慈愛なるを云ひ、義は斷制なれば、善惡を二にわかちて、善をこのみ惡をにくむを云ふ。ひろく衆を愛するは仁なり。小人を遠ざけ、君子に近づくは義なり。財を人に施すは仁なり。與ふべきか、與へまじきかをはかりて、與ふべきものに與ふるは義なり。こゝを以て、仁は理一なり、義は分殊なり。仁はひろく人を愛す。是理一なり。義は人を愛するに、親疎貴賤貧富をわかちて、其宜しきにしたがひて、各其

分にかなふは、分殊なり。

一尚書に、以レ禮制レ心、以レ義制レ事といへり。禮は敬のみ。敬して心の私曲を制するなり。制すとは、たとへば長きを斷ちてよき程にし、多きをへらしてよき程にするが如し。物を裁判してよきやうにするを云ふ。是仁をたすくるなり。一年の功も、春夏生長するは仁なり。秋冬收藏するは義なり。收藏とは、草木零落し、生氣をさまりて、根にかへるを云ふ。仁ありて、義なければ、たとへば春夏の生長するばかりにて、秋冬の收藏なければ、萬物成就せざるが如し。子を育つる一事を以ていはゞ、子を愛するは仁なり。子の惡を戒むるは義なり。愛せざれば、恩なくして他人の如し。愛のみにて戒めざれば、其子不義にながれ、惡におち入りて、わざはひとなる故、姑息して愛するが、かへりてあたとなりて、眞の愛にあらず。君を愛するは仁なり。君に過あれば諫め、君のために身を忘るゝは義なり。君として下を愛するは仁なり。臣の惡をいましめ、臣下の才德の高下と、貴賤の位にしたがひて、各相應につかふは義なり。又人民を愛し養ふは仁なり。法をたて罪あるを刑して、いましむるは義なり。愛せざれば、人民安から

わかち—區別の義

易において云々—前註四一五頁參照—

孟子の云々—梁惠王上に、孟子梁の惠王に見ゆ、王曰く叟千里を遠

ずして、生養をとげず。いましめざれば、惡人こりず、人を妨ぐる故、仁愛の道行はれず。惡人を戒むるも、人を助んとの心なれば、義も仁よりいづ。人を愛するは仁なり。善人を愛し、惡人を罰するは義なり。文道を以て、人民を愛しなつくるは仁なり。武道を以て、人をおどし、敵をうち、亂を鎭むるは義なり。文武の道も、卽仁義よりいづ。凡此等の理を以て、おして仁義のわかちを知るべし。仁義はもと一理にしてわかれたり。一を缺くべからず。人道は唯仁義の二にあり。故に聖人易において、人の道をたてゝ、仁義と云ふとのたまへり。二の者そなはりて、人道たつ。人の禽獸にかはれるは、唯仁義あるによれり。人は萬物の靈と稱し、天地の性は、人を貴しとし、萬物にすぐれたれば、我が身ながらも貴きは、是仁義の性ある故なり。もし仁義をすてゝ行はずんば、何ぞ貴ぶに足らんや。

一孟子の、梁惠王に對して、利をおさへて、仁義を說き給ふは、仁なれば、心に私欲なくして、人を愛する故に、人をそこなひて、わが身を利することはせず。義なれば人に取ると、人に與ふると、必宜しきにかなふ故、取るまじき物を取りて、我が身ひとりを利する事をばせず。利は仁義のうら也。我が身に私して、人をかへり見ず、

しとせずして來る亦將に以て吾國に利するあらんとするか、孟子對へて曰く、王何ぞ必ずしも利と曰はん亦仁義有るのみ

利者義之和也―易に出づ

張南軒―張栻を謂ふ、字は敬夫、宋の廣漢の人、朱熹と親交ありき著はす所南軒易說、南軒集等あり

我が身を利すれば、必人を害す。其はては、必我が身の禍となる。義を行へば利を求めずして、利自らあり。故に利を以て利とせず、義を以て利とす。されども利を得んために義を行ふは、眞の義にあらず。

一董仲舒曰、仁人正其義、不謀其利、明其道、不計其功。利とは義を行ふ自然のしるしなり。故に利者義之和也といへり。君に仕ふるを以ていはゞ、朝夕つゝしんで君によく仕ふれば、君もよろこびて、我を愛し給ふ。是義の和する處利なり。君子の、君につかへて義を行ふは、唯一すぢに君のためにして、私のためにせず、君の寵愛をねがふ心あるべからず。是義を正して利をはからざる也。君に仕ふるに限らず、萬のこと、皆かくの如し。すこしも我がためにする心あるは利なり。義にあらず。此利は、みだりに財祿をむさぼる如くなる利欲にはあらず。仁人の事なれば、利欲は云ふに及ばず。義を行ひて、自から來る自然のしるしを云ふ。其自然のしるしを得んと思ふは利なり。張南軒、義と利とを說いて曰、義は爲にする處なくして爲るなり。利は有所爲而爲之也。いふ意は、義は唯我がすべき道なればするなり。名聞利養か何ぞ、わが身の爲にするにはあらず。もし名聞利祿私愛のためにするは、義にあらず。是利なり。

董子の言まことに至れるかな。張南軒の說も、亦道理分明なり。共に諸子にすぐれたり。君子の道は、萬事の行皆義理に志して、我が身のために計らず。是君子の心とする處、小人のことなる處なり。たとひ天下に公なる善事を行ふとも、心にわが爲にする私あらば、是義に非ず、利なり。小人の身に善行なくして、心ひとへに利をむさぼりて、義をすつるは、言ふに足らず。たとひ人ありて、身に行ふこと善なれど、其心に露ほども、わが利を計りねがふ所ありて行はゞ、鄕里のほまれある人といへども、義にあらず。此所は、君子の心術の上にてくはしき論なり。小人の上の沙汰にはあらず。たとへば潔白なる物に、一點の墨を附くれば、白と云ひがたきが如し。天理人欲同行異情と、胡五峯いへり。天理は義なり。人欲は利なり。義も利も、身の行は善なれば、同じ事なれど、心底に公と私とのかはりあり。是同行異情なり。是亦義利の分ちなり。又王霸の辨もこゝにあり。いにしへの聖人、仁義を行ひて、民をなつけ給へば、國天下の民、自らよろこんで、まことに歸服す。是誠の道を以て、民ををさむる也。是を王道と云ふ。堯舜、禹湯、文武などの行ひ給ひし道是なり。又仁義の德はなけれど、仁義の名をかりて、善を行ひ、民を服し、亂をしづめて、國天下

胡五峯―宋代の人、名は宏、字は仁中、著はす所知言及び皇大紀あり、學者五峯先生と稱す

古之學者爲己―前註、八五頁參照

王伯―王霸に同じ、王者と霸者と也

子路問へり―論語陽貨篇に、子路曰く君子勇を尙ぶか、子曰く、君子義を以て上となす、

を得んと思ふ。是行ふ所は善にして、王道に似たれども、內心には、國土を得んと思へる利欲ありて、僞て仁義を行へるなり。是を霸道と云ふ。齊の桓公、晉の文公などの行へるわざなり。是亦義と利とのわかちなり。學者のなす所も、是に同じ。孔子曰、古之學者爲己。是ひとへに、身ををさめん爲にせし學問にて、義なり。又曰、今之學者爲人。是人にほめられ、名を得んためにする學問なれば、利なり。しかれば、王伯のわかちも、君子小人の分も、學問の實否も、皆義と利との二ツよりわかる。

一子路問へり、君子は勇をたふとぶやと。子路は勇をこのむ人なれば、かくは問へり。孔子こたへて曰、君子は義をたふとぶ。位ある君子、もし勇のみありて義なければ、其力にまかせて反逆をなし、亂をおこす。位なく賤しき小人、もし勇のみにして義なければ、其力あるをたのみて、盜賊をなす。凡勇は、氣に力ありて、人をおそれざるを云ふ。力を恃みて義無ければ、かくの如し。義は事の主なり。義を以て事を行へば、其事正し。義なくして事を行へば、其事皆邪なり。勇はまことに善をなすべき力なり。義を以て勇を行へば、其勇貴ぶべし。治世には、其力を以て善をなし、亂世には、其力を以て、武を行ひ、敵をうち、亂をしづむ。是皆義を以て勇を行ふ德なり。まこ

君子勇有りて義無ければ亂をなし、小人勇有りて義無ければ盜をなす

義を見てせざるは勇なき也―論語爲政篇

改むるに憚る―論語學而篇に、過ちては則ち改むるに憚ること勿れ

見利思義―

とに貴ぶべし。もし義なくして勇を用ふれば、かへりて道にそむき、物を害す。たとへば刀を以て敵をきり、惡人を殺すは義なり。刀を以て罪なき人をきるは、暴惡と狂亂となり。

一見善則遷、有過則改。此二句、易の益の卦の文なり。我が行ふ處惡しからざれども、人のいふ事、人の行ふ處、わが行ふ處より、まさりて善なるを見ば、卽我が行へる事をば捨てゝ、少しなりとも優れる方に遷るべし。是を、善を見て卽うつると云ふ。いまだ善き事と知らずば、すべきやう無し。既にすべき義と知りて行はざるは、力も無きことなり。是義を見てせざるは勇なき也。過あれば則改むとは、我が行あやまりあらば、卽時に早く改むべし。猶豫して、我がひが事をかざり、改むるに憚ることなかれ。義を見て遷るは、其工夫かろくして易し。過を改むるは、其工夫おもくして難し。十分に力を用ふべし。たとへばうす白き物を潔白にするは易し。黑き物を白くする事は難きが如し。此二は、卽義にうつる道なり。是學問の道のつとむべき處、力行の要なり。

一見利思義。利は一切の我が身の便よき事なり。財祿にかぎらず。財祿を得るも、亦其

論語憲問篇

中にあり。わが身のため便よく、或はたからを得、祿を得る事ありとも、得べきか得べからざるか、唯義のある處を思ふべし。利をむさぼりて、義を忘るべからず。義と利とは、善と惡と、君子と小人とのわかるゝ處なり。義とは天理の公なり。利は人欲の私なり。專わが身の爲よきやうにするは利なり。我が身を利せんとすれば、必人に害あり。是惡なり。人に害あれば、必我が禍となる。人を利するは、是義なり。義あれば、道理と和する故、利を求めずして、自ら利は其内にあり。されども利を得んため義を行ふは、私意なり。君子のする所にあらず。

君子之云々—論語里仁篇

一子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比。君子は天下一切のことにおいて、專らに主としてすべき事も無く、又すべからざる事もなし。是萬の事、善惡一定せず、唯時の宜しき道にしたがふべし。一事を以ていはゞ、世に出でて必仕ふるを專らにせず、是無適なり。仕へまじき時は仕へずして、世をのがるべし。又必仕へざるを以てむねとせず。是無莫なり。仕ふべき時は仕へて、道を行ふべし。然れば、仕ふるも仕へざるも、唯義とともにしたがふべし。仕へて宜しき時は仕へ、仕ふまじき時は仕へず。是義にしたがふなり。たとへば道を行くに、早きがよしといふは適なり。早きを惡しゝとするは莫なり。早く行きてよき時は早く、しづかに行きてよき時はしづかなるは、義とともにしたがふ也。人に物を與へんと定むるは適なり。與へまじきと定むるは莫なり。與ふべき時は與へ、與ふまじき時は與へず。是義とともにしたがふなり。萬のこと、皆是を以ておして知るべし。義は事の主なり。萬事の善惡一定せず、唯義にまかせて行ふべし。是善なり。

禮運—禮記の一篇

一禮運曰、何をか人義と云ふ。父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、十者これを人義と云ふ。仁は人を愛する德なり。人を愛する中について、各其人によりて、相宜しき道あり。是義なり。父は子をいつくしみ、子はおやに孝を行ひ、兄は弟によく、弟は兄にしたがひ、夫は婦に義あり、婦は夫にしたがひ、君は臣に仁あり、臣は君に忠ある、此十の者は、人の義なり。義は各其人に相應して宜しきなり。是人倫の道にして、宜しく行ふべき道なり。故に人義と云ふ。

見危致命—論語子張篇

一見危致命、見得思義。論語子張之語也。人の危難なるを見ては、我が命ををしまず。君父のために身をすつるは、言ふに及ばず、朋友といへども、時宜によるべし。或は朋友と相ともなひて、道を行く時、不意に敵する者ありて、朋友を殺さんとす。

たとひ我が老父母ありとも、其所を退き去て、身をのがるべき義にあらず。身をすて、敵をふせぎて、友を助くべし。是危きを見て、命を致すなり。此時もし、われ父母ありと言ひて逃去らば、義にあらず。いまだ事も無き常の時に、かねて朋友に我が身を許し與ふるは、義にあらず、不孝といふべし。時にあたりて危きを見て、命をすつるは義なり、不孝にあらず。凡義をすて〻行はざれば、死ぬべき節義にあたりても、身をのがれ、かひなき命生きて、恥を世々につたふ。斯あらんよりは、義を行ひて、死して榮名を世にのこさんこそ、亡きあとまでの面目ならめ。見得思義とは、財と祿とを得るに、みだりに利をむさぼりて、得まじき物をとるは、義にあらず。此物、わが得べき義か、得べからざる義かと、みづから思案して、義にあたらば得べし。義に害あらば得べからず。もし得べからざる義ならば、萬鍾の祿は云ふに及ばず、一介といへども人に取るべからず。もし取るべき義にあらば、舜の、堯の天下を得たまふも、不義なりとすべからず。得べからざる義にあたりても、わが得る力に心ひかれて、得ても義に害なしと思ふは、私欲にひかれて、是非の心迷ひくらきなり。

一義は天理の公なり。利は人欲の私なり。二の者は、各別の事にて、雪と墨との

萬鍾―莫大の量、左傳の註に六斛四斗を鍾と曰ふと見え、漢書食貨志の註に鍾は十斛といへり

如し。然れども、義を專らにして、わが身に私せず、人のため宜しくすれば、利を求めざれども、自ら我が爲よからずと云ふ事なし。故に易にも、利者義之和也と云ふ。大學に、國は利を以て利とせず、義を以て利とすといへり。利欲を恣にして、我が身ひとつを利せんとすれば、必人に害ありて、我が身の禍となる。古語にも福は禍のかくる〻所といへり。愚者は、此理にくらくして、唯われ一人の爲よからん事を計れども、是卽わが身の害となる。眼前の利をはかりて、後來のわざはひを知らず。

一子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之、君子哉。云ふ意は君子の事を行ふは、義を以てした地とすべし。義は事を制する本なれば也。萬の事を行ふに、まづ義か不義かをかへり見るべし。義にあらずんば、行ふべからず。義に合はゞ行ふべし。是義を以てしたぢとする也。其上は、禮を以てすべ、よく行ひ、孫を以てへりくだりて、人にたかぶらず、信を以て、始終眞實に行ふべし。是君子の行なり。されども義なければ、其事の主なし。故に禮孫信の三そなはりても、非義なれば見るに足らず。尙書に、以義制事といへるも、此意なり。

子曰云々―論語衞靈公篇、孫は遜に通ず、へり下るの義也

○禮

一禮は心につゝしみありて、人をうやまふを本とし、萬事を行ふに、則にしたがひて、正しく理あるを文とす。則とは作法なり。孝經に、禮敬而已矣。云ふ意は、禮は敬を專らとす。而已とは、此外には無しと云ふ詞なり。朱子曰、禮の本は在二于敬一人。人をうやまふは、心のつゝしみより起る。人を敬ふも、其人をあはれむ心より出づる故、朱子も、禮は仁のあらはれたる也といへり。禮記曰、禮は理也。周子曰、理曰禮、理はすぢめなり。すぢめとは、萬事を行ふに、各正しき則ありて、其則にちがはざるは、卽理なり。理にしたがへば、萬事正しくしてをさまる。理にしたがはざれば、萬事邪にして、みだれて行はれず。朱子曰、禮は天理の節文、人事の儀則なり。天理は自然に定りて、かくの如くなるべき道理なり。節文は、過不及なきよき程なるを云ふ。節は過ぎざるなり。文は不及なきなり。うやまひ過すは節にあらず。うやまひ足らざるは文にあらず。かざり過ぐるは節にあらず。賤しくしてふつゝかなるは文にあらず。是皆理にたがひて禮にあらず。萬事の節文、皆かくの如し。人事の儀則とは、

ふつゝかなる―無骨に

賤しげなるをいふ

人の行ふわざの、行儀にあらはれたる作法なり。視聽言動の四の身のわざも、萬事の制行も、よきほどなる自然の法あり。是人事の儀則なり。中庸には、親二親之一殺、尊二賢之一等、禮所二生也一といへり。云ふ意は、親類をしたしむは仁なり。其内に、父子、兄弟、諸父、從兄弟などの品あり。其親疎尊卑の次第同じからざる、是親二之一之殺也。賢を尊ぶは義なり。人に大賢あり、小賢あり、才能ある人あり、舊識恩德ある人あり。其内に、大小高下の品あり。是尊二賢之一等也。親類の品に應じてしたしみ、大賢小賢の品によりて敬ふは、是卽禮の生ずる所なり。しかれば禮は仁義を行ふに、各其品にしたがひて、程よきをいへり。

一威儀をつゝしみ、衣冠を正しくし、視ること、聽くこと、言ふこと、動くことの四事につきて、各過不及なく、よき程の法あり。又親につかへ、君につかふるに、各さだまれる法あり。兄弟、夫婦に對し、賓客にまじはり、臣下に對し、民をつかひ、先祖鬼神をまつるも法あり。是禮は、皆天理のよき程なる節文にして、人事の定まれる作法なり。仁義皆理なりといへども、とりわき禮を理といへるに子細あり。理とは行ふべきすぢめなり。萬事を行ふに、皆定まりたる作法あり。是人の行ふべきすぢめ

三千三百―中庸に、禮儀三千、威儀三百、其人を待ちて行はると有るにもとづく

なり。是卽禮なり。こゝを以て聖人の說き給へる禮の字は、理の字にあたれり。されども理といはずして禮といへるに、子細あり。理といへば形と事にあらはれたる迹なくして、虛なり。故に、取守しがたし。禮は理の品節文章とて、人のわざに品々あり、よき程ありて、其理あらはれ見え、形をなして實なり　故に取守るべし。是を以ての故に、禮といひて、理といひ給はず。釋名曰、禮は體也、言得事之體也。此意は、體とはかたち也。禮は心に本づけども、あらはるゝ所は、事の上に見えたる形を云ふ。人の行儀作法の正しく、三千三百のわざにあらはれて、法の正しきが禮なり。是皆かたちありて、目に見ゆる所なれば、體なりと云ふ。事にあらはれずして、形なくんば禮にあらず。しかれども又形の上にかゝはりて、心上に誠敬なくば、文のみにて本なし、禮にあらず。唯敬を本として、外に行ふに文あるは禮なり。

一人に血氣あり。身に耳目口體の欲あり。心に、喜怒哀樂の情あり。もし禮を以てこれを節せざれば、人欲にしたがひ、天理をうしなひて、人事亂れ、人道すたる。こを以て、聖人禮を以て教とし、彼の血氣よりおこる情欲をふせぎたまふ。

一曲禮曰、毋不敬。凡人事の視聽言動より出づる處、萬事敬しまざる事なかるべし。

諍語―諍の字、原本にセムルと傍註せり

東家の云々―東家は隣家の意也

敬とは、心に道に違はん事をおそれて、恣ならざるを云ふ。是心をたもち、身ををさめ、事を行ふ則なり。是禮の本なり。古より、聖人賢人の心法は、敬を以て要として給ふ。凡身の行儀作法なく、道を失ひ、禍おこるも、皆敬まざるによれり。古語にも、敬めば禍にかつといへり。つゝしめば禍なし。白樂天が言に、福與禍在乎慎與不慎といへり。

一凡禮あるを以て人とす。若禮なければ、人の法すたり、鳥獸に同じくなりて、人道たゝず。禮なきの至をいはゞ、父にあうて怒り詈り、母に帚をとらせて、立ちて諍語し、君の過惡をそしりあらはし、兄と財をあらそひ奪ひ、東家のかきを越えて、處女をひくの類、皆是禽獸の行なり。人倫の法にあらず。

一禮の初は、聖人の、心になき事を作り出して、をしへ給ふにあらず。生れつきたる人情に本づきて、過不及なきよき程なる理ををしへ給ふなり。人の身に、飢渴内に生じ、寒暑外にふるゝ故、飲食衣服せざる事あたはず。飲食をよき程にし、衣服を正しくするは禮なり。うゑかつえするとて、みだりに多く飲みくひ、人に讓なく、爭ひ食ふは、禽獸の行なり。わが身に應ぜざる衣服を著るは、上ををかし、下にせまり、或

はみだりなる服食を用ふれば、身に相應せず。又男女の色も、心に任せぬれば、淫亂にいたるゆゑに、夫婦の別、男女の間を正しくす、君臣、父子、凡人倫の交も、其理にかなひて、よき程に愛しうやまふ法あり。これ皆禮なり。禮なければ、君臣、上下尊卑、貴賤、長幼、男女のわかちなく、師弟子、朋友、賓客のまじはり薄し。葬祭の禮なければ、死を送り神に仕ふるの道なし。故に禮は、聖人、人情に本づきて、教を立て給ふ。人の身、禮あれば安く、禮なければ危し。人の身に、さしあたり用ふべき事、是より急なるは無し。故に古語に、禮は人之急なりといへる、誠なるかな。人たる者、禮を行はずんばあるべからず。

一禮儀三百、威儀三千とて、およそ人の行ふべき大禮三百條、小禮三千條あり。是は其大槩をあげていへり。必三百三千に限るべからず。皆是つゝしみ敬ふ心より出で、天理の程よき所にして、人事のしかるべき作法なり。つゝしみ敬ふ心は、禮の本なり。三百三千の品は、禮の文なり。文とは外のあやなり。本なければ禮たゝず。文なければ禮行はれず。故に禮は本をおもんず。文も亦そなはらずんばあるべからず。

一君子は、耳に非禮の音樂淫聲をきかず。目に非禮なる見物を見ず。口に非禮の事をいはず。身に非禮のうごきをなさず。飲食を愼み、節にして過さず。皆是禮の制する所なり。

禮儀三百、威儀三千―前註、四九四頁參照

耳に云々―所謂四勿なり、前註、四五七頁參照

一口の過なきより、身の過なきは難く、身の過なきより、心の過なき事は難し。三のもの、ともに禮を以て正さずんばあるべからず。

一威儀を正しくすとは、身の形儀をつゝしむなり。是禮のおもんずる處なり。外の形儀みだりなれば、內心も共に不敬になる。敬は心にあるのみならず、內外ともに正しくすべし。坐する時、立時、行時、臥時、皆禮ありて怠るべからず。耳をかたぶけて、人の密事をきく事なかれ。ながしめに人を見る事なかれ。甚勞するにあらずんば、我が家にありても、怠りてみだりに臥す事なかれ。立にかたし立すべからず。坐して兩足をのぶべからず。かたぬぐ事なかれ。人の密事をうかゞはず。たはぶれの顏色をすべからず。

坐する時云云―以下の諸條禮記曲禮にもとづく、ながし目に見るは淫視の義、かたし立は跛の義にてかた足立ちの略也

一朝は早くおきて、事をつとむべし。古語に、一日の計は朝にありといへり。朝よりおこたれば、一日のつとめ捗ゆかず。故に朝おくる事の遲速を見て、其人の家の、興るとと衰ふるとを知るべしと、古人もいへり。夜も學問家業をつとむべし。夜氣は靜な

八音―金、石、絲、竹、匏、土、革、木

る故、事功尤はかゆくものなり。つとめて止まず、君子の人にまさるゆゑんなり。おこたりて務めず、衆人の君子に及ばざるゆゑんなり。士のみならず、農工商も同じ。よくつとめて、怠らざるは、必家をおこす。或人うたがふ、君子如レ此に、つとに起き、夜半にいねて、おこたらずんば、おそらくは精力つかれて、養生の道にあらじと云ふ。答へて曰、しからず。禮記曰、君子莊敬なれば日につよく、安肆なれば日におこたる。いふ意は、行正しく、つゝしみありて勤むれば、精力日々につよくなる。是血氣めぐりて、陽氣發生する故、病生ぜず。身を安く、わがまゝにして、つとめざれば、日々に怠りて、弱くなる。是血氣ふさがりて滯り、元氣めぐらずして、養生の道にたがへばなり

一禮記云、禮樂不レ可二斯須去一身。君子の道、禮樂の二を以て、身ををさめ、人を敎ふ。禮は心の恭敬を本として、萬事身の行の上に節文あるを云ふ。樂とは心の和樂を本として、昔聖人の作りたまへる歌舞八音の音樂の文あるを云ふ。音樂は心の和をみちびくそなへなり。後代の淫樂の心をとらかすとは、大に同じからず。禮を以て身をつつしみ修め、樂を以て心をやはらげ樂む。此二の事、しばらくも身を離るべからずと

禮の用は云云―論語學而篇に、有子曰く、禮の用は和を貴しと爲す、先王の道斯を美と爲す、小大之に由る、行はれざる所有り、和を知つて禮を以て之を節せずんば亦行ふ可からざる也

なり。是古の敎の法なり。後代には、禮樂の敎傳らず。されど、心のつゝしみと樂とは、今とても、しばらく忘るべからず。つゝしみ樂の二は、互にならび行はれて、相そむかざるべし。禮勝てば、かた過ぎて、人と我との間和せず。樂勝てば、和か過ぎて、禮儀をうしなひて、惡しき方にながる。禮樂二ながらそなはりて、よき程の中道行はる。故に論語に、禮の用は和を貴しとすと云ふ。又曰、有レ所レ不レ行、禮以節すと云ふ。是禮樂の二を以て、身ををさめ、事を行ふ、よき程の道あるを云ふ。

一聖人禮樂を作りて、人に敎へたまふは、本なき事を作り出したまふにあらず。凡禮は天地の序なり。序とは次第あるを云ふ。陰陽の氣、時節にしたがひて次第あるは、天地の禮なり。樂は天地の和なり。和とは、陰陽の氣、時にしたがひて和同するを云ふ。是天地の樂なり。聖人天地の序と和とに本づきて、禮樂を作り給ふ。故に禮記に曰、天高く地下く、萬物散殊、而禮制行矣。流而不レ息、合同化而樂興焉。是は禮樂の根源をいへり。禮の本源をいはゞ、天高く地ひきくして、各其位あり。日月星辰より、風雨霜雪、草木禽獸等の萬物にいたるまで、各其形色をあらはし、各其分限かはり、各時節の序あり。是天地萬物の上に、自然に、各高下、次第、品節わかれたり。

五行―水、火、木、金、土、書經洪範に出づ

大風大雨云云―論語鄉黨篇に、迅雷風烈に必ず變ずと見え、註に必ず變ずるは天の怒を敬する所以也

少儀―禮記の一篇

即是天地の禮なり。聖人これに法とりて、禮を作り給へり。禮は序を以て主とすればなり。序あれば、上下、貴賤、親疎、長幼の位正しくして亂れず。樂の本源をいはば、天地の間、陰陽五行の氣、古今四時にめぐり行はれて、しばらく止まず。其氣和合して、萬物化生す。是即天地の樂なり。聖人これに法とりて、樂を作り給ふ。樂は和を主とす。和げば、人我一同にしてそむかず。道理にしたがひて萬事行はる。是禮樂の根源なり。凡聖人のをしへは、皆是天地の道を本とし、これを法として示し給ふ。天理の外に、別の教なし。こゝを以て、程子も、儒者は天に本づくといへり。聖人の道は、即天地の道なり。聖人の教は、即天地の教なり。

一君子は天地をおそれうやまふ。故に大風、大雨、迅雷などの時は、容をあらためて、夜はおきて衣服を著て坐す。是天のいかりを敬ふ禮なり。是亦天につかうまつるの道の一端なり。

一少儀曰、虛を執れども盈をとるが如く、虛に入れども人あるが如くにす。いふ意は、内に物なき器をとるにも、盈ちてこぼれやすき器をとるが如く、おそれつゝしむべし。人の居らざる家に入るにも、人あるが如くつゝしむべし。是は敬の心常にあるを

衣服を先にせり―孝經に、子曰く先王の法服に非ざれば敢て服せず先王の法言に非ざれば敢て道はず先王の德行に非ざれば敢て行はず

云ふ。禮の本なり。

一衣服は身の表なり。人にまじはるに、先かたちを見る。次に言を聞き、次に行を見る。故に孝經孟子などに、衣服と言語と德行をつらぬるに、衣服を先にせり。衣服は、かたちをおほふ表の飾なれば、えらぶべし。わが位に應じ、年に應じ、處に應じ、時に應ずべし。紫萌葱紅などの間色は、禁じて著るべからず。又大なる繪がた、大なる縞目にたつ染物おり物などは、ひなびていやし。好むべからず。わが年よりくすみ過ぎたるは、おいらかにして目にたゝず。みやびやかにして、若きも老たるも、身によく相應して似あへり。凡衣服のもやうにても、人の心の邪正は、おしはからるゝものなれば、えらぶべし。

一飲食は、身を養ふものなり。然るに、飲食を恣にして、かへりて、身をそこなふは、禮なければなり。飲食のつゝしみは、禮を以て慾を制するにあり。飲食の禮多し。中について、放飯流歠をいましむべし。放飯とは、ほしいまゝに、飯を多くくらふなり。飯にかぎらず、一切の食を多くくらふは、放にして非禮なり。ことに飯を多くくらふは、見ぐるしく、腸胃をそこなふ。流歠とは、ながるゝが如くに、あつもの、酒

飲食の人は云々―孟子告子上

など、多く飲むを云ふ。此二は、とりわき戒むべし。凡禮のはじめは、飲食にはじまると、禮記にいへり。禮なければ、飲食を放にして、見ぐるしく、禽獸の行に近し。こゝを以て、飲食の節をつゝしむは、禮の始なり。孟子にも、飲食の人は、則人これをいやしむ。其小を養ひて、以て大を失ふが爲なりといへり。

一禮は未發にいましむ。人の情慾の、いまだ起らざる先に、早く戒むれば、邪惡にいたらず。故に禮の教は、目に見えぬ所に、大に益ありて、日々に善にうつり、罪に遠ざかりて、みづから知らず。是禮のたふとぶべき所なり。法は既に惡事いで來て、後に禁ず。其しるし目に見えて、其益少しなり。男女の別ありて、禮法正しければ、淫亂にいたらず。凡淫亂は、必初に禮法なきよりおこる。若き子弟のともがら、早く禮を教へ、內外の別きびしければ、かゝる惡事におもむかず。朋友の交、禮ありて敬へば、諍鬪に至らず。凡鬪諍は、必無禮よりおこる。君は臣をつかふに禮あれば、そむき離るゝにいたらず。禮の、人に益あること、かくの如し。故に禮の教は本なり。法のいましめは末なり。たとへば無病の時、身をつゝしめば、病おこらず。病おこりて、藥をのみ、灸をするは、末なり。邵子の詩に、病後能く藥を服せんより、病

周子―周茂叔をいふ、前註、四一四頁參照

前よくみづから防がんにはしかじと云へるが如し。又人家に、火災出來たる時、力をつくして防がんよりは、兼て火川心きびしければ、火災なきが如し。

一禮記に、子曰、敬ひて禮にあたらざる、これを野と云ふ。敬ふは誠によけれど、禮にかなはざれば、これ野きなり。敬によき程の法あり。過不及ありて、其法にかなはざるは、是禮にあたらざるなり。況やおごりて理にかなはざるは、ことに禮にそむけり。野きより、其害甚し。

一飲食と、男女と、財寶とは、人の大欲の生ずる處なり。故におよそ人の過惡の出來るは、多くは此三よりおこる。心の好むに打任せては危し。道理にそむき、わざはひ生ずる本なり。此三をこのむは人情にして、無くんばあるべからず。されど禮を以て節せざれば、これを用ふる理を失ひて、必大慾生じ、惡にながる。故に禮なければ、人道不立して、禽獸の行に同じ。

一周子、陰陽は理あつて後に和ぐといへり。二氣の流行正しければ、四時の和行はる。人の道も亦同じ。禮正しく、次第みだれざれば、各其理を得て、和順行はる。故曰、禮者天地之序也、樂者天地之和也。禮は先にして、樂は後なり。人倫の交、先禮法正

しく、次第亂れざれば、人と我と和合す。君臣、父子、夫婦、兄弟の間、其禮正しければ、おのづから和順なり。若禮なくして、臣下の疎きが親しきを越え、賤しきが貴きを越え、庶子が嫡子を越え、妾は妻を越えて、次第亂るれば、必うらみそむきて、和合せず。朋友の交も、禮正しければ、和睦して、あらそひ無くうらみ無し。又喧嘩口論などすることも、皆無禮よりおこる。若禮儀正しくば、和順行はれて、鬪何ぞおこらんや。故に人の鬪諍を止むるの道も、禮を正しくするにあり。

一朱子曰、禮は卽理の節文なり。いふ意は、萬の行、道理にかなひて、過不及なく、程よきを云ふ。飲食の一事をいはゞ、うゑかわく時に飲み食ふは理なり。されども、飲み食ふべき理なりとて、みだりに多く飲み食へば、放逸にして、みだりがはしく、又必病を生ず。飲み食ふべき理にあたりて、過不及なく、よき程なるが、理の節文なり。萬の事、是を以て知るべし。

林放云々―論語八佾篇に、林放禮の本を問ふ

一林放と云ひし人、世上の禮を行ふ者、かざり多く、ことわざしげくして、末をもはらゝ務むるを、禮の本意にあらじと思ひて、禮の本を孔子に問ふ。凡萬の事、まづ其本を得れば、其末おのづから出來るものなり。たとへば樹木の根本堅固なれば、千枝萬葉皆これより出づるが如し。本をうしなひて、末のみをつとむれば、其實を失ふ。故に其つとむる事しげくして、其なすわざ小なり。しかるに、時の人のまよへるを悟り、禮の本に志あるを大なる問なりとて、先ほめ給ふ。さて答へてのたまふ意は、萬の禮は、中を得るを貴ぶ。中は過不及なきなり。是禮の當然にて、至極せる道理なり。されども中に行ふ事ならずば、其本をつとむべし。萬の事かざりのみにて、外の儀文華美にしておごらんよりは、唯ねがはくは儉を行ふべし。儉とは其心眞實にして、かざり僞無きを云ふ。是禮の本なり。如此儉にして眞實にかざり無ければ、本たちて、末おのづから生ず。又禮の內にて、取わき父母兄弟などの死せる時、喪に居るは、尤せつなる時にて、つゝしんで心を用ふべき事なり。喪に居るに、其死をいたみ哀むは、喪の禮の本なり。しかるに外の飾さかんにして、作法はそなはれども、心に哀の誠なきは、是本なきなり。かく有らんより、唯いたみ哀あつくして、外の法はおろそかならんこそ優るべけれ。凡禮は、先心の誠實なるを本とすれば、本なくして、末のみ修らんより、しかじ、本立ちて末おろそかなるには。是本末そなはらずして、偏なれども、外のかざりのみ多くして、內心に本とすべき誠なきには、遙かにまされり。

子曰く、大なる哉問ふことや、禮は其奢らんとよりは寧ろ儉せよ、喪は其易からんとよりは寧ろ戚せよと見え、集註に林放は魯人、世の禮を爲す者專ら繁文を事とす、而も其本の是に在らざるを疑ふ、故に以て問ふといへり

本立てば末は是より出づる理なり。末のみ修りて、本なきは、誠なくして、禮の道たたず。喪の禮は、ことさら眞實ならでは行はれざるものなれば、既に禮の本を說きて、又其内より、喪の禮の本をかゝげ出して說き給ふ。

禮器―禮記中の一篇

一禮器云、先王の禮を立つる、本あり、文あり。忠信は禮の本なり。義理は禮の文なり。本無ければ立たず。文なければ行はれず。いふ心は、禮に本あり。忠信を本とす。忠信はまことなり。禮に文あり。義理を文とす。義理とは、外に行ふ處のあらはれたるしわざの、すぢめよきを云ふ。本なければ禮の道立たず。萬の事、皆誠より出づ。誠なければ物なし。されど又外のわざ、理にかなはざれば、文無くして、禮の道行はれず。必本末二ながらそなはりて、禮の道全し。されど先本をつとむるを要とすべし。

五味―辛、酸、鹹、苦、甘
五色―青、黃、赤、白、黑

忠信を本として、禮文行はるゝは、たとへば味甘き物は、五味の和をうけ、色白きものは、五色の采をうくるが如し。忠信ある人は禮を學ぶべし。質よき故に、外の禮文そなはりやすし。

一禮は中を得るをたつとぶ。中とは過不及なきを云ふ。管仲晏子此兩人、皆才力すぐれたりしかども、聖人の道を知らず。管仲は、身上よりおごりて、禮をうしなひ、晏子は儉約に過ぎて禮を失ふ。今の人、儉約なれば、吝嗇にして、なすべき禮法をも行はず。是を下に偪ると云ふ。下にせまるとは、わが身上より下なる人の行をするを云ふ。奢れば法制にそむきて、禮を失ふ。是を上を僭すと云ふ。上を僭すとは、わが身上の分に過ぎて、上なる人のふるまひをするを云ふ。故に禮は過不及なき工夫をなすべし。

下に偪る―禮記雜記に君子は上に僭せず下に偪らず

一禮は謙遜をたつとぶ。謙はへりくだる也。ほこると裏表なり。ほこるは我が才力權位功名にほこるの類なり。謙は自滿せざるを云ふ。我が身に才德權位功業あれどもほこらず。是天下の美德なり。遜はゆづるなり。善事を君父にゆづり、人にゆづりて、自ら居らざるを云ふ。

君子は無所爭―論語八佾篇

一禮記に、禮至れば不レ爭といへり。爭は君子の道にあらず。禮あれば爭なし。如何となれば、禮は讓をたつとぶ。讓は爭のうらなり。夫子も、君子は無レ所レ爭とのたまへり。爭ふとは、人に對して、わが才能、威勢、智力、權位、財利をあらそふの類なり。我に有る力を以てあらそふは、たとへば鳥獸の、牙を以てし、爪を以てし、角を以て爭ふが如し。人倫の法にあらず。是皆小人のわざなり。禮讓の道にあらず。且又禍をとるの道なり。

五常訓卷之五

○智

一知は、増韻に心有所知也といへり。知は心の明なり。和訓にはさとるとよむ。是非をてらす心の光なり。心明かにして、人倫事物の道理に通じ、是非善惡をわきまへ知りて、まよはざる德なり。仁義禮も、智によりて、其理明かにして行はる。智なければ、道理くらくして、善心あれども、行ふすべを知らず。あやまりて、ひが事のみ多し。周子は、通ずるを知と云ふといへり。萬理に通ずるなり。朱子は、智は分別是非の理と云へり。分別とは、わかちわかつ也。心中に善惡をわかち辨ふるを云ふ。是非とは、事にのぞみては、是を是とし、非を非とするを云ふ。智は性なれば、あながちに外に向ひて說くべからずといへども、用につきて說かざれば、智の體も明ならず。孟子は、智之實知斯二者弗去是也と說き給ふ。智の眞切なる所は、孝弟の道を知

智之實云々
孟子離婁下

て、すてずして固く守るを云ふ。道理を知りて、又よく其道理を守りて失はざるなり。知りても守らざれば、眞に知れるにあらず。智は五行においては、水に屬す。水は清く明かにして、かゞみとすべし。智の明なるに似たり。又萬物は、皆水のうるほひ通して生ずる如く、萬事智にあらざれば、道理通ぜずして行はれず。朱子四書の註の中、仁義禮には明解あり。智の字に註なし。故に朱子の後、智の字を說く者多しといへども、其說分明ならず。大學或問曰、知則心之神明、妙衆理而宰萬物者也。心の神明とは、人の心虛靈にして不昧を云ふ。妙衆理とは、もろ〳〵の理を發明して知るを云ふ。宰萬物とは、萬物をつかさどりて、善惡を裁判するを云ふ。是致知の知を說きて、四德の智を說き給へるにはあらずといへども、知の體用をよく說けること分明なり。此外に、智の註を求むべからず。愚ひそかに、朱子の兩說に本づきて、知を說きて曰、智者心之明、事之別也。心の明とは、くらからざるを云ふ。燈火明かにして、物をてらすが如し。是智の體なり。事の別とは、事にのぞみて、是非をわかつを云ふ。是智の用なり。其事にのぞみて、是非をわかつは何ぞや。內に明あるを以てなり。此說、いまだ當否を知らず。しばらくこゝに記して、識者の是正をまつのみ。

五行―水、火、木、金、土

智者云々―論語子罕篇

知及仁守―論語衞靈公篇に、知之に及び仁之を守る能はざれば之を得ると雖ども必ず之を失ふ云々

一智なければ、心に善あれども、行ふべき道を知らずして、みだりに行へば、あやまりて僻事のみ多し。父母に能く事へんと思へど、孝の道を知らざれば、不孝に歸す。君に仕ふるに、心に忠あれども、智なければ、忠を行ふすべを知らで、不忠にいたる。萬の事、皆しかり。すべて智なくしては、道を行ふことあたはず。人の惡をなすは、皆不知より出づ。智あれば、善の好むべく、惡の嫌ふべき事をよく知りて、道自ら行はる。故に學をするには、智を求むるを、第一のつとめとすべし。

一論語に、智者不惑、仁者不憂、勇者不懼。又、知及、仁守るといへり。中庸には、知仁勇を三德とす。皆知を先として說き給ふ。大學には、格物致知を先として、萬の道理をきはめ知りて、わが智を開く事をつとめしむ。君子の學、つとめ行ふを貴ぶといへど、先知らざれば行ふ事あたはず。如何となれば、智なくして心くらく、善惡是非をわきまへざれば、道を行ふべきすべを知らず。たとへば、盲の杖をうしなひて、ひとり道を行くが如し。足健なれど、道を見ざれば、迷ひて行きがたし。智なければ、才力あれども、每事道理を知らず、あやまり多くして、道行はれず。仁義禮も、智にあらざれば、道理明ならずして、行ひがたし。人を愛するは仁なれども、理くらけれ

ば、姑息するを仁とし、科あるをゆるすの類、是智なければ、仁行はれず。宜しくするは義なり。智なければ、其宜しき程を知らず。うやまふは禮なり。智なければ、其よき程を知らで、うやまひ過し、或はうやまひ足らざるは、非禮なり。かやうの類、皆是智なければ、仁義禮共に行はれざるなり。

四德五常―四德は仁義禮智也、是に信を加へて五常といふ

一智の字、又知の字となして通用す。故に四書には、多くは知の字を用ふ。唯四德五常には、智の字を用ふべし。

一人の身に、一の大寶あり。これを名づけて智と云ふ。心の光明なるは、萬の善惡是非邪正をわきまへ知るのかゞみなり。若人の身に智なければ、天地に日月なく、人に耳目なく、暗夜に燈なきが如く、又家に主なく、軍に大將なきが如し。いかに生れつきたる力量あり、忠信あれども、心くらく智なければ、行ふべき道を知らずして、みだりに行へば、道にかなはず、ひが事多し。萬につきて、善き惡しきを辨へざれば、我が身ひとつをだに修むる事あたはず。況や民をなつけ、土地を治めん事は、いと難き事なるべし。故に人身の大寶は知なり。其大寶をもとむるの道あり。よき師友を求めて、其教をうけて、よきすぢの學問し、書を讀み、ひろく見、多く聞き、よく思慮し

て、我が心に道理をもとめ、是を以て、心をひらき、智を明かにすべし。師友に求むるの道は、我が身をへりくだりて、自ら是とせず。好んで人に問ひて、ひろく聞くべし。我が智に自滿して、ほこる事なかれ。我にほこれば、必我が智を失ふ。凡聞見をひろくすると、我が心に思案すると、是智をもとむるの道なり。

博く學び云云―中庸に博く之を學び、審に之を問ひ、愼んで之を思ひ、明に之を辨へ、篤く之を行ふ云々、前に詳說あり、八二頁本文參照

一中庸の、博く學び、審に問ひ、愼んで思ひ、明かに辨ふるは、皆是知をもとむる道なり。かくの如く、知を明かにして後、篤く行ふ。古人も、此學もし眞に知れば、行ふ事も其中にありといへり。よく此道を知れば、必よく行ふ。行はざるは知らざる故なり。

附子、砒霜には毒ありと知りては、食はず。水火をば、人を害する事をよく知れる故に、おそれて、水におぼれ、火にやけず。病を治する事を知れば、良藥の苦きをも服し、熱きをこらへて、もぐさにて身を燒く。是よく知れる故なり。又博學多識なれど、道理を窮むる學問をせざれば、道を知らざる人、古來多し。經書の文句を說きわけたるまでにて、聖賢の教の道理を知らざるをば、訓詁の學と名づく。又故事出處を覺え、ひろく古今の事に通じて、道を知らざるをば、記誦の學と云ふ。詩文章を巧につくりて、道理にうときをば、詞章の學と云ふ。此三は、共に儒者の學にあらず。古人

附子、砒霜

附子は烏頭（ウヅと讀む、トリカブトの根塊）の周圍に附く子、砒霜は砒石の俗稱也、砒素と硫黄と鐵とより成り土塊狀をなす

雍也―論語の篇名

いやしめり。儒者の學は、理をきはめ、知を致して、道を知るを以て務とするを云ふ。書を讀んで道を知らざるは、儒者の學にはあらず。

一智に大小あり。是亦知らずんばあるべからず。たとひ微細なる末の事には疎けれども、身を修め、人を治むる道に明なる人あり。是を小事にくらくして、大體に明なりと云ふ。君子の大智なり。貴ぶべし。又小事にかしこく、技藝にさとけれども、學問道理くらくして、身を修め、人を治むるに疎き人あり。是小人の小智なり。萬事に賢きやうに見えて、眞智なきなり。是を小事に明かにして、大體にくらしと云ふ。微細なる用にはかなへども、貴ぶに足らず。

一樊遲問レ知、子曰、務二民之義一、敬二鬼神一而遠レ之、可レ謂レ知矣（雍也）。是知者のまよはざる事を以てこたへ給ふ。知者は心明かに、事理の是非を知る故に、凡孝弟忠信などの、人道の行ふべき事を專つとめて、目に見えぬ鬼神の事にまよはず、祭るまじき淫祀をまつり詔ふは云ふに足らず、祭るべき正神なりとも、唯敬ひたふとぶべし。近づきけがして、詔ひもとむべからず。近なるゝは、神をけがして敬はざるなり。たとへば主君貴人などに、此方より馴々しく親み近づきて、祿をこひ、財を賜はらんことを

神は非禮をうけず―鬼神論、本朝俚諺等に見ゆ、古諺也

のむぞが如し。無禮と云つべし。神は非禮をうけず。無禮にして近づきいのるとも、利生あるべからず。神もし靈あらば、かへりて咎あるべし。又祈るべき道理なくして、我が利欲を以て、へつらひ求めて、福をいのるとも、神は正直公明にて、私なければ、かゝるひがゝしき祈をうけ、賽錢奉財などにめでて、私を行ひ、利生あるべからず。此理甚明かにして、さとりやすし。然れども、愚者は此理を知らずして、神にちかづき、けがし詔ひて、さいはひを祈るは、迷の甚しきなり。人道の行ふべき事をつとめ、神をうやまひて、近づき詔はざるは、是知者のまどはざるなり。故に知といふべしとのたまへり。神にいのるは、誠に正理なり。君父などのために、いのるべき理ありて、誠と敬をつくして、天にいのり、正神にいのるは、其さいはひあり。又わが過をあらため、罪を悔いて、神のとがめを詫事するも、是亦いのる理あり。かやうの、いのるべき理なくして、如何にいのるとも、さいはひを得がたし。其ためし、古今甚多し。其理を知るべし。

一韓非子曰、知如レ目也、能見二百步之外一、而不レ能二自見一其睫一。故に知の難きは、人を見るにあらず、自ら見るにあり。又古人の語に、知レ人謂二之知一、自知謂二之明一といへり。

知る人は誠にかたし。唯知ある人、よく人を知る故に、これを知と云ふ。自ら我が身の善惡を知るは、人を知るより難し。如何となれば、我が身には私ありて、自ら是とし易し。其心あきらかに、我が身に私せずして、公なる心なくては、我が身は知りがたし。こゝを以て自知を明と云ふ。是知る人よりは、自ら知るは猶明なり。こゝを以て明と云ふ。夫わが子を見るには私ある故に、人、子の惡しきを知らず。他人の子を見ること明なるは、私なければなり。人を知ることは、我を知るよりやすきは、私せざればなり。我を見ることは、人を見るよりくらきは、私あればなり。智を明かにせんとならば、學んで理をきはめ、又私を去りて、本心をくらますべからず。愚人はくらくして、我が身を知らず、我に才德なきをも知らで、我が身にほこる。又我に大なる過惡あれども知らず。此故に、人の諫をふせぎて用ひず、却て怒り恨む。それ人聖人にあらず。誰か過なからん。然るに我が身に過なしと思へるは、智なきなり。又過を知れども、おほひかくして改めず。是を、過を恥ぢて非をなすと云ふ。皆是愚者のしわざなり。智ある人は、我が身を知れること明なる故に、我が身の過を知り、又人の諫をよろこびて聽用ひ、諫むる人を貴び、我が過をあらたむるに憚らず。故に過なきにいたる。日月の蝕すれども、やがてもとの如くになれば、光明少しも缺けざるが如し。凡人の諫を好んでき〻用ひ、我が過を改むるは、善これより大なるはなし。天下の美德なり。知と云ふべし。古より、たかき賤しき、諫を好んで用ふる人は、國家をおこし、身をおこす。諫をふせぐは、惡これより大なるは無し。天下の惡德なり。愚と云ふべし。古より、諫をふせぐものは、貴も賤も、多くはほろぶ。古來其證據明なり。夫明鏡といへども、其うらを照らさず。君子といへども、自ら見るに昧し。故に賢人君子は、つとめて人の諫をもとむ。堯に諫の鼓あり。いさめんとする人は、此鼓をうつ。舜に誹謗の木あり。木をけづりて、路頭に立て置きて、其身の行と、政の惡しきことを誹らしむ。湯王には、司過の士ありて、湯王に過あれば、必諫むる事をつかさどる。武王には、戒愼之鞀ありて、武王を戒め諫めんとする者は、其鞀を動して鳴す。漢より以後、君を諫むる官あり。歷代の聖人すら、其身の過を知らん事をおそれて、人に求め給ふこと、かくの如し。いはんや末世の凡夫をや。

一生れつきて知るは良知なり。二三歳の小兒も、親を愛する事を知らざるはなく、年すこし長じては、兄を敬ふことを知らざるはなし。是まなばずして、人々生れつきて、

人聖人にあらず云々―左傳に出づ、前出

日月の云々―論語子張篇に、子貢曰く、君子の過や日月の食の如し、過つや人皆之を見、更むるや人皆之を仰ぐ

諫の鼓、誹謗の木―前註、一八六頁參照

戒愼之鞀―淮南子主術訓に、武王戒愼の鞀を立つと見

ゆ、鞀は鼓と同じくして小さく柄を持ちて搖れば旁耳還りて自ら擊つと玉篇にいへり。

良知―孟子に出づ、前註七八頁參照

よく知る故、良知と云ふ。是仁義禮智の智と同じ。天性なり。學んで知るも、亦是良知あるが故なり。むまれつきたる知無くんば、何ぞ學んでも知ることを得んや。學問の道は、智をひらく工夫なり。學問の要二あり。いまだ知らざる所を知る、一なり。すでに知る所をかたく守りて行ふ、一なり。知るにあらざれば行ひがたく、行ふにあらざれは、實なくして、知らざるに同じく、無用の事となる。

一不知の人は、義理を辨へざるのみにあらず、又利害損得をも知らずして、我が身の禍となる事をかへりみず、利をむさぼり、僻事をなして、家を利し、身を立てんとして、却て身を亡し、家を破るにいたる。かなしむべし。是我が身の惡を止めずして、天のせめを待つといふべし。我が身を利せんとて、惡しき事を行ひ、人を苦めて、我が身一人をたのしむ。是皆我が身の害となる事を知らず。愚なるのいたりなり。智者は心明かにして、人の憂苦みをよく知る。愚者は、心昧くして、我が身の外、人の憂苦みを知らず。いたりて愚なれば、我が身の外、父母兄弟の憂くるしみをだに知らで、不孝不弟を行ふ。

淮南子―前註、九〇頁參照

一淮南子に、四方上下を宇と云ふ。（是天地の間のことなり）往古來今を宙と云ふ。（是上古より今までのことなり、古今のことを云）道と事と、其間にありて、きはまり無しといへり。今案ずるに、道と事とは、天地人の道と事なり。人となる者は、凡天地の内、古今の間の事を知らずんばあるべからず。故にひろく天下古今の事に通ずべし。是智の功用にして、智者の工夫なり。

春は生じ云云―前註、一五五頁參照

一仁の、物をあはれみ、義の、惡をはぢ惡み、禮の、つゝしみ敬ふは、皆なせるわざあり。唯智のみ、心の明なるのみにて、しづかにして、何のしわざもなし。されども仁義禮も、智の明なるを以て、是非を知りわかつにあらざれは、其道行はれず。仁義禮これによりて行はれ、是によりて成就す。故に智は、四德の始をなし、終をなす。四德の末にあるは、終を成すなり。仁義禮を行ひ出すは、初を生すなり。たとへば一年の内、春は生じ、夏は長じ、秋はをさむ。此三時は、皆氣動きてなす事あり。唯冬は、四時の末にありて、しづかにして、何のしわざもなし。陽氣のかくれひそまれるのみ。されど一年の功、こゝにいたりて成就す。是冬は、一年の功の終を成すなり。又天地の元氣、冬の間しづまり息まざれば、來春大に發生して、功用をなしがたし。冬の内、天地の氣をさまりて、内にふくみ集るを以て、來春の陽氣、是より出づる故、

美味あれども云々―禮記學記に、嘉肴有りと雖も食はざれば其旨きを知らず、至道有りと雖も學ばざれば其善きを知らず

發生の本とす。是一年の功の初を生すなり。故に冬は一年のをはりを成して、又一年のはじめを生す。人の身も、あしたよりゆふべに至りて、動働けども、夜にいたりて寢いりしづまる。是一日のをはりを成すなり。又夜中ねぶらざれば、明日力なし。夜中に、よく寢いり息めば、明日の働に力あり。是明日の初を生ずるなり。智の四德の初を生じ、終を成すも、亦かくの如し。禮はさかんにあらはる。智はかくれて見えず。禮と智とは、うらおもてなり。夏は萬物さかんに、陽氣あらはる。冬は萬物ひそまりて、陽氣かくる。冬と夏とは、うらおもてなるが如し。

一學は自得を貴ぶ。自得とは、わが心に、ひとり道を知り、其味を得たるなり。わが物になるを云ふ。我が心に得ずしては、道を知れりと云ひがたし。古來、文學ひろく、經義に通じて、道理を口に說くといへど、心に道を知らざる人多し。是自得せざるなり。眞知にあらず。たとへばすぐれたる美味あれども、わが口に食はざれば、其味のうまき事を知らず。學んで道を知らざるも、亦かくの如し。たゞ眞つみ、つとめ久しくして、後自得すべし。つとめなくして、にはかに自得せんとせば、是を頓悟と云ふ。わが儒の道の自得にあらず。

巧言亂德―論語衞靈公篇

一知ある人は、いかに言をたくみにし、利口を以て、是非善惡をみだし、或は邪說をすゝむれども、其心明なる故、其言の是非をよく分別して、信せず。知なき人は、是非をわきまへずして、人の言の巧なるにまよひやすし。

一古語に、毀譽亂於善惡といへり。人のほめそしりは、よく善惡を言ひみだす。凡人は、人を知らずして、妄にほめそしり、或は我がひいきなる者は、惡人をも善人と云ひ、我が心に合はざる者をば、善人をも惡人と云ふ。愚なる人は、かゝる讒言にまよひ、其言を信じて、善惡を聞きあやまり、人のほめそしりを明かに察せざれば、讒人のためにたぶらかされて、其はかりごとに落つることあり。あさましき事なり。古來英武の人といへども、知者にあらざれば、此あやまり多し。おそるべきことなり。孔子曰、巧言亂德ことばたくみなれば、必迷ひやすくして、德をみだる。よく心を用ひて、聞誤ることなかれ。

一衆人は、目前に、すでに見え來れることにさへくらし。況や後來のことを知らんや。かねて事に先だちて、よく後來の事の、理非と成行を知るを先見の明と云ふ。是知者の知る所、たふとぶべし。

古語曰云々―韓非子に出づ

浸潤之譖云云―論語顔淵篇に出づ子張の明を問へるに對し孔子の答へたる言也

一言を聞きて信ぜざるは、聞く事あきらかならざればなりと、易にいへり。人の善言と、諫をきゝながら、其言を信ぜず、唯あだなる事のやうに思ふは、其心くらければなり。明なれば、よく其言の道理あることを知りて信ず。故に人の善言を聞きて信ぜざるは、不明なる故なり。古語曰、惟善人よく盡言を受く、其聞きて能改之をいふなりと。又、才辯ありて、言たくみなる者のことばをば、理もなきことをも、たふとび信ず。其言たくみならず、其かたちいやしければ、其言に至理あれども、信ぜず。是きく人の不明なるなり。

一論語に、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣。人を讒する者は、にはかにせず、漸くにすること、たとへば水の物をうるほすに、急にうるほさず、つけ置きて、自然に漸くうるほすが如し。かやうにすれば、必心にそみて、まよひやすし。こゝを以て、にはかに人をそしらず、やうやく讒すれば、人信じやすし。又にはかに人をおびやかして、卽時にわざはひ出來るやうにおどせば、人亦おどろきて、信じやすし。此二者は、讒人のたくみなる所なり。故に人まよひやすし。かやうの讒を聞きて信ぜざるは、心の明なり。心の明は、卽智なり。古來かやうの讒を信じて、賢人を

學而不思則罔―論語爲政篇

失ひしためしも多し。かなしむべく、おそるべし。孔子曰、佞人は殆しと。豈まことならずや。

一熟思審處は、智者のする事にして、後悔なき道なり。かねて其事あるべきと知りたる事は、先其事を行ふべきやうを思ひはかりて、きはめ置くべし。事にのぞみて、とやせんかくやせんと計るは、おそくして、事に及ばず。すべて思慮は、かねてより定むべし。又かねて計らざる不慮に出來たる事も、亦多し。此時にのぞみても、つくづくと思ひ、審にはかるべし。或は智ある人、其事を知れる人に問ふべし。あわてゝ、わが心ひとつにて、にはかに其事を決定すれば、必過多し。後悔すとも益なし。いそがはしく決定すれば、必あやまる。古人の言に、凡事唯怕待、待者詳處之謂也と云へるが如し。待とは、急に決定せずして、つまびらかに思案して行ふなり。

一子曰、學而不思則罔。まなぶとは書をよみ、人に問ふなり。學びたるのみにて、我が心に、其道理を求めて、思案せざれば、道理を自ら得がたし。故にくらし。思の工夫は、學ぶに相對して、おもき事なり。人の、博學にして道を知らざるは、思の工夫なければなり。思は、致知の工夫において、尤益あり。思ふに非ざれば、自得する事

なりがたし。

一孔子の舜の大智なることを稱し給へり。舜は大智なりし故に、わが智を用ひ給はず、天下の人の智をあつめて、我が智とし給ふ。是大智なり。此故に、人に問ふことを好み給ひて、淺く近き言を聞きても、其言の善惡を察して、惡しきをば匿して、人にかたり給はず、善をばあげ用ひて、其人の言なる由あらはし給ふ。かくありし故に、人善を舜に告げ申すことを好めり。さありて、人のいふ言の中にてえらびて、其中の過不及なき、道理の至極せるを取りて用ひ給ふ。是舜の大智なる所なり。古人は、詢于芻蕘ととて、わが智を自滿せずして、草かり木こりなどの、いやしく愚なる者にも、知るべき事は問ひて、其言を用ふ。是諸人の知をあつめて、廣くとりて、我が知とするなり。聖賢は言ふに及ばず、いにしへの英雄、漢の高祖、唐の太宗などの如くなる英明の君は、人の諫を好んで、これにしたがひ、殊更、張良、陳平、王珪、魏徵などが如き、智力のすぐれたる者を用ひて、其言を取川ひ給へる故、天下を草創し、太平を開きて、大なる功業をなし給へり。昏弱の君は、人の諫をきかず、或は諫臣を殺せるも多し。かゝる人は、必國家を失へり。

詢于芻蕘―芻蕘は草刈、木樵也、博く下問をなし微賤の者とても指かざる義、詩經の大雅に、先民言有り芻蕘に詢ふと見ゆ、朱註に芻の字音初と云へり

一天命を知るとは、人の吉凶禍福死生は、皆定まれる天命あり。生れつきたる分限あり。分外のさいはひを、人にへつらひ求めても、神にへつらひ祈りても、必得べからざる事を知るを云ふ。然るに、小人は天命を知らず。わざはひあれば、手立を以てのがれんとし、利をねがひては、人にへつらひて、富貴福祿を得んとす。こゝを以て、義理をすて、利欲にしたがひて恥ぢず。又いのるまじき理を知らで、神にへつらひて、福を求め、禍をのがれんとす。君子は義理をたつとんで、天命を知る故に、義にそむける事は、大なる利を得るといへど行はず。害ありといへども避けず。天命の求むべからざるを知りて、義に害なしといへども求めず。しかるに、若みだりに利を求め、害をのがれんとして、其益なきことをせば、天命を知らずして、愚なりと云ふべし。何ぞ君子とすべけんや。

魏徵―字は玄成、唐の太宗の時諫議大夫に拜して重用せられ後鄭國

一魏徵曰、兼聽則明、偏信則暗。いふ意は、ひろく人に問ひて、諸人の言をきけば、一偏の言にまよはずして、聞損ずることなく、其きく事、いつはりまぎれ無くして、明なり。唯一人の言を信ずれば、其人のいふ所、多くは一偏の私ありて、我が心をまよはす。管子曰、天下の目を以て見れば、見ざる事なし。天下の耳を以てき

公に封ぜらる

樊遲問知―論語顔淵篇

けば、聞かざることなし。天下の心を以て慮れば、知らざる事なしと。是わが智慧を用ひずして、ひろく諸人の智を用ふるなり。知者の、我が知を用ひずして、人の智を用ふる事、かくの如し。これまづ我が心の智慧正しくして、胸中に善悪をはかる權度ありて、ひろく見、ひろく聞きて、人のいふ所の善悪是非をえらびて用ふるなり。

一智の要は、知人にあり。尚書に、知人則哲、能官人といへり。哲とは心の明なるを云ふ。人を知るは、其心明なるなり。能官人とは、人を知れば、臣下の才徳をはかりて、その長じたる所を取て、各其才の宜しき官をさづくるゆゑに、過なくして、其職よくをさまる。樊遲問知、子曰、知人。是人を知るは、心の明なる所、卽知なり。明は知の體なり。知人は知の用なり。用をいへば、體其内にあり。故に人を知るを以て、知を說き給ふ。愚者は人を不知して、交る所、用ふる所、其人にあらず、たゞ人の毀譽にしたがひ、わが喜怒にまかせ、あひ口、ふあひ口により、又親しき疎きによりて、人を進退すれば、人を用ふる道理にあたらず。人を知らざれば、善悪邪正君子小人、皆所を失ふ。人を知ると知らざるとは、わが身の禍福安危と、國家の治亂存亡にかゝれり。心を用ひて、能く人を知るべし。人を知らずして、悪しき人を用ふ

あひ口ふあひ口―我が氣分好悪に合ふと合はざるとの意

口のきゝたる―口先の巧なるをいふ

れば、身の禍となり、家のやぶれとなる。畏れざるべけんや。知は人を知るより難きはなしと、古人いへり。人の心ほど、知りがたきものなし。よく其心を察して知るべし。口のきゝたると、容のよきとを以て、人をとるべからず。其心の賢否と、其行の善悪とを以て、人を進退すべし。又一言一行を以て、輕く人の賢否をさだむべからず。小人に欺かれて、其人を信じて、すゝめ用ひ、君子を見知らずして、うたがひ退くるは、まよへるなり。愚なりと云ふべし。よく辨へざれば、必あやまりて、善悪所をかふるものなり。

一人を知るの道は、明と公とにあり。學んで道理を知るは明なり。心明ならざれば、人の是非を辨へがたし。又心に愛憎喜怒の私なきは公なり。心公に私なくして、人の善悪是非を分つこと正し。愛憎喜怒の私あれば、まよひて人を知ること正しからず。善人を悪人とし、悪人を善人とす。又心かるくして、一旦の善悪を以て、にはかに人を是非すべからず。歳月をまつべし。言語の才ありて、利口なるを以て、人をとるべからず。必心と口とちがふ者多し。心公ならず、私心を以て、人を用ひすつれば、我が氣に入り、あひ口なる者をば、悪人をもよき人と思ひて用ひ、善人をも氣

にあはざれば用ひず。かくの如くなれば、人を知る事かたくして、人を用ふる事、理にあたらず。官職其人にあらずして、民治まらず。

一論語曰、不知言無以知人。是人を知るの法なり。人の邪正は、言にあらはる。言は心の聲なりと、古人もいへり。言の、理にかなふと叶はざるとによりて、其人の邪正を知るべし。もし言の是非を辨へずば、人の邪正は知りがたし。然れば人を知らんとならば、言を聞きて、其言の理にあたると、當らざるとを察むべし。

一人の心ふかくかくれて、外より見えがたければ、其内心を知りがたし。外にあらはる言語容貌を以て、其心を信ずべからず。言語よく、容貌うるはしく、君子に似たりといへども、内心は奸曲なる者あり。言ふつゝかに、容いやしけれども、内に忠信才智ある者あり。外くらくして、内明なる人あり。外明にして、内くらき人あり。火は外明かにして内くらし。水は外くらくして、内明なり。人の性も、亦かくの如くなるあり。言と貌を以て、人をとるべからずと、古人もいへり。

一子曰、不レ患レ人之不二己知一、患レ不レ知レ人也。君子の道は外に求めず、唯わが身に求む。故に人の我が善を知らざるは、人の不明なり。我が患にあらず。わが善を行ふは、も

不知言云々—論語堯曰篇

子曰云々—論語中數個所に出づ、前註、二六五頁參照

と我がなすべき所なり。人に知らせん爲にあらず。たとへば飯をくらつて、我が腹にみちて、飢を助くれば、人の知らんことを求めざるが如し。人を知らざれば、人の善惡邪正をわきまへず。是わが不明なり。故に患ふべし。もし人を知らざれば、其人にあらざるを友として、身をうしなひ、邪人を用ひて、家をやぶり、人をそこなふ。或は善人をすてゝ用ひず。凡小人は、わが身を人の知らざるを患ひて、我が人を知らざるを患へず。すべてさかさまに工夫をなせり。

一孟子の眸子を見るも知人の術なり。眸子とは、人の目のひとみなり。ひとみは人の惡をおほひがたし。人の胸中正しければ眸子明なり。胸中正しからざれば、眸子くらし。人の言の邪正を聞き、又、人の眸子を見れば、其人の心中の邪正かくれなし。言は猶も僞を以てよくすべし。眸子はかくす事かたければ、是人を知るの術なり。人の知愚、邪正、貪廉、才不才、壽夭、貴賤も、皆眼目にあらはる。眼は是五藏精萃のあつまる所、心性の先あらはるゝ所なればなり。

一人を知れば、はじめて一たび會面しても、其人の賢を知りて、交深くなる。或は數千里をへだてゝも、其情を通はす。數千年の久しきといへど、其人を思ひしたふ。

其人にあらざる—適當にして然るべき人物にあらざるの意

眸子を見る—前註二六一頁參照

人を知らざれば、朝夕膝をならべて、白頭にいたるまで、久しく交りても知らず。人を知ると、知らざると、其大にかはれる事、かくの如し。故に士は知己の者のために死すといへる事、豈然らずや。

士は知己の者のために死す―史記刺客傳中の豫讓の語に曰く、士は己を知る者の爲に死し、女は己を説ぶ（悅ぶ）者の爲に容づくる

一人各長ずる所あり、短なる所あり。長ずる所とは、得たる所なり。短なる所とは、得ざる所なり。知者といへども、其得ざる所は、愚者の得たる所には及ばず。もし得ざる所を以て知者をそしらば、堯舜も今日の凡夫におとるべし。人を知らずと云ふべし。君子の人を用ふるは、良醫の藥を用ふるが如し。各其性をよく知りて用ふること、其病に應ず。又大匠の材を用ふるが如し。ゆがめるを渠とし、直なるを柱として、材すたらず。人を用ふるに、各得たる所を知りて用ふれば、天下に棄れる人なし。皆用をなせり。

○信

一信は説文曰、誠也。从人从言。會意。徐曰、於文人言爲信、言而不信非爲人也。信の字、人偏に言の字を書くは、六書においては、會意に屬す。偏旁の意を以て作りし字

六書―周禮に、六書は一に曰く象形、二に曰く指事、三に曰く會意、四に曰く假借、五に曰く諧聲、六に曰く轉注といへり、文字を造る本也

なり。いふ意は、人の言に誠あらざるは、人にあらず。故に人の言は、必信あるべしと云ふ意なり。五常においては、心にまことあるを云ふ。口に僞をいはざるも、其内にあり。仁義禮智の、いつはりなき眞實なるを、信と云ふ。信なければ、仁義禮智にあらず。仁義禮智四德の外に、又信あるにあらず。親によくつかふるは孝なれど、名聞のためにつとめ、又親の寵愛をねがひて務むるは、孝にあらず。君によく仕ふるは忠なれど、君の寵をねがひ、官祿をむさぼりて、奉公をつとむるは、忠にあらず。是皆まことの道にあらず。忠孝にかぎらず、萬事皆かくの如し。中庸に、不誠無物といへり。物なしとは、僞りて實なきなり。親につかへ、君につかふるに、誠なくして、右にいへる如くなれば、忠孝にあらず。是物なきなり。萬の事、皆誠なければ物なし。凡名と利とを求めてする事は、たとひ天下に聞ゆるほどの善なりとも、其心眞實ならざれば私とす。善にあらず。是物なきなり。四德に誠なければ、仁義禮智にあらず、いつはりなり。是物なきなり。人の、天より生れつきたる性は、唯仁義禮智の四德なり。此四德にて、人道行はる。此故に、孟子は、たゞ仁義禮智を説きて、信を説き給はず。程子曰、四端不言信者既有誠心爲四端則信在其中矣。これを以て、仁

元亨利貞―易に出づ、前註四一六頁參照

義禮智の外に、信なきことを知るべし。信は、天道にていはゞ誠なり。眞實無妄を誠と云ふ。天道に春夏秋冬の四時あり。其内に土用あり。四時に元亨利貞の四德あり。四德の實にして、萬世までたがはざるは誠なり。人に仁義禮智ありて、其内に信あるも、亦かくの如し。元亨利貞、四時のめぐりの序ちがはざるは、卽誠なり。天道の、春生じ、夏長じ、秋をさめ、冬かくすこと、年々同じく、日月のめぐり、四時の溫熱涼寒、人物のかたちも性も、萬古より今に至りてかはらず。桃花は年々紅に、李花は年々白きも、皆是天道の誠たがはざるなり。天道にありては誠と云ひ、人に生れつきては信と云ふ。天にあり、人にある、理は一なり。

一仁義禮智の四德は、春夏秋冬の四時になずらへ、信は土用になずらふ。信なければ四德たゝず。一年の功も、春夏秋冬にてそなはりぬれど、土用によりて、四時行るゝが如し。木火金水も、土にあらざれば生せず、天道誠なければ、元亨利貞の四德たゝず。人道も、信なければ、仁義禮智の四德行はれず。誠ならざれば物なしといへるは、是なり。

一信は身を修るのみならず、人を治め、國をたもつの要なり。信なければ、人したがはず。むかし子貢、孔子に國の政をとふ。孔子曰、食を足し、兵を足し、民信之。此意は、國ををさむるに、第一には、食のやしなひ無ければ、民命つゞかず。第二、武のそなへなければ、國土の守なく、敵にあなどり攻められて、民をやすんじ、國を守る事あたはず。第三、上の心に信なければ、民たる者、上を信ぜず。下知法度を出しても、信なければ、法やぶれて行はれず。民上を信ぜざれば、上につかふるに、眞實の道なし。凡此食と兵と信と、三の者は、一もなくてかなはず。子貢又問うて曰、必やむことを得ずして、此三の内、一をすてば、何をか先にすつべきや。孔子こたへて曰、兵をすつべし。如何となれば、食と信と有之、兵粮たくさんにて、士卒萬民上に思ひつかば、兵なくとも、國を守ること堅固なるべし。子貢又問へり。食と信との二の内、やむことを得ずして、一をすてば、何をか先にすつべき。答へて曰、食をすつべし。食なければ民死す。然れども、信なくて生きんよりは、城を枕にして、うるて死し、討死したらんこそ、本意なるべけれ。古より、死は人の常なれば、うるて死すとも力およばず。人もし信を失へば、人道たゝず。かひなき命を生たりとも、人となるの理亡びなば、恥づべきの甚しきなれば、道ありて死したるには、遙かに劣るべし。もし

子貢孔子に云々―論語顏淵篇に、子貢政を問ふ、子曰く食を足し兵を足し民之を信ず、子貢曰く、必ず已むを得ずして斯の三者を去らば何れか先にせん、曰く、兵を去る、子貢曰く、必ず已むを得ずして斯の二者を去らば何れか先にせ

ん、曰く、食を去る、古より皆死あり、民信なくんば立たず。

思ひつかずば―なつき服せずばの意

信なくて、士卒萬民士にしたがはず、思ひつかずば、兵糧たくさんにして、莫大の軍勢ありとも、用にたつべからず。是子貢にこたへ給へる意なるべし。又司馬溫公の曰、信者人君の大寶なり。國は民に保ち、民は信にたもつ。信にあらざれば、民をつかふ事なく、民にあらざれば、國を守る事なし。故に古の王者は、四海を欺かずと云へり。夫國は民を以てたもつ。民したがはざれば、國ありても保ちがたし。民は信を以てたもつ。上より民を欺きいつはりて、信なければ、民上を信ぜずして、思ひつかず。民の心をたもちがたし。

尚書に云々―前註四九頁參照

一賞罰は、必信にすと云ふは、功ある人をば、必恩賞をあたへ、罪ある者をば、必刑罰に行はんと、兼ねて人に示すは法なり。賞罰は人君の權なり。是なければ、善すすまず、惡こりず。君の權威を失へるなり。功あれども賞せず、罪あれども罰せざれば、是民に信なきなり。如此なれば、法やぶれて、民信ぜず。善をするに怠りてつとめず、惡をする事をおそれずして、罰をかす者多し。かく法たゝざれば、國あやふし。又尚書に、令出ては、これ行はしめ、背かしめざれといへり。いふ意は、法を出さば、初よく思案し、僉議して、後までやぶれなき法を立つべし。一たび下知を出し

有子曰云々―論語に出づ、前註、一七九頁參照

請ごへば―うけがへばに同じ、承諾すれば、引受くれば等の意

て、法をたてば、後まで其法を行はしめて、背かしむる事なかれ。そむく者は必つみに行ふべし。如此なれば、いつまでも、法立ちてやぶれず。一たび下知を出して、後まで變ぜざるは、是信なり。もし後まで立ちがたき法ならば、初によく議論して、法を立つべからず。是始を愼むなり。若下知して後變ぜば、是上に信なくして、民信ぜず。君に權なくして、法たゝず。

一有子曰、信近於義、言可復也。いふ意は、人に約して、其言をたがへじと思はゞ、初約せんとする時、其人のいへること、義か不義かをかへりみるべし。義にかなはゞ、約すべし。義にそむかば、約すべからず。かくの如くすれば、其約違はずして、言ふむべし。言をふむとは、約したる言をふまへて、首尾ちがはざるなり。是信を失はざる道なり。老子曰、輕諾者、必寡信。いふ意は、かろ〳〵しく請ごへば、後に其事なしがたくて、約にたがふ事あり。故に信すくなしと也。はじめ約せんとする時、つつしみ思案して、後をはかるべし。故に古人は然諾を愼むとて、人の云ひかけたる事を、かろ〳〵しくうけあはずして、約をおもくす。其事義にあたりて行ふべく、又後日に其約ちがふまじき事ならば、うけごひて約し、必約を變ずべからず。若かろ〳〵

しくうけ合ひて、後日に其義にあたらざれば、約を守りがたくして、前言いつはりとなり、信をうしなふ。一たび言ひかはし約束したる事をちがへて、其首尾あはず、いつはりとなるは、是恥づべき事甚し。人にあらずと思ふべし。若あやまりて、義にあはざる事をうけあはゞ、其不義と不信との輕重を考へて、宜にしたがふべし。いにしへ、尾生と云ふ者、人と約して、其所にまつに、大水出來れども、約したる所を去らで、つひにおぼれ死す。是小信にかゝはりて、身を失ふ。愚と云ふべし。又身をすてても、信を守るべき事あり。時宜によるべし。孟子曰、大人者、言不必信、惟義所在。大人は大德ある人なり。言に信を期せず、唯義をかんがへ行ひて、自ら信を失はずとなり。

尾生―史記蘇秦傳、莊子盜跖篇等に出づ、所謂尾生之信なり

大人者云々―孟子離婁下

一初にうけ合はざるは、しばらく人の心に喜ばずといへども、信に害なし。心よわく又氣かろゞしくして、たやすくうけあひ、後に其約違ひぬれば、甚信に害あり。されど人の爲に謀つて忠あるは、人にまじはる道なれば、なるべき理だにあらば、うけ合ひて心を盡すべし。是忠厚の道なり。

なるべき理だにあらば―苟も其約の遂行せらるべき理由あらばの意

一誠は實理なり。こゝを以て、眞實无妄之謂誠と、程子もいへり。中庸に誠者天之道也といへるは、天道の實理、自然に行はるゝを云ふ。聖人の誠も、亦同じ。つとめずして、自ら實なるなり。又曰、誠之者人之道也といへるは、人の力を用ひて、つとめなすを誠之と云ふ。是卽忠信なり。つとめずして自然なるは誠なり。つとめて實なるは忠信なり。誠は理なり。忠信は心なり。賢人以下は、天道聖人の如くならざれども、つとめて此誠を行ふは、是人の力を用ひて行ふ理なれば、人の道なりといへり。誠にあらざれば、天道人道共にたゝず。故に孔子も、主忠信とのたまふ。忠信は人の誠、誠之者人の道といへる、是なり。程子も、人道は唯忠信にあり。誠ならざれば物なしといへり。又古語に、五常百行非誠非也。其實なければ、此名なし。忠信は、卽人の誠なり。程子も、盡己之謂忠、以實之謂信といへり。心をつくして殘さざるを忠とし、言と行とに實を用ひて、いつはらざるを信と云ふ。心にある誠を忠とし、言行にあらはれたる誠を信と云ふ。

主忠信―前註、一三七頁參照

一人を諫むるに、誠あまりあつて、言たらざれば、感通しやすくして、人に益あり。人の心に怒起らずして、我に禍なし。人をいさむる言は、婉順なるべし。若誠足らずして、言切直に過ぎぬるは、人いかりて、我が諫をうけず、人に益なくして、我に

害あり。誠を以て感ずれば、人も亦信じて、したがひやすし。

一朱子曰、人の誠ならざる所、多くは言の上にありと。信をまもるに、言語の上に心を用ひて、實を以てすべし。

一朋友に交るには、もとより愛敬を用ふべし。然れども、信なければ、愛敬も僞より出て、誠の愛敬にあらず。顏色をやはらげ、容貌をうや〳〵しくするも、僞りかざれるは、愛敬とすべからず。

一子曰、人而無信不知其可也。人の心信實なるは、萬事の基にして、人にまじはるの道なり。若信なければ、萬事すべて僞なれば、人にまじはりて、如何ぞ善なるべき。たとへば大車の荷車に輗なければ、牛の首に車をかくる事ならず。小車の乘車に軏なければ、車を馬にかくる事ならず。車と牛馬とは別の物なれど、輗と軏とあれば、是を以て牛馬に車をかけて引かしむべし。若此ものなくんば、何を以てか車をやるべきや。人にまじはるに信ならざるも、亦かくの如し。人と我とは、二物なり。信實を以て交はれば、互に感通して、道行はる。若信なくして人と交はらば、我人にまことなく、人我を信ぜず。彼と我と感通せず。何を以てか道行はれんや。

人而無信云云—論語爲政篇、前註、三三二頁參照

子路無宿諾—論語顏淵篇に、子曰く、片言以て獄を折むべき者は其れ由か、子路宿諾無し

魏の文侯—本文の事、劉向の說苑に出づ、魏は今の河南開封府の地也

一子路無宿諾とは、一たび行はんと心にうけごひたる事を、延引せず、すみやかに行はれしとなり。是信ある所なり。

一信は心に誠あるなり。心に誠あれば、言行の上にあらはる。言は行をかへりみていひ、行は言をかへりみて行ふ。是言行共に信あるなり。もし身に行はざる事を口にいひ、口に言ふ事を身に行はざるは、是言行共に信なきなり。言ふ事は易く、行ふ事はかたし。故に言をばひかへ、行をば過すべし。是信を行ふ道なり。

一むかし魏の文侯と云ひし君、明日獵に出でんと下知せらる。然るに明日雨ふる。されども前言をたがへじとて、路まで出で、やがて歸られける。是信を民に失はじとなり。周の幽王は、無道の君なり。褒姒と云ふ美女を愛す。此女笑ふ事を好まず。或時隣國に變ありとて、烽火をあぐ。烽火は、相圖の火をあげて、兵を招きよせんがため也。褒姒、烽火を見て大にわらふ。是より褒姒を笑はせんとて、烽火をあぐ。兵ども、變ありと思ひて集れども、其事なし。それより後は、しば〳〵烽火すれども、相圖の火にあらざる事を知りて、兵あつまらず。或時他方より敵せめ來りしに、兵をまねかんため、烽火をしきりに擧ぐれども、兵ども、褒姒が爲の烽火なりと思ひて集らず。幽

王つひに敵のために殺されぬ。是民に信を失へるなり。

一孔子曰、信則人任。信實にして、言に僞なければ、一たび約したること、其首尾たがはず。故に人たのもしく思ひて、打任せて疑はず。是人任するなり。もし信ならざれば、約ちがひて、其いへる事、朝夕にかはりて、たのもしげなし。何ぞ任せんや。

一凡君の、臣にまじはり、國人にまじはり、朋友の相まじはる、吏人の民に對する、皆信あるべし。信なければ、人の交の道たえて行はれず。たのみ無ければなり。

一道を信ずる志は、專一にして厚かるべし。厚からざれば、彼方此方に志うつりて、道を守ること堅固ならず。得る事あれども、必失ふ。然れば、信なければ、初道を好むといへども、終をたもちがたく、巧言にまよひて、邪道におち入りやすし。誠之者、人之道也。誠之之道は、道を信ずること篤きにあり。道を信ずること篤ければ、行之之果す。果すとは行ひとぐるなり。行之之果せば、守之之固しとは、道を守ること堅固にして、失はざるなり。道を信ずること篤からざれは、道行はれず。利欲にひかれ、外物にうつりて、道を守ること堅固ならず。道を信ぜずして、守ること堅固ならずば、萬の才能ありとも、見るに足らず。是學者の、重んずべき所なり。

信則人任―論語堯曰篇に、寛なれば則ち衆を得、信なれば則ち民任す、敏なれば則ち功有り、公なれば則ち説ぶ

一自信とは、自ら道を信ずることあつくして、其守ること堅固なるを云ふ。たとひ世の人こぞりて我を譽むるとも、我に善なくんば、喜ぶべからず。世の人こぞりて毀るとも、我にあやまり無くんば、憂ふべからず。故に、淮南子に、自ら信ずる者は、誹譽を以て遷るべからずといへり。いにしへの聖賢も、小人の誹をまぬかれ給はず。今の人、衆人の誹をおそれ憂ふべからず。然れども、小人の忌憚ることなき者は、又世人のそしりをかへりみず。是君子の自ら信ずるとは、同日の談にあらず。

寶永八年―此年正德と改元

寶永八辛卯年初春日

筑前州　益軒　貝原篤信　撰

益軒十訓上卷索引

（語句は凡て發音に從ひ五十音順に排列す）

ア

○愛
愛と仁　四四五ノ一一
親疎の差等　二二ノ五
本末輕重　四五〇ノ一二
幼者　三二七ノ九
○愛敬
起居の溫和　三六六ノ九
孝弟と愛敬　三四五ノ一
信を本とす　二四二ノ八
信なきは僞也　五三八ノ四
○秋
秋の情趣　三〇〇ノ三
秋の日光　三〇〇ノ八
晩秋　三〇一ノ一三
夕暮　三〇〇ノ一四
○惡
惡事の三因　二三七ノ一四
無知　一〇五ノ六
○惡事
惡と樂　二七一ノ一二
他人の惡　一八〇ノ一二
我身の害　一五〇ノ一四
○惡癖
改善の工夫　一五九ノ一〇
學者の心掛　一〇九ノ六
同　一一〇ノ五
心の病也　二一九ノ一
○暗誦
四書　三七五ノ五
積成　三七二ノ一三
○爭
勝氣　二五〇ノ一
君子は爭はず　二五〇ノ一三
禮至れば爭はず　五〇七ノ九
我も小人なり　二四八ノ四

イ、ヰ

○家柄と材德　三一ノ一一
○家流　三八一ノ一一
○怒
堪忍　三五六ノ一〇
口に表はすな　一八三ノ八
○怒と欲　一三九ノ五
○諫（諫言を見よ）
○逸話
米と粃の話　五四ノ一一
唐の李昉　五五ノ一〇
○僞　三三二ノ一
○衣服
衣服の選擇　五〇一ノ二
苦勞する勿れ　一七六ノ一一
心を表はす　一七六ノ一四

質朴清潔　一七六ノ六
小兒の衣服　三五九ノ七
相應ふ旨とす　一七五ノ一
○淫祀　四六ノ五
○飲食　五〇一ノ一〇
○陰德
義解　四六八ノ一三
細目　四六九ノ四
仁愛の心掛　四六八ノ六
福其中にあり　一三五ノ四

ウ

○歌（和歌を見よ）
○乳母の選擇　三二八ノ一一
○憂ふる勿れ　三一六ノ一四

オ、ヲ

○應對　二四二ノ一二
○臆病　三二六ノ九
○贈物　二五三ノ七
○音樂
其利益　二八五ノ一二
其利害　三四一ノ五
禮と樂　四九八ノ一〇
○恩義　二一一ノ二
犬に如かず　二一〇ノ二
恩を念ふ勿れ　二〇五ノ一四
四恩に報ゆるの道　二〇五ノ七
知らぬは禽獸　四四七ノ一〇
天地の恩　二〇九ノ八
忘恩者は木石　三五五ノ五
○溫順　三五二ノ二
○親　二〇七ノ五
其恩　七一ノ二
同　三二九ノ九
父母と天地　三五八ノ一〇
幼者の教育　三九五ノ八
同　三九三ノ一二
○女　四〇九ノ九
女の四行　四〇二ノ七
敬順
結婚
婚嫁時の訓言
三從　三九七ノ五
十三ヶ條　四〇二ノ一一
職分　三九四ノ六
同　三九五ノ一
清潔　四〇一ノ四
節操　四〇一ノ七
女功　四〇〇ノ一三
女子の教育　三九一ノ一
同　三九一ノ七
同　四〇八ノ一〇
年齡と教育　三九六ノ五
婦人の惡德　四一〇ノ一
無教育　四〇〇ノ七
容貌と女德　三九二ノ三

カ、クヮ

○快樂
價を要せざる樂　二七三ノ一〇
一時の快　二三六ノ八
快樂と知識　二七三ノ二
閑靜の樂み　二八一ノ一

行住坐臥の樂　二七六ノ四
心なき人　二七二ノ一二
心の樂み　三一四ノ一二
此世を樂め　三一八ノ九
慈善の樂み　二七八ノ九
仁を樂しめ　二六七ノ一
修養と快樂　二七〇ノ八
小人と君子　二七五ノ二
善行の樂み　三一五ノ六
善は至樂也　二一七ノ二
太和の元氣　二六八ノ八
太平の樂み　三一三ノ一
他と偕にせよ　二三ノ一四
同　二七一ノ五
樂を知る人　一六九ノ一三
樂と善惡　二七一ノ九
樂の妨　二七一ノ一二
樂の大切　二七〇ノ九
東平王の答　二一七ノ一二
讀書の樂み　三〇七ノ一
同　三一〇ノ一一
內外の樂　一六五ノ九
同　二六九ノ四
花の樂み　三〇〇ノ一
貧者の樂み　二七九ノ五
無事　一七二ノ九
分を樂め　三一四ノ一
滿足　二七七ノ一二
道を樂め　二七〇ノ一四
道の樂み　三〇五ノ五
旅行の樂み　二八三ノ一一
○岳飛の故事　二一三ノ六
○格物致知　九八ノ九
○學問
己を匡正す　一〇九ノ六
學者の態度　一一二ノ一〇
學問と技藝　三三九ノ五
學問と思考　五二三ノ一一
學問に反對する人　一一五ノ八
同　二一六ノ一三
同　二一六ノ九
同　一二六ノ一三
學問に反對する人　三五二ノ六
學問の五要　八二ノ九
同　八二ノ一一
同　八三ノ五
同　八三ノ七
同　八三ノ一二
同　八四ノ一
學問の心得　三五二ノ一二
學問の仕方　一一一ノ一二
學問の種類　八〇ノ一
同　五一三ノ一一
學問の本末　三四八ノ六
驕慢　一ノ一
同　八五ノ一四
同　一〇七ノ七
訓詁と理義　九二ノ九
君子たるを求む　一〇八ノ一二
輕浮　八七ノ五
謙遜　七七ノ七
同　九二ノ一三
今後百年　一一八ノ一〇

三德五倫　六ノ一四
同　九五ノ一一
實踐を重んず　八八ノ一〇
同　一〇一ノ六
自得　五二〇ノ八
師の必要　七五ノ九
人倫の教　二二四ノ五
十年の功　九二ノ四
師友の選擇　五ノ一三
儒教と佛教　七ノ二
誠實　九九ノ一三
聖人の教　七三ノ九
青年時代　九四ノ一四
青年と老年　一一三ノ七
善に歸る　七八ノ八
正しきを擇め　一〇五ノ一二
短句より入るべし　三六五ノ一四
知行の工夫　一〇〇ノ五
知行の二要　八一ノ一〇
治者と大學　一八ノ三
治者の無學　二七ノ一四
道德　四二三ノ二
讀書を第二とせよ　一一七ノ七
讀書の種類　八九ノ七
名を好む勿れ　一一七ノ一一
日常の道　七五ノ六
復習　三四六ノ一
武士の修養　五ノ四
文武の二道　一八ノ八
無用有用の學　一〇八ノ一
名利　八七ノ一一
有用の學　一七ノ一四
立志　七五ノ一三
○蔭言　一七九ノ一二
○過去　一八五ノ四
過去の過を語るな　二三八ノ一〇
將來を戒めよ
○過失　一九九ノ七
改むるを君子と云ふ　一七九ノ六
過失を飾る勿れ　一九九ノ三
顏子は再びせず　三三ノ六
小過を赦す
善き所を見よ　二六二ノ五
禮を以て正せ　四九七ノ三
我過を聞け　二〇〇ノ六
我過を知れ　一三一ノ六
我過は諫にて知る　一九八ノ四
我田の草　二五〇ノ五
○假名　三八九ノ四
假名遣　三八二ノ五
五十音、いろは
○禍福　三一六ノ一〇
古人の禍に比すべし
德を修めて天に任せよ　二三九ノ二
○姦惡　五六ノ七
○緩急　二三六ノ一四
○諫言　一六八ノ一四
怒る勿れ　一八七ノ一三
諫むるに法あり　五三七ノ一二
諫むるに誠あれ　三六ノ七
諫めざるは不忠　二二九ノ六

諫言を悅べ　三五〇ノ一〇
聽くを好まざれば也　三五ノ三
衆智を用ふる也　三五ノ六
善人よく盡言を受く　五二二ノ一
忠臣は國寶　二九ノ一
直諫と諷諫　三六ノ一三
直接を避けよ　一九〇ノ八
天下の美德　五一七ノ二
分別　一八九ノ六
誠あつて言少なかれ　一八九ノ一二
無益の諫言　一九〇ノ四
聾君瘖臣　三七ノ七
○閑靜　二八一ノ一
閑靜の樂み　二八一ノ六
貧居の樂み
○寬大　一四六ノ一三
恨む勿れ　一六九ノ八
同じきを求むる勿れ　一六九ノ四
頑なるを怒る勿れ　二七二ノ六
寬恕　一六二ノ一〇
寬容
人從ひ易し　二五八ノ一
世に處するの道　二六四ノ七
○堪忍
怒と欲を去れ　二一五ノ五
事を破らず　一四五ノ三
忍べば辱なし　二四六ノ一四
○官吏　五六ノ五
官祿の支給　三〇ノ一
宰相及地方官　四三ノ一
商をなす可らず　三二ノ一〇
世職の弊　五〇ノ一二
法律の私用

キ

○義　四八八ノ一二
危きを見て命を致す　四九〇ノ七
得るを見て義を思ふ　四八一ノ一〇
義と仁　四八二ノ二
同　四八六ノ七
義と勇　四八四ノ四
義と利　四九〇ノ一四
義と利　四七九ノ一
義の意義　四九一ノ八
君子の行　四八八ノ八
無適無莫
○飢餓　四四ノ九
○技藝　一一三ノ三
○喜怒　二五八ノ七
○義務　二〇三ノ六
○勤儉　一一ノ八
○禽獸の五常　四二七ノ三
○禁制
惡習慣　四七ノ二
卑猥　四七ノ一四
法令を恐れしめよ　四九ノ一二
○金錢財寶　二五ノ五
○勤勉　三二ノ八
官職　二三八ノ八
勤勉と謹愼　四九八ノ四
勤勉と健康　一〇六ノ六
積成の功　二二六ノ二
天道

○逆境　二二六ノ五
早き中に勵め　二三〇ノ一一
○客人　二五五ノ一四
○急忙　一六〇ノ五
過多し　一四三ノ一二
退屈の基
○窮民　三九ノ七
鰥寡孤獨　四五ノ一
窮民の哀訴
○毀譽　二六〇ノ五
毀譽を慎め　三五七ノ二
同　五二一ノ四
巧言　一八七ノ三
善を擧げよ　一五二ノ七
唯道理を守れ　一五二ノ一二
同　三三ノ七
妄に信ずべかず　二五五ノ二
明察を要す　一八六ノ一二
面前と背後
○教育　三三二ノ一
僞を戒めよ
義方の教　三二九ノ四
教育上の注意　三二五ノ一〇
謙讓　三三七ノ七
講書の方法　三四五ノ一
孝弟　五三ノ六
士道　三二四ノ五
人倫　三九六ノ五
女子の教育　四〇〇ノ七
同　四〇〇ノ一三
同　四〇八ノ一〇
同　五一ノ一三
德教と刑罰　六ノ一
年齡と教課　三四二ノ八
富者の教育　三四三ノ二
同　三五五ノ一二
父兄の心得　三二九ノ九
父母の嚴格　五二ノ八
無智の罪　三ノ七
幼者は早く教へよ　三三二ノ一四
同　三六〇ノ四
同　四ノ一〇
幼者の教育　三二五ノ六
同　三三〇ノ一一
同　三五八ノ一〇
同　三六九ノ一一
同　三七一ノ一二
讀方教授法　三七三ノ九
讀方と意義　三三九ノ四
六藝　三三五ノ一二
禮儀
○教課　三六三ノ一
年齡と教課　三六三ノ六
同　三六三ノ九
同　三六六ノ三
同　三六六ノ一一
○驕慢
學問の妨　一ノ一
諸道の妨　三三六ノ一〇
早く戒めよ　三三六ノ三
禍の本　一五三ノ六
○恭敬と和樂　一五七ノ九

○虛圓正緊　三八三ノ一四
○虛僞　一三八ノ一二
○義理　二一四ノ六

ク

○愚者の損失　五一八ノ六
○君子　二三二ノ四
君子と小人の別　二三二ノ一〇
孟子の語
○君臣　二九ノ一
君の德臣の德
○君主　二〇七ノ一四
君の恩　二二ノ一二
儉　五四ノ八
讒言　一六ノ五
人民本位　一八五ノ一二
下の言を聞け　二五ノ一一
奢侈　二三ノ一四
民と偕に樂む　五二ノ三
○君父と夫

ケ

○敬　五〇〇ノ一二
居常敬心あるべし　二五四ノ四
長者老者を敬へ　五〇三ノ三
禮なきは野也　四九五ノ一
○輕信　一八四ノ二
虛言を傳ふる罪　一八四ノ一二
同　三六七ノ一二
○經書と傳書
○刑罰　五一ノ一二
刑罰と德教　五〇ノ七
罪人に對する同情　五〇ノ五
八十以上七歲以下　五〇ノ九
宥恕　八七ノ五
○輕浮　四〇九ノ九
○契約（誓約を見よ）
○結婚　二三五ノ一〇
○決斷　二三六ノ三
思慮を要す　三八ノ九
猶豫なく決行せよ
○權威

コ

○言語（言葉を見よ）
○言行　二〇一ノ一四
言、行に過ぐるな　五三九ノ三
言行上の信　一九四ノ一四
視聽言動　二二九ノ一四
思慮　四二四ノ一二
○元亨利貞
○謙遜　七七ノ七
學問の基　五〇七ノ五
謙と滿　一三〇ノ三
天下の美德　二五四ノ九
卑屈に流るな　三六七ノ四
○元服
○儉約　二二ノ一二
君主の美德　一〇ノ四
儉約と吝嗇
○高位　二五三ノ三
○行爲　二三三ノ八
○光陰　三七四ノ一
惜むべし

今日　二七六ノ一四
空過せざれ　二八〇ノ一
同　三七七ノ二
暮れゆく年　三〇三ノ四
最重の寶　九三ノ四
樂みて送るべし　二七九ノ一一
老死遠からず　三〇五ノ九
○公益　一九ノ一〇
○好惡　三三三ノ一四
好惡を正せ　三三四ノ一〇
同　一五七ノ四
○後悔　七ノ一四
○孝行　二〇七ノ五
孝經の首章　三五二ノ二
父母の恩　四五二ノ一三
同
○剛毅木訥
○交際　一二五ノ五
愛と敬　二四一ノ七
交際の要道　二四四ノ五
自反　二四三ノ九
恕
小人　二六三ノ三
善惡の友　二五一ノ四
選擇　二六三ノ五
誠を旨とすべし　二六二ノ一二
誠なき人　二六一ノ一一
禮を厚うせよ　二四四ノ一三
和平　二四三ノ一
○孔子　四二九ノ三
仁の一字　四二八ノ四
其教義
○孝弟　三四六ノ一〇
其意義　三六四ノ六
道の本也
○幸福（快樂參照）　二八一ノ一〇
清福　二八二ノ一一
同　二八三ノ一
同　一六一ノ一四
求むれば禍來る
○交遊　三三八ノ四
友の選擇　五四〇ノ五
皆信あるべし　一四九ノ一
○五官

○國家　四六二ノ九
君主の仁　三四ノ一二
國家の大患　五五ノ一四
秦の天下　五六ノ一四
創業の辛苦　三四ノ七
亡國の原因
○克己　四五七ノ一
仁と克己　一四四ノ三
天理と人欲
○穀物　四五ノ七
常平倉、義倉　二六ノ六
產出と食糧　一八二ノ二
○誇言　三一四ノ七
○古今　五一八ノ一四
今の樂み　二四九ノ三
古今に通ぜよ　一四九ノ一
○心　五二八ノ七
面の如く異なり　一九五ノ七
五官の主也　四一八ノ二
心と容貌
言行の本
人心の四端

從容不迫　二八〇ノ一〇
青天白日の如かれ　一四四ノ九
善の端　四六一ノ八
萬事の根本　一一九ノ一
身の主　二一ノ七
慾情と道心　一二〇ノ一
和平　二八〇ノ七
和樂　一四二ノ一三
同　二七五ノ六
○志　一五二ノ二
○心の聾啞　二五七ノ一
○五常の解　六八ノ三
○言葉
安靜　一七九ノ一〇
怒　一八三ノ八
一言の過　一八〇ノ四
含蓄　一七八ノ四
口の愼　一七七ノ七
虛言　一七八ノ一〇
言語人を表す　五二八ノ三
語少かれ　一八三ノ四
誇張　一九〇ノ一三
信あるべし　五三八ノ二
小兒の言語　三六二ノ一
思慮　一七八ノ一
長上への挨拶　一九一ノ一一
悅怒と　一〇九ノ一一
○五倫五常　四一三ノ一
義解　四二七ノ三
五常と禽獸　四三二ノ一二
五常の和訓　四四六ノ一三
五倫を愛すべし　四二二ノ七
善惡の根元　四二二ノ一〇
同　四三〇ノ三
外に道なし
サ
○才學　三〇八ノ一二
○祭祀　二一一ノ一一
○宰相　二九ノ一一
賢者功を急がず　三〇ノ一
資格　三三ノ一四
職分
唐の李昉　五五ノ一〇
○災難　一五四ノ五
○材能　三一ノ七
○裁判　四八ノ三
公平明察なれ　四八ノ一二
注意すべき事柄　四八ノ一〇
賄賂
○酒　三六〇ノ一四
酒の戒　二八五ノ三
利害　一六一ノ二
○些事　四九七ノ五
○作法
○讒言　五四ノ八
國家の災　五二二ノ八
浸潤膚受
○讒謗　一八一ノ三
天に唾吐くなり　一八一ノ八
卑怯の甚しき也　一八〇ノ一三
不仁の甚しき也　一四七ノ一二
自ら顧みよ　一八一ノ一二
禍を招ぐ

シ

○師
學問に缺く可らず　七五ノ九
師に對する尊敬　一〇二ノ五
師の恩　二〇九ノ一
○思案　一四一ノ八
○詩歌　三一〇ノ一
○四季
景物　二八七ノ一
四季と四德　四二四ノ一二
同　五一九ノ五
四季の德　三〇四ノ三
情趣　三〇三ノ一四
天道の誠　三〇五ノ五
○自己
己を責めよ　二二二ノ三
自己に嚴なれ　二二一ノ一二
同　二二一ノ一四
○自讃
避けよ　一八二ノ五
侮蔑を招く　一八二ノ一〇
我才能　一八二ノ八
○私心
道の妨　一九ノ一〇
○自信
毀譽　五四一ノ一
非難　二三三ノ一二
○四書の字數　三七五ノ一〇
○慈善
善行の樂み　三一五ノ六
樂み　二七八ノ九
貧民救助　四六六ノ三
同　四六七ノ七
同　四六八ノ九
○自然界
秋　二九七ノ一
四季の樂み　二八七ノ一
其快樂　二六九ノ一四
同　二七三ノ一〇
夏　二九三ノ四
春　二八八ノ一
冬　三〇二ノ三
○時俗　一五四ノ一
○自知　一五八ノ五
○實行　二七ノ八
○質素　四五ノ一三
○質問　一一一ノ七
○師弟
師の人品　三三七ノ八
弟子の道　三四六ノ四
十歳師に隨ふ　三五四ノ一一
○支那の聖教　四三〇ノ九
○七情　一四〇ノ七
○慈悲
殺生を好む勿れ　四六三ノ三
妄に殺生せず　四六三ノ一二
○志望　一一三ノ一四
○自暴自棄
過を改めざる人　一九八ノ一
剛惡と柔惡　四二六ノ八
○信
王者の信　五三九ノ七

軻軻の譬　五三八ノ七
政事と信　五三二ノ一四
信と土用　五三二ノ九
信の義解　五三〇ノ一一
誠實　三四七ノ七
○仁
愛を本とす　四五二ノ一〇
己と他人　一二九ノ一二
果實の譬　四三九ノ四
義解　四三三ノ一
孔子の所說　四五五ノ一四
克己復禮　四五七ノ一
五常を兼ぬ　四三七ノ九
五常となる　四一五ノ一三
仁を知る道　四六一ノ一四
仁を樂しめ　二六七ノ一
仁心と仁政　二一ノ一一
仁者に私欲なし　一二八ノ一三
仁恕公私の別　四四四ノ一四
仁遠からず　四七五ノ一三
仁と義　四一七ノ三
仁と義　四八一ノ一〇
同　四八二ノ二
仁と義禮智　四五五ノ七
仁と元　四二五ノ一二
同　四六一ノ二
仁と孝　四五一ノ一一
仁と四德　四四三ノ五
仁と恕　四三七ノ五
仁と博愛　六八ノ三
仁の意義　四六二ノ四
仁の字の出典　四五八ノ一一
仁の體用　四四五ノ一一
仁は愛にあり　一七ノ一〇
智者と仁　五五ノ三
長久の基　四五九ノ六
程子の說　四四九ノ八
萬善を統ぶ　一二六ノ六
人の心也　四四〇ノ四
同　四五八ノ一四
孟子の說　四七五ノ一三
幼者の不仁　三三二ノ七
○仁愛
心掛が大切也　二二〇ノ六
他は見るに足らず　一六七ノ一一
○心學　九一ノ九
○仁義
心の中に存す　四二二ノ一
仁義を以て利とす　四八三ノ一一
仁義と陰陽　四一七ノ一二
○愼思　八三ノ七
○仁心　四七四ノ七
○仁者
必勇あり　四五三ノ三
私心なし　四四一ノ三
仁者の心　四三七ノ一三
天道に從ふ　四七六ノ一
人我の隔なし　四七五ノ六
○人生
朝露過客の如し　三一五ノ一四
此世を樂め　三一八ノ九
旅人の如し　二八〇ノ一
貧富の分　三一一ノ一二

再び來らず　一一四ノ九
老死遠からず　三〇五ノ九
○親屬　八ノ五
○人道十條　四八九ノ六
○秦の天下　五五ノ一四
○人物
鑑識の法　三〇ノ一三
知る事難し　二六三ノ一三
任用の道　三一ノ一四
○審問　八三ノ五
○臣民　五六ノ一一
○人民
僞は上より教へらる　三九ノ三
上をそしるな　一八五ノ八
○信用　五四〇ノ二
○人倫　一二七ノ一
○奢侈　二五ノ一一
○師友　五ノ一三
○習慣
善惡と習慣　三五二ノ九
天性に近し　一〇四ノ七

○宗教
敬遠主義　五一四ノ九
敬神と迷信　三五四ノ四
天道を敬せよ　七ノ七
○習字
眞行草　三八七ノ二
習字上の法則　三八二ノ八
同　三八三ノ一
同　三八三ノ四
同　三八三ノ一二
入木　三八五ノ一三
書道の本領　三七九ノ一
初歩の文字　三八二ノ二
硯の水　三八六ノ七
大字と小字　三八四ノ七
手本の選擇　五ノ二
同　三六五ノ一〇
同　三七九ノ九
同　三八〇ノ八
唐流の筆法　三八八ノ七
肘と指　三八五ノ五

筆力と字形　三八五ノ一四
筆、墨、硯　三八六ノ四
筆の執り方　三八五ノ八
同　三八六ノ一一
筆のひたし方　三八六ノ九
文字の結構　三八四ノ一四
流派　三八〇ノ一二
同　三八一ノ六
同　三八六ノ二
腕法　三八六ノ一二
○修身
言行の二に歸す　一九四ノ一一
天理人欲の勝負　二〇ノ五
○衆人　五二五ノ一一
○十分　一五一ノ一一
○修養
義に遷る道　四八七ノ四
修學の心得　三五二ノ一二
樂を知らず　二七〇ノ八
ひまを惜め　三七七ノ三
六事の修養　三四八ノ一

○儒學
人道と天地道　八〇ノ一一
本領　四二九ノ九
有用の學也　一〇八ノ一
○順境
却て禍也　二三〇ノ一一
下り坂轉び易し　二三一ノ五
○恕
公心私心の別　四四四ノ五
同　四四四ノ一四
仁を行ふ道　二四三ノ九
恕と仁　四四三ノ五
恕の二道　四四一ノ一一
○小學　九七ノ一
○小兒(幼者を見よ)
○商賈と官吏　四三ノ一
○賞罰
治者の大權　四九ノ三
信賞必罰　五三四ノ八
○常平倉　四五ノ七
○私欲
却て愚也　一五五ノ一二
心を昧ます　一六八ノ一〇
禍の本　一六一ノ五
○私欲邪念　一二四ノ一
○職分　一五ノ一
○處世　一四六ノ七
○助言　二一三ノ六
○思慮
豫め考へよ　二二七ノ一一
悔なきを勉めよ　一六〇ノ一〇
熟思審處　五二三ノ三

ス

○睡眠　一五五ノ五
○數學　三四〇ノ九
○鄒の穆公　五四ノ一一

セ

○聖賢の教　一〇三ノ一三
異端を混ずる勿れ　一〇二ノ八
備はらざるなし
○性質
性質に應じて教へよ　二四八ノ一二
本性は善　七八ノ八
○誠實
心の主　一三七ノ一
誠實と學問　九九ノ一三
誠實と材能　三一ノ七
天地を動かす　一三七ノ一四
○聖人
聖人の教　七八ノ一四
聖人の恩　二〇八ノ六
聖人の道　一一四ノ一三
萬世の師　七三ノ九
我則とせよ　二二一ノ一〇
○成熟　四五ノ四
○政治
仁心と仁政　二一ノ一一
仁者の心　三八ノ一三
聖賢の教　一八ノ八
同情の必要　一七ノ二
民を富ますべし　四一ノ四

治國の三要道　二〇ノ一〇
法は嚴なるべし　三八ノ一
老者窮者　三九ノ一三
○正道は捷徑　二六ノ一四
○青年　九四ノ一四
○清福
其最上　二八二ノ一一
其種類　二八一ノ一〇
富貴を羨まざれ　二八三ノ一
○生命と刑兵歲病　四三ノ七
○誓約
輕々しくする勿れ　一七八ノ一四
然諾を愼め　五三五ノ六
同　五三六ノ一〇
宿諾無し　五三九ノ一
○節義　二〇二ノ七
○殺生　四六三ノ三
不仁也
殺す可くして殺すは
道也　四六四ノ六
○節制
學問の試驗　一四一ノ一三
慾は大敵也　一五九ノ六
修身の要　二二二ノ一四
○善
一日も忘る勿れ　二三五ノ五
善行の動機　一五〇ノ八
善に進むの法　八五ノ二
善は至樂也　二一七ノ二
誹を恐るゝな　一五三ノ三
同情と財　二二〇ノ一四
東平王の答　二一七ノ一二
人の益を計る也　二一五ノ一〇
貧富に拘らず　二三九ノ五
富貴貧賤　二三三ノ二
報を求むるな　二六二ノ一二
○善惡
私慾　二一四ノ二
習慣　三五二ノ九
修養　四八七ノ四
小事　二二四ノ一二
小善　四七三ノ二
小を謹め　二〇二ノ五
善心惡心　四七二ノ六
他人の行　二〇〇ノ二
天道善に與す　四七三ノ一〇
上り坂下り坂　二四〇ノ三
反省　三五一ノ九
道の初　一九三ノ一
最も難し　二二三ノ四
○先見の明　一三六ノ七
同　五二一ノ一二

ソ

○躁急　二五七ノ八
○創業の艱難　五六ノ一四
○雙鈎　三八三ノ一
○藏鋒　三八五ノ一二
○惻隱　四五五ノ七
○祖先　八ノ三

タ

○大學

成人の學　九七ノ七
大學の八條目　九八ノ九
○短氣　一四六ノ一
○男女の別　四〇一ノ七
○耽溺　一三一ノ一三
○丹田　二四七ノ七
○談話（言葉參照）
老人の談話を傾聽せよ　三五七ノ六
我のみ語るな　一九二ノ二

チ

○智・知識
快樂と知識　二七三ノ二
心の明　一四二ノ五
自知　五一五ノ一三
自知は難し　二三二ノ一二
善惡の區別　一〇四ノ一四
先見の明　五二一ノ一二
他人の智　一七一ノ二
知を求むる工夫　五一三ノ五
近きより遠きに及ぶ　八五ノ九
知識と行爲　八一ノ一〇
知と行　五一一ノ七
知と智との文字　五一二ノ五
智と冬　五一九ノ五
智と道　五一一ノ一
知の義解　五一四ノ三
知の大小　一〇七ノ三
德行と智　五二六ノ五
人を知るにあり　五一二ノ七
人の大寶　五二九ノ一二
○知己　一〇〇ノ五
○知行　一〇〇ノ一三
學問の二要　二二七ノ八
同　五二四ノ二
相互に補ふ　五二一ノ一
○智者
衆智を用ふ　一〇〇ノ五
是非の分別　一〇〇ノ一三
○治者　二二七ノ八
上に習ふ下　五二四ノ二
民の父母　五二一ノ一
同　二〇ノ七
天の代官　一三二ノ一二
無學は天下の患　一三三ノ一一
○沈靜　一五ノ一
○枕腕　二七ノ一四
○忠實　一七〇ノ一
○中庸　三八六ノ一二
道の存する所　二五六ノ一〇
禮の中庸　一六三ノ九
○長坐　五〇六ノ一三
○長所　二五九ノ九
天下に廢る人なし　二五二ノ一一
人の長をとれ　二五一ノ一四
○長上　五六ノ七
其前には姦惡知れず　三五五ノ五
長上に溫順なれ　二三ノ五
○貯蓄　三九五ノ八
○女德　三九二ノ三
女の四行
容貌と女德

和順の二　三九三ノ四
○治亂　三一三ノ一

ツ

○月の美　二九七ノ五

テ

○提腕　三八六ノ一二
○手紙　三八八ノ五
○天災　五〇〇ノ九
○天性
五常の性　四一三ノ一
性は善也　四二七ノ一二
○天地
天地と人　六七ノ一
同　四一六ノ四
天地と父母　七一ノ二
天地に仕ふる道　六九ノ一一
天地の恩　二〇六ノ一一
同　四二一ノ八
同　四四六ノ二
天地の恩　四四七ノ一〇
天地の生理　四三九ノ一二
天地の道　四二八ノ二
天道を畏れよ　一二二ノ一一
天道と義務　七ノ七
天道の誠　四二六ノ三
動と靜　二一九ノ六
○天變地異　五三ノ九
○天命
君子は天命を知る　五二五ノ一
善惡の報　一七一ノ一一
不幸は天命　二七二ノ九
○天理　一五三ノ一〇

ト

○動機　四二ノ一
○道義　七ノ一
古今不變　二一ノ一
之を標準とせよ　一五ノ一
自ら正せ　二二ノ一
○同情　一七ノ二
政治の要　四七四ノ七
人に忍びざる心
○道德　一〇八ノ一二
學問の目的　二〇八ノ一二
四恩　四二七ノ一〇
人性は唯仁　四五二ノ五
仁と義禮智信　四一六ノ四
其根本は天にあり　一五六ノ一二
尊むべく樂むべし　二二三ノ六
道德及作法　二七〇ノ一四
道德と快樂　二七三ノ六
同　九五ノ一一
道德と學問　二六〇ノ一四
○同僚　八四ノ一
○篤行　五三〇ノ四
○得失長短
○讀書　一〇一ノ九
學問の第二義　三七二ノ七
句讀　三七四ノ九
經典の記誦　三〇九ノ一〇
師友

書籍の種類　八九ノ七
書籍の取扱　三六八ノ七
熟誦すべき典籍　三七四ノ一三
熟讀、三到　三六九ノ三
至樂　一一〇ノ一三
同　三〇七ノ一
讀書と年齢　三六九ノ一
讀書の順序　三七〇ノ三
讀書の樂み　三一〇ノ一一
讀書の六助　三〇九ノ五
復讀　三七一ノ四
復習　三七二ノ一〇
夜間の讀書　三〇九ノ一二
○貪婪　二六ノ一〇

ナ

○夏　二九四ノ一一
盛夏　二九六ノ三
夏の苦み　二九三ノ四
夏の風物　二九五ノ八

ニ

○入木　三八五ノ一三
○日本
其國風　四三一ノ七
東夷也　四三二ノ四
○忍耐　三五〇ノ二
耐煩の二字　二八四ノ八
忍は衆妙の門

ネ

○年齢　三六五ノ五
教育　六ノ一
教課　三六三ノ一
同　三六三ノ六
同　三六三ノ九
同　三六六ノ三
同　三六六ノ一一
刑罰　五〇ノ五
讀書　三七一ノ八
不天、古稀　三一一ノ三

ノ

○農業　四〇ノ一三
農と田地　四〇ノ三
農は國本也

ハ

○博愛　四三七ノ五
○博學　八二ノ一四
○花
秋の花　二九八ノ一〇
花の樂み　三〇〇ノ一
春の花　二九〇ノ一
○反省
己を責めよ　二〇一ノ六
修養の法　一七〇ノ一二
反省と忍容　一六〇ノ七
人を怒るな　一四四ノ一三
○判斷　五二八ノ七
內心と外貌

人を知るの道　五二七ノ八
同　五二八ノ三
眸子　五二九ノ七
○煩勞　二三四ノ三
○早起　四九七ノ一二
朝起と家運　二二六ノ一四
一家の興廢
○春　三〇一ノ六
秋との優劣　二八八ノ一
早春　二八九ノ二
中春　二九二ノ五
晩春

ヒ

○人　四四〇ノ六
仁を失へば人にあらず　一二八ノ七
天地に則れ　七二ノ一
萬物の靈　七二ノ七
人と生れたる幸　七二ノ一三
同

人と生れたる幸　七三ノ六
人と天地　六七ノ一
人の職分　一〇二ノ八
人の道　六九ノ一一
○非難　二三七ノ一一
○批判　一八六ノ六
○批評　一九二ノ一〇
○誹謗　二四五ノ一〇
○貧賤
不義の富にはまされり　一六三ノ四
○貧富　二七九ノ五
快樂と貧富　三〇八ノ一二
才學と貧富　三四二ノ一
富家の子　三四二ノ七
富者の教養　三四三ノ二
同　三一一ノ一二
分を樂め

フ

○富貴　一五八ノ二
○風俗　四七ノ二
惡習慣を禁ぜよ　二〇ノ一〇
上に習ふ下　四一ノ一
○賦役　一八二ノ一四
○不具者　三五五ノ一二
○父兄
○武士　八ノ一四
士の本務　一一ノ三
四民の長　五ノ四
文武の修養　二二四ノ四
良士　二八六ノ一
勇氣
○不仁　四三七ノ一三
醫書に所謂不仁　四七四ノ三
不仁者
○佛教　四七一ノ九
佛事盛に過ぎざれ　七ノ二
佛徒は天地の罪人
○筆　三八四ノ一一
惡しき筆、よき紙　三八六ノ九
墨の染め方

筆の執り方　三八五ノ八
同　三八六ノ一一
○父母（親を見よ）
○文學　一一二ノ七
○文法　三九〇ノ三
○冬
晩冬　三〇三ノ四
冬の景色　三〇二ノ三

ヘ

○偏頗　二五九ノ二

ホ

○放逸　三四九ノ四
○朋友
心合ふ人　二五五ノ七
選擇　二六〇ノ一一
同　三三八ノ四
友の感化　二五一ノ四
○法律
律令格式　五〇ノ一三
禮と法　五〇二ノ五

マ

○誠　二七七ノ一二
○滿足　二七四ノ一二
快樂　一五二ノ五
心の富
貧富

ミ

○道　五四〇ノ七
堅く守れ　四二八ノ四
天地の道、人の道　二二〇ノ一
萬事に道あり　五〇ノ一三
○明法博士

メ

○目　五二九ノ七
○名利　八七ノ一一

モ

○孟子　四二九ノ三
○模範　二二二ノ六
○文字
四書其他の字數　三七五ノ一〇
世間通用の文字　三八八ノ一一
筆畫を正せ　三八八ノ一
文字の必要　三七八ノ三

ヤ

○夜業　四九七ノ一〇
○約束（誓約を見よ）

ユ

○勇氣　四八六ノ七
義無きの勇　四五三ノ三
仁者勇あり　二八六ノ一
眞の勇者　三三五ノ五
○遊戲

ヨ

○用意

豫め計れ　二三四ノ八
同　二三四ノ一〇
同　二三四ノ一四
○用心　一四八ノ四
○幼者
衣食住の注意　三三七ノ九
僞を戒めよ　三三二ノ一
衣服　三五九ノ七
乳母の選擇　三二五ノ一〇
同　三二八ノ一一
艱難　三三〇ノ一一
義方の敎　三二九ノ四
敎育　三二五ノ六
言語を愼め　三六二ノ二
謙讓　三三七ノ八
好惡を正せ　三三三ノ一四
同　三三四ノ一〇
孝弟　三六四ノ六
師に隨へ　三五四ノ一一
稱讃　三三六ノ一〇
善惡に染み易し　三二三ノ一

友の選擇　三三八ノ四
農工商の子弟　三五九ノ一二
早く敎ふべし　三三二ノ一四
同　三六〇ノ四
富貴の子弟　三四二ノ一
不仁を戒む　三三二ノ七
父母　三五六ノ一〇
同　三二九ノ九
遊戲　三三五ノ五
誘惑　三五六ノ五
老人　三五七ノ六
○容貌　三二八ノ七
心と容貌　三九二ノ三
容貌と女德　五二八ノ七
○慾望　三九二ノ三
慾望と過惡　五〇三ノ七
禮を以て節す　四九四ノ一一
○世の中　二六一ノ六
○夜　二三六ノ一二

リ

○利益　二二五ノ二
正當の利　一六八ノ五
他と共にせよ　三九八ノ三
○離婚　七五ノ一三
○立志　八一ノ三
學問の本　一一ノ八
大且高かるべし　四八七ノ一四
○立身出世　四九〇ノ七
○利得　一九二ノ四
義を思へ　一二五ノ一二
同　一五四ノ一二
○流言　九九ノ一三
○良心　七八ノ一四
○凌辱　五一七ノ一三
○良知　二八三ノ一一
學問の基礎　
聖人の敎　
天性なり　
○旅行

レ

○禮
義解　四九二ノ一
質と文　四九六ノ九
端正　二四一ノ一
中を貴ぶ　五〇六ノ一三
天理の節分　四九三ノ九
無禮　二四六ノ五
禮有るを以て人とす　四九五ノ六
禮あれば爭なし　五〇三ノ一二
禮儀の敎　三三五ノ一二
禮と樂　四九八ノ一〇
禮と天地　四九九ノ八
禮と法　五〇二ノ五
理の節分也　五〇四ノ七
禮の本末　五〇四ノ一二
同　五〇六ノ四
禮は人情に本づく　四九五ノ一〇
和睦の道　二四五ノ一四
○歷史　三七六ノ六

ロ

○勞苦　九二ノ六
○老人
秋夜の懷古　三〇一ノ三
白髮を喜ぶ　三一七ノ三
老死を嘆かず　三一七ノ七
老者の心得　三一五ノ一〇
老年と樂　二七六ノ一〇
○老草　三八二ノ一〇
○露現　二三七ノ五

ワ

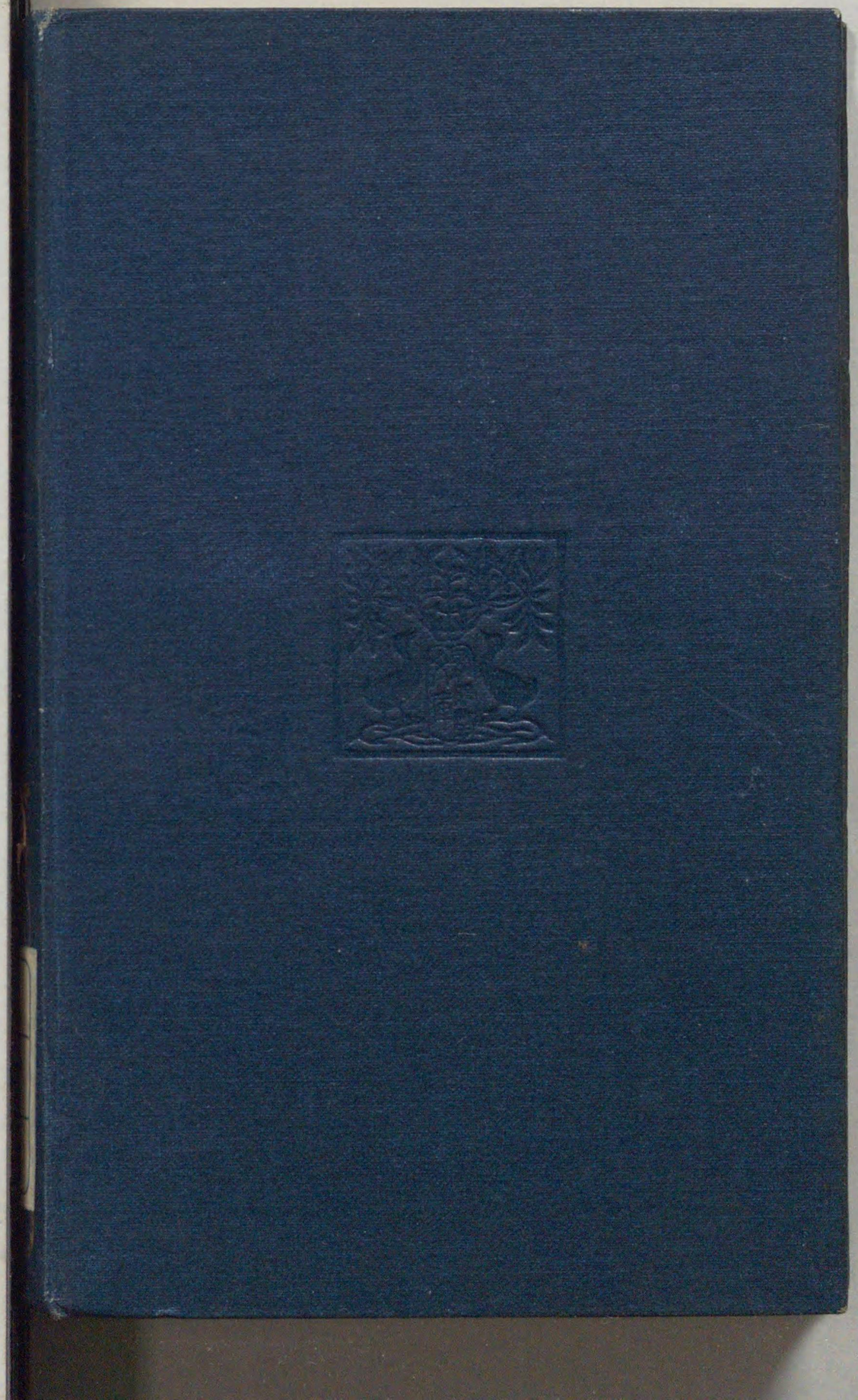
○賄賂　四八ノ一〇
○和歌
上見れば(古歌)　二二二ノ一二
うき事は(古歌)　二七五ノ一一
うき世には(土御門院)　二七五ノ九
思ふこと(古歌)　二五五ノ一〇
とにかくに(人丸)　三四一ノ一三
ならひぞと(兼好)　一五四ノ一一
同　二七五ノ一三
春は唯(古歌)　三〇〇ノ六
人の親の(古歌)　三三〇ノ一
よしさらば(古歌)　二九〇ノ八
世の中を(古歌)　三一六ノ六
○禍　三一六ノ一〇
○和樂　一六六ノ一一

益軒十訓索引 終

大正六年六月十五日印刷
大正六年六月十八日發行

有朋堂文庫
益軒十訓上卷（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎
印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

不許複製